中期目標の達成状況報告書

2020 年 7 月

東京芸術大学

目　　次

Ⅰ．法人の特徴　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ．中期目標ごとの自己評価　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

１　教育に関する目標　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

（１）中期項目１－１　教育の内容及び教育の成果等 ・・・・・・・4
（２）中期項目１－２　教育の実施体制等 ・・・・・・・・・・・・13
１－２－１・・・・・・・・・・・・・・・13
１－２－２・・・・・・・・・・・・・・・20
（３）中期項目１－３　学生への支援 ・・・・・・・・・・・・・・22
（４）中期項目１－４　入学者選抜 ・・・・・・・・・・・・・・・27

２　研究に関する目標　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

（１）中期項目２－１　研究の水準及び研究の成果等 ・・・・・・34
（２）中期項目２－２　研究実施体制等 ・・・・・・・・・・・・・45

３　社会との連携や社会貢献及び地域を志向した

教育・研究 に関する目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

３－１－１・・・・・・・・・・・・・・52
３－１－２・・・・・・・・・・・・・・59

４　その他の目標 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

（１）中期項目４－１　グローバル化 ・・・・・・・・・・・・・・63
４－１－１・・・・・・・・・・・・・・63
４－１－２・・・・・・・・・・・・・・69
４－１－３・・・・・・・・・・・・・・75
４－１－４・・・・・・・・・・・・・・79
（２）中期項目４－２　附属学校 ・・・・・・・・・・・・・・・・85
４－２－１・・・・・・・・・・・・・・85
４－２－２・・・・・・・・・・・・・・91
（３）中期項目４－３　男女共同参画推進 ・・・・・・・・・・・・94

Ⅰ　法人の特徴

大学の基本的な目標（中期目標前文）

東京芸術大学は、創設時から１２０余年に亘り、我が国の芸術文化の継承・発展に寄与するとともに、国際社会を指向した教育研究を展開し、国際舞台で活躍する数多の芸術家・研究者を育成してきた。

本学では、今後、「グローバル化」や「少子高齢化」等の社会の急激な変化においても、これまでの伝統と遺産を継承するとともに、国際プレゼンスの更なる向上を目指して、学長の確固たるリーダーシップの下、学生及び教職員、卒業生等関係者を含めた“オール藝大”体制を構築し、グローバル展開を基軸とした大胆な大学改革・機能強化を断行することとし、長きに亘り培ってきた国際的な強み・特色を武器に、我が国の芸術文化潜在力を活かした様々な戦略を策定・実行することで、“世界最高峰の芸術大学”への飛躍を目指すとともに、我が国の芸術文化力向上に資する。

併せて、本学の教育研究力強化や国際プレゼンス向上等に資するための国内外へのネットワークやマネジメントシステム等を確立すべく、持続可能型の大学経営基盤の構築・拡充を図る。

１．教育に関する基本的目標

世界一線級のアーティストユニット誘致等により、世界最高水準の教育研究体制を確立し、少人数教育の充実や大学院実践型プログラムの強化を図るとともに、国際共同カリキュラムや飛び入学をはじめとする早期教育の実施等、世界トップレベルの人材育成プログラムを構築し、国際舞台で活躍できる卓越した芸術家・研究者を育成する。

２．研究に関する基本的目標

伝統文化の継承と新しい芸術表現の創造を推進するとともに、本学が有する芸術文化力を基軸とした研究シーズを活かし、分野横断的な学際的研究を拡充・展開するほか、“芸術と科学技術の融合”による革新的なイノベーション創出“アートイノベーション”を推進し、研究成果の社会実装化による新たな産業創出や社会システム革新等を牽引する。

３．社会貢献に関する基本的目標

“上野の杜”はもとより、日本全域、さらには海外へと教育研究活動・社会貢献活動の場をボーダーレスに進展させ、大学の教育研究活動として位置付け実行する社会的・国際的な芸術実践活動“グローバルアートプラクティス”を多様なフィールドで展開するとともに、活動成果を広く社会に還元する。

本学は、その前身である東京美術学校、東京音楽学校の創立以来、我が国の芸術教育研究の中枢として、日本文化の伝統とその遺産を守りつつ、西欧の芸術思想及び技術を摂取、融合を図り幾多の優れた芸術家、中等教育から高等教育に亘る芸術分野の教育者・研究者を輩出してきた。こうした歴史的経緯を踏まえ、我が国唯一の国立総合芸術大学として、創立以来の自由と創造の精神を尊重し、我が国の芸術文化の発展について指導的役割を果たすことが本学の使命であると考え、また、この使命の遂行のため、次のことを基本的な目標として掲げている。

１．世界最高水準の芸術教育を行い、高い専門性と豊かな人間性を有した芸術家、芸術分野の教育者・研究者を養成する。

２．国内外の芸術教育研究機関や他分野との交流等を行いながら、伝統文化の継承と新しい芸術表現の創造を推進する。

３．心豊かな活力ある社会の形成にとって芸術のもつ重要性への理解を促す活動や、市民が芸術に親しむ機会の創出に努め、芸術をもって社会に貢献する。

なお、これらの使命と目標を踏まえた取組を、スピード感をもって実行するため、平成28年6月に「東京藝術大学 学長宣言2016　～芸術の持つ無限の可能性～ 」及び「東京藝術大学 大学改革・機能強化推進戦略 2016」を、平成29年10月には「東京藝術大学 NEXT 10 Vision」新たに策定し、学長の強力なリーダーシップの下、全学一丸となって、様々な大学改革を断行している。

［個性の伸長に向けた取組（★）］

○海外一線級アーティストユニット誘致を基軸とした教育研究組織・人材育成プログラム改革等による世界トップアーティストの戦略的育成

長きに亘り培ってきた伝統的な芸術教育手法や、社会的要請を踏まえた芸術教育内容を継承しつつ、グローバル人材育成を推進するための世界水準の教育を実施し、確固とした基礎技術や高い芸術性を備えることはもとより、芸術における国際展開やイノベーションの実践、現代社会と有機的な関係を持つことができる創造的人材を育成する。

(関連する中期計画)

・１－１－１－３、１－１－１－４
・１－２－１－１、１－２－１－２、１－２－１－３
・４－１－１－１、４－１－１－２、４－１－２－１、４－１－４－２

○国内外一線級アートプロデュースユニット誘致を中核とした教育研究組織・人材育成プログラム改革等による世界展開力・大学経営力強化

国内外一線級のプロデューサーやディレクター、キュレーター等との連携・ネットワーク基盤を構築し、我が国のアーティスト・作品成果等芸術文化価値の世界展開を牽引する『世界を席巻するアートプロデュース人材育成』のための戦略的な大学院組織整備や先駆的な人材育成プログラム構築を推進するとともに大学の経営力を高めるための発信力強化やブランディング等国際プレゼンス向上のためのマネジメント改革を実行する。

(関連する中期計画)

・１－１－１－３
・１－２－１－１、１－２－１－２，１－２－１－３
・４－１－３－１、４－１－４－２

○我が国固有の芸術文化力や産学官連携基盤を活かした教育研究組織・人材育成プログラム改革等によるイノベーション創出・国際芸術拠点形成

我が国が世界に誇る芸術文化力を武器に、世界展開を視野に入れた産学官連携基盤を活かしたイノベーション創出等を担う『世界を先導するアートイノベーション人材育成』のための戦略的な組織整備や先導的な人材育成プログラム構築を推進するとともに、”上野の杜”の芸術文化資源を活かし、アジアにおける中核拠点としての機能を抜本的に強化することにより世界を代表する『国際芸術教育研究拠点』へ飛躍する。

(関連する中期計画)

・１－１－１－４
・１－２－１－３
・２－１－１－１、２－１－１－４
・２－２－１－１
・３－１－１－１

［戦略性が高く意欲的な目標・計画（◆）］

○海外一線級アーティストユニット誘致を基軸とした「グローバル展開戦略」

我が国唯一の国立総合芸術大学のミッションや固有の強み・特色を踏まえ、国家戦略実行のフロントランナーとして、海外一線級アーティストユニット誘致による指導体制強化や教育研究組織改革、世界トップアーティストの戦略的育成のための人材育成プログラム改革等、“世界の頂”へと飛躍するための『グローバル展開戦略（国立大学機能強化事業）』の着実な実行はもとより、世界と戦うための『重点戦略分野』を明確化し、発展的・加速度的に展開するものである。なお、これらに関する取組の指標に関しては高い目標（数値）を設定し、学長のリーダーシップの下“オール藝大”で展開することとしている。

（関連する中期計画）

・１－１－１－３
・４－１－１－１、４－１－１－２
・４－１－２－１、４－１－２－２
・４－１－３－１、４－１－３－２

Ⅱ 中期目標ごとの自己評価

１　教育に関する目標（大項目）

（１）中項目１－１「教育の内容及び教育の成果等」の達成状況の分析

〔小項目１―１－１の分析〕

小項目の内容	**【Ⅰ－１－（１）－１】** 長きに亘り培ってきた伝統的な芸術教育手法や、社会的要請を踏まえた芸術教育内容を継承しつつ、グローバル人材育成を推進するための世界水準の教育を実施し、確固とした基礎技術や高い芸術性を備えることはもとより、芸術における国際展開やイノベーションの実践、現代社会と有機的な関係を持つことができる創造的人材を育成する。

○小項目１－１－１の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	3	1
中期計画を実施している。	1	0
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	4	1

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」

本小項目については、関係する全ての中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および各中期計画の達成状況に記載の通り、顕著な実績を挙げている。

中期計画１－１－１－３に記載の通り、新しい大学院課程を設置し、同課程を中心として海外一線級アーティストユニットの参加による国際共同プログラムの展開や、海外大学等との国際共同カリキュラムの全学的な整備・実施等を推進したことにより、グローバル人材の育成に係る世界水準の教育環境が構築された。
また、中期計画１－１－１－４に記載の通り、地域社会や産業界、海外関係機関等との連携協力により、実践的な教育研究の場が構築され、全学的に学生を対象とした課題解決型・社会実践型の芸術教育および社会実践プログラムを展開することで、芸術文化力によるイノベーションを創出し、現代社会と有機的な関係を持つことができる創造的な人材が養成できている。
加えて、中期計画１－１－１－１に記載の通り、専門分野に係る教育の充実だけでなく、教養教育および実践的な外国語教育の質の確保・充実に係る取組も進捗しており、また、シラバスの英語化や科目ナンバリングを完了したことにより、教育環境の国際通用性が高まり、上記の教育プログラムの充実と併せて、グローバル人材の育成に係る総合的な環境が構築されている。
さらに、中期計画１－１－１－２に記載の通り、飛び入学制度の導入や早期教育プロジェクトの全国展開、ジュニア・アカデミーの開講、早期教育リサーチ・センターの創設等、学部・大学院課程における人材育成プログラムの高度化と一体的に、長期的なビジョンに基づき、地方における卓越した才能の早期発掘および、それによる日本の芸術文化全体の活性化等に係る取組を展開している。

○特記事項（小項目１－１－１）

(優れた点)

・　グローバル人材の育成に係る世界水準の教育環境が構築の成果として、国内外の様々な展覧会・コンペティション・コンクール・学会等において、本学の学生および卒業生が多数の受賞をしており、本学における学修の成果を発揮している。（中期計画１－１－１－３）

・　パリ国立高等美術学校・ロンドン芸術大学・シカゴ美術館附属美術学校と「グローバルアート国際共同カリキュラム」を構築し、海外大学及び本学の学生と教員がユニットチームを組み、双方の国を訪れ、リサーチやディスカッション等を通して協働で作品制作等を実施し、それらはフランスの世界遺産シャンボール城や、３年に１度開催される「瀬戸内国際芸術祭」等において発表され、多くの来場者や評論家等から高い評価を受ける等、国際水準での教育研究成果を挙げた。（中期計画１－１－１－３）

・　「ベルリン・フィルハーモニー・カラヤン・アカデミー」と人材育成に係る協定（特別選抜制度）を締結し、同アカデミーのヴァイオリン部門に「東京藝術大学枠」が設けられ、試験が毎年行われ、合格者は2 年間同アカデミーに留学できる制度を構築した。同アカデミーと大学とが人材育成に係る連携協定を締結するのは世界初となる。これにより、全国各地の子ども達を対象とした「早期教育プロジェクト」や中学生が対象の「東京藝大ジュニア・アカデミー」、平成28 年度に「スーパーグローバルハイスクール」に指定された附属音楽高等学校における教育プログラムの改革、「飛び入学」試験を起点とした「スペシャルソリストプログラム（ＳＳＰ：Special Soloist Program)」の整備、学部・大学院における海外一流演奏家のユニット誘致や海外一流音楽大学との国際共同コンサート等と併せ、国際舞台で躍動する世界トップアーティストの戦略的育成に向けた一貫型人材育成プログラムが構築された。この成果として、2018 年度および 2019 年度の「ミュンヘン国際音楽コンクール」での２年連続の第１位獲得など、近年、本学の在学生・卒業生が数々の国際的な賞を獲得している。(中期計画１－１－１－２、１－１－１－３）

・　2017 年度、従来からの取組を発展させ、「日中韓学生アニメーション共同制作 co-work」を開始した。本学と韓国芸術総合学校および中国伝媒大学との連携により、日中韓の学生が混成チームをつくり、「共同企画」「Web 会議」「共同制作」「アニメーションフェスティバル（上映会)」により構成される「国際共同演習」を３カ月にわたる日中韓３大学の共同カリキュラムとして実施している。(中期計画１－１－１－２）

・　各学部・研究科の特色を活かし、芸術を活かした町づくり、製品・サービスの開発、市民や子供たちへの芸術文化教育、高齢者や障がい者の活躍促進など、地域社会や産業界、海外関係機関等との連携により多数の社会実践プログラムを展開し、学部生・大学院生に対する課題解決型・社会実践型の芸術教育を推進しており、併せて、展覧会や演奏会等により教育研究成果の発信を実施している。(中期計画１－１－１－４）

(特色ある点)

・　2014 年度より全国各地で実施している「早期教育プロジェクト」は、実施エリアを拡大しながら毎年度継続的に10都市以上で実施しており、2018年度は奈良、京都、東京、和歌山、札幌、刈谷、仙台、東広島、岡山、北九州、福井、熊本の

12 都市で計 17 回を開催した。また、特筆すべきこととして、2018 年度より新たに全日本空輸株式会社（ＡＮＡ）とタイアップし、航空運賃を負担いただいており、持続可能なプロジェクトとなるよう自助努力を図っている。（中期計画１－１－１－２）

・　2016 年度に新たに設置した国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻においては、カリキュラムの一環として、学生がアーティストの選定から出品交渉、展示コンセプト構成等全てを行う実践的な企画展覧会を開催している。（中期計画１－１－１－４）

・　グローバルサポートセンターにおける集中講義「Introduce Yourself as an Artist～自分と作品を世界に語ろう～」の実施など、アーティストとして世界で活動していく為の語学運用能力向上に係る取組を推進している。（中期計画１－１－１－１）

・　シラバスの内容について、特に実技科目の説明を詳細に記載したり、写真を用いたりすること等により、本学特有の授業がより分かりやすく伝わるように充実を図っている。（中期計画１－１－１－１）

（今後の課題）

・　各分野における国際共同教育プログラムの教育効果について継続的な検証を行うとともに、国際共同学位課程（ダブルディグリーまたはジョイントディグリー）への移行に係る検討を進める。（中期計画１－１－１－３）

・　海外大学・機関等との連携について、持続可能性や将来的な発展性等を踏まえ、質的充実に向けた検討を進める。（中期計画１－１－１－３）

〔小項目１―１－１の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画１－１－１－１に係る状況≫

中期計画の内容	【１】学士課程においては、引き続き専門教育及び教養教育の質の確保・充実を図るとともに、外国語教育の充実を段階的に推進することとし、さらに、教育内容の国際通用性を高めるため、平成２９年度を目途に科目ナンバリングやシラバスの英語化等の取組を完了させるなど、グローバル人材育成に向けた取組を総合的に推進する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画１－１－１－１）

(A)　学士課程においては、少人数教育・個別指導等の徹底や、学部・学科を超えた交流科目の推進等により、専門教育及び教養教育の質の確保・充実を図った。また、外国語教育の点では、言語・音声トレーニングセンターにおける TOEFL 対策科目の新規開講、ドイツ語・フランス語・イタリア語・英語の特別集中講座の実施、グローバルサポートセンターにおける集中講義「Introduce Yourself as an Artist～自分と作品を世界に語ろう～」の実施、e-learning システム(英語自習システム)の無償提供、グローバルサポートセンターにおける英文ライティング・サポートの実施等、グローバル人材育成に向けた取組を総合的に推進した。

(B)　平成 28 年度に中期計画を前倒して、シラバスの日英併記および科目ナンバリングを完了し、Web 上で公開している。シラバスについては、検索・内容画面について自動翻訳システム(Google Translate)を導入しており、多言語により参照することができる。また、科目ナンバリングを利用した講義コードを振り直すことにより、シラバス検索の利便性が向上した。加えて、シラバスの内容について充実を図り、特に実技科目の説明を詳細に記載したり、写真を用いたりすること等により、本学特有の授業がより分かりやすく伝わるようにしている。また、工房等においては、機械使用法及び注意事項等の英語表記プリントの作成や、危険箇所の英語表記等も実施している。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画１－１－１－１）
上記の取組により、専門教育、教養教育および実践的な外国語教育の質の確保・充実が図られた。また、シラバスの英語化や科目ナンバリングを完了したことにより、教育環境の国際通用性が高まり、グローバル人材の育成に係る総合的な環境の構築に繋がった。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画１－１－１－１）

(A)　専門教育及び教養教育における、学部・学科を超えた交流科目および、アーティストとしての外国語運用能力向上に係る授業科目等の充実を図る。

(B)　シラバスの内容や参照性等について、更に改善を図る。

≪中期計画１－１－１－２に係る状況≫

中期計画の内容	【２】音楽学部においては、平成２８年度より導入する飛び入学をはじめとする早期教育制度を適切に運用しつつ、発展的に展開するとともに、毎年度、自己点検・評価を実施し、結果の公表や制度の検証・改善を行う。
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画１－１－１－２）

(A)　音楽学部において、2017 年度入試(2016 年度実施)より「飛び入学」入試を実施し、同年度および 2020 年度入試(2019 年度実施)に、それぞれヴァイオリン専攻で１名の合格者を決定し、専用のカリキュラムであるスペシャルソリストプログラム(SSP：Special Soloist Program)による指導を行っている。

(B)　2014 年度より全国各地で実施している「早期教育プロジェクト」は、エリアを拡大しながら毎年度継続的に 10 都市以上で実施しており、2016 年度～2019 年度の４年間で計 63 回を開催している。また、特筆すべきこととして、2018 年度より新たに全日本空輸株式会社（ＡＮＡ）とタイアップし、航空運賃を負担いただいており、持続可能なプロジェクトとなるよう自助努力を図っている。**(別添資料 27-01)**

(C)　2017 年度より、義務教育段階からより専門的に音楽を勉強することを可能にする新しい教育システムとして、中学生を対象とする早期英才教育特別コースである「東京藝大ジュニア・アカデミー」を開講している。

(D)　2017 年度に早期教育リサーチ・センターを創設し、音楽における早期教育に関する研究を進め、将来の優れた音楽家育成に貢献するとともに、毎年度、自己点検・評価を実施し、継続的に検証・改善している。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画１－１－１－２）

上記の通り、飛び入学の導入および合格者に対する専用カリキュラムによる指導、早期教育プロジェクトの持続的な全国展開、ジュニア・アカデミーの開講、早期教育リサーチ・センターの創設により、早期教育制度の適切な運用および発展的な展開が実現しており、また、自己点検・評価により、継続的に検証・改善を実施している。加えて、飛び入学制度により入学した学生が既に国際的な賞を複数受賞するなど、大きな成果に繋がっている。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画１－１－１－２）

(A)　飛び入学制度および専用カリキュラムの安定的な運用。

(B)　持続的なプロジェクトの実施・展開に向けた財源の確保等の自助努力の充実。

(C)　ジュニア・アカデミーの持続的な運営。

(D)　早期教育に係る研究の推進および、各制度やプロジェクトに係る継続的な自己点検・評価の実施。

≪中期計画１－１－１－３に係る状況≫

中期計画の内容	【３】大学院課程では、「海外一線級アーティストユニット」の参加による国際共同プログラムの実施等、世界最高水準の人材育成プログラムを行うとともに、平成２９年度までに、国際交流協定締結校との国際共同カリキュラム（ジョイントディグリー）を整備・実施し、その教育的効果の検証を行う。また高度な博士人材育成のための芸術実践領域（実技系）博士プログラムを発展させ、平成２９年度より、修士課程・博士課程の５年間を通じた高度人材育成プログラムを構築することにより、芸術分野において先導的役割を担う卓越した芸術家・研究者育成を推進する。（★）（◆）
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画１－１－１－３）

(A)　2016 年 4 月、芸術と社会とを繋ぐ人材の育成を強化する為、美術研究科にグローバルアートプラクティス専攻、音楽研究科にオペラ専攻を設置するとともに、本学４つ目の大学院組織として「国際芸術創造研究科」を創設し、「アートマネジメント」「キュレーション」「リサーチ」の３領域で、芸術と社会の新しい関係を提案できる卓越した人材を養成するアートプロデュース専攻を設置した。2018 年 4 月には国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻の博士後期課程を設置し、５年間を通じた高度人材育成プログラムを構築している。

(B)　国際共同教育プログラムの充実として、全学的に、海外大学との共同授業および共同成果発表や、海外一線級アーティストの誘致を推進した。

美術分野では、パリ国立高等美術学校・ロンドン芸術大学・シカゴ美術館附属美術学校と「グローバルアート国際共同カリキュラム」を構築し、海外大学及び本学の学生と教員がユニットチームを組み、双方の国を訪れ、リサーチやディスカッション等を通して協働で作品制作等を実施し、それらはフランスの世界遺産シャンボール城や、３年に１度開催される「瀬戸内国際芸術祭」等において発表され、多くの来場者や評論家等から高い評価を受ける等、国際水準での教育研究成果を挙げた。

音楽分野では、毎年度 50～70 名の一線級アーティストを短～長期間において招聘し、学生への実技レッスンをはじめ、学生・教員等との合同演奏会や特別講義を実施する等、世界トップアーティスト育成プログラムを展開し、国際コンクールでの受賞者を数多く輩出するなど、高い教育成果が現れている。

映像分野では、「日中韓学生アニメーション共同制作 co-work」や「日米ゲームクリエイション共同プログラム」など、海外大学との国際共同制作を基盤とした共同カリキュラムを構築・実施し、2019 年度には新たに「ゲームコース」を創設した。また、フランス国立映画学校(FEMIS)南カリフォルニア大学(USC)の教員を卓越教授として雇用すること等により多数の新しい講義を開講し、世界水準の人材育成プログラムを構築している。**(別添資料 27-02, 27-03, 27-04)**

国際芸術創造分野(アートプロデュース分野)では、毎年度、顕著な業績等を有する有識者を特別講師として招聘し、講演・ワークショップ・研究会等を開催しているほか、「江陵-東京-台北・アートリサーチ・ワークショップ」として、韓国総合芸術学校、国立台北藝術大学との三大学合同の共同研究会を毎年度開催するなど、教育プログラムとしての海外大学との国際共同プロジェクトを多数実施している。**(別添資料 27-05)**

(C)　2018 年度、「ベルリン・フィルハーモニー・カラヤン・アカデミー」と人材育成に係る協定（特別選抜制度）を締結し、同アカデミーのヴァイオリン部門に「東京藝術大学枠」が設けられ、試験が毎年行われ、合格者は 2 年間同アカデミーに留学できる制度を構築した。同年７月には、本学において「派遣者オーディション」の第１回目を実施し、合格した１名の秋からの同アカデミーへの派遣が決定した。また、派遣者には寄附金を原資とする奨学金によりサポートが行われる。**(別添資料 27-06, 27-07)**

(D)　国際共同カリキュラムの拡充に向け、美術学部・研究科において 2015 年度～2019 年度の５年間、「Global Arts Crossing ～中東地域との戦略的芸術文化外交～」として「大学の世界展開力強化事業(中東)」の採択を受け、トルコのミマール・シナン美術大学およびアナドール大学、イスラエルのベツァルエル美術アカデミーとの国際共同プロジェクトを実施した。また、オーストリアのウィーン応用美術大学、デンマークのデザインスクール・コリング、オスロ国立芸術アカデミー、イギリスの AA スクール等との国際共同授業を毎年度実施している。**(別添資料 27-08)**

また、全学的な国際共同プロジェクトとして「日 ASEAN 芸術文化交流が導く多角的プロモーション」を、2016 年度～2020 年度の５年間、「大学の世界展開力強化事業（ASEAN）の採択」を受け、実施している、同事業では、カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム、タイの５カ国に所在する８校の国立芸術系大学と連携し、相互の課題解決や特色を踏まえた交流を進めている。**(別添資料 27-09)**

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画１－１－１－３）

上記の通り、戦略性が高く意欲的な目標・計画に係る取組として、新しい大学院課程を設置し、同課程を中心として海外一線級アーティストユニットの参加による国際共同プログラムの展開や、海外大学等との国際共同カリキュラムの全学的な整備・実施を推進し、また、海外大学・機関等との連携を積極的に拡大・強化したことにより、グローバル人材の育成に係る多様なプログラムが構築され、芸術分野において先導的役割を担う卓越した芸術家・研究者およびアートプロデュース人材の戦略的な育成に係る機能が大きく強化され、目標の達成および個性の伸長に繋がった。その成果として、国内外の様々な展覧会・コンペティション・コンクール・学会等において、本学の学生および卒業生が多数の受賞をしており、本学における学修の成果を発揮している。(別添資料 27-10a～d)

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画１－１－１－３）

(A)　新たに設置した研究科・専攻において、カリキュラムおよび教育効果・成果の継続的な検証と改善を行う。

(B)　各分野における国際共同教育プログラムの教育効果について継続的な検証を行うとともに、国際共同学位課程(ダブルディグリーまたはジョイントディグリー)への移行に係る検討を進める。

(C)　特別選別制度による派遣者オーディションを毎年度実施するとともに、派遣者に係るフォローアップ調査等を進める。

(D)　海外大学・機関等との連携について、持続可能性や将来的な発展性等を踏まえ、質的充実に向けた検討を進める。

≪中期計画１－１－１－４に係る状況≫

中期計画の内容	【４】地域社会や産業界、海外関係機関等との連携協力により、実践的な教育研究の場を構築し、社会実践プログラムとして発展させ、学部・大学院全ての学生を対象とした課題解決型・社会実践型の芸術教育を行う。(★)
実施状況(実施予定を含む)の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画１－１－１－４）

(A)　以下(B)～(E)に詳述する通り、各学部・研究科の特色を活かし、芸術を活かした町づくり、製品・サービスの開発、市民や子供たちへの芸術文化教育、高齢者や障がい者の活躍促進など、地域社会や産業界、海外関係機関等との連携により多数の社会実践プログラムを展開し、学部生・大学院生に対する課題解決型・社会実践型の芸術教育を推進しており、併せて、展覧会や演奏会等により教育研究成果の発信を実施している。**(別添資料：27-11a～d)**

(B)　美術学部・研究科においては、茨城県取手市および市民との協働によるアートプロジェクト、群馬県みなかみ町と NPO との連携による芸術を活かした町づくり、株式会社 NKB ゆがわら工房における公共施設に設置する作品の受注から施工までを体験するインターンシップ、株式会社ミマキエンジニアリングの協力による昇華転写システムプリントを使用したテキスタイルの製作、染色作家である斎藤孝子氏の染色工房おける伝統技術の学習、文化財(絵画・彫刻・工芸・建築等)の保存修復に係る事業・研究の実践等、地域社会や産業界との連携協力による社会実践プログラムを多数実施している。

また、企業や自治体との産学連携を積極的に促進する為に「デザインガレージ」を始動させ、社会実装型のデザイン教育を行っており、「台東区/皮革産業活性化プロジェクト」「JAKUETS/幼児玩具の可能性の具体化プロジェクト」「伊那市デザインプロジェクト」「Coop-deli/日用品のブランディングプロジェクト」「 AGC(旭硝子) ガラスのある新しい暮らしのデザインプロジェクト」等、多数の連携プログラムを展開している。

加えて、東京都教育委員会との連携による障害者美術への一般の人々の理解を促進・啓発する活動、青森県との連携による「ふるさとを愛する心を育む芸術体験事業」など、美術教育に関する普及活動についても、学生参加による教育プログラムの一環として実施している。

(C)　音楽学部・研究科においては、「足立区における多層的文化芸術環境の創造に関する調査研究」として、足立区の幼稚園・保育園・小学生・中学生の教育現場を対象とした「音楽教育支援活動」、同区の福祉と子育ての支援を目的とした「福祉と子育て支援事業」、区民が芸術に親しむ環境整備を目的とした「芸術によるまちづくり事業」について、学生参加による社会実践プログラムとして実施している。

また、京成電鉄株式会社からの受託による京成上野駅「発車メロディー」の制作、三菱電機株式会社との共同による音質の見える化に関する研究、ヤマハ株式会社との共同による楽器・音響製品の感性評価に関する研究等、産業界との連携による取組について、教育プログラムとして機能させている。加えて、官公庁・自治体・企業等から多数の依頼を受け、学生による社会実践プログラムとして演奏会やワークショップ等を開催している。

(D)　映像研究科においては、三菱電機株式会社との「ライティング機器（路面やウィンカー等のアニメーション研究)」および「次世代ビル内交通システムコンセプトにおける人と施設をつなぐ映像・音のデザイン」に係る共同研究に学生が参加し、新しい芸術表現やその活用方法を探求するなど、民間企業や地方自治体との連携によるに社会実践プログラムを推進している。

また、スマートイルミネーション横浜 2017 連携プログラムにおける神奈川県立歴史博物館外壁面へのプロジェクションマッピングや、取手市との連携事業による取手市西口自転車駐車場「サイクルステーションとりで（CTS)」の外壁面へのアニメーション投影等では、大学院映像研究科の学生が制作した作品を用いた。

その他、台東区との連携による、台東区立田原幼稚園における幼児へのアニメーション教育の実施等、地方自治体等との共同による子供や市民への教育についても、学生参加による社会実践プログラムとして機能させている。

(E)　国際芸術創造研究科においては、東京都足立区の「音まち計画」、茨城県取手市の「取手アートプロジェクトオフィス」、東京都台東区の「谷中のおかって」等との連携により、多彩なアートプロジェクトの企画・運営に社会実践プログラムとして学生が参加している。

また、アートフェア東京 2018 特別展「World Art Tokyo」において学生２名がキュレーターを担当したほか、本学と駐日韓国大使館韓国文化院との共催により同ギャラリーMI で開催された「東京藝術大学韓日学生交流展 Challenge Art in Japan 環状の岸辺」展において企画運営を学生が担当する等、学外における展覧会等で学生が実践をしている。

加えて、学生がアーティストの選定から出品交渉、展示コンセプト構成等全てを行う実践的な企画展覧会を開催している。**(別添資料：27-12a,b)**

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画１－１－１－４）

上記の通り、地域社会や産業界、海外関係機関等との連携協力により、実践的な教育研究の場が構築され、全学的に学生を対象とした課題解決型・社会実践型の芸術教育および社会実践プログラムが展開できている。これにより、現代社会と有機的な関係を持つことができる創造的人材や、芸術文化力を武器として産学官連携基盤を活かしたイノベーション創出等を担う人材の育成に係る機能が大きく強化され、目標の達成および個性の伸長に繋がった。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画１－１－１－４）

(A)　産業界や自治体等とのネットワークを拡大し、新しい共同事業・共同研究等を積極的に推進することで、多様な社会実践の場を教育プログラムとして活用していく。

(B)～(E)　上記を踏まえ、各学部・研究科の特色を活かした実践的な教育研究を広く展開していく。

（２）中項目１－２「教育の実施体制等」の達成状況の分析

〔小項目１―２－１の分析〕

小項目の内容	**【Ⅰ－１－（２）－１】** 学生の創造性を最大限に引き出す環境を整備するため、専門教育環境を堅持しつつ、その充実を図る。また、グローバル人材育成等社会的要請を踏まえた教育体制・環境を整備するため、教育研究組織の見直しをはじめとする学内教育資源の再配分・最適化を行う。

○小項目１－２－１の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	3	0
中期計画を実施している。	0	0
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	3	0

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」

本小項目については、関係する全ての中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および各中期計画の達成状況に記載の通り、顕著な実績を挙げている。

中期計画１－２－１－３に記載の通り、2016 年４月に、美術研究科の修士課程にグローバルアートプラクティス専攻、音楽研究科の修士課程にオペラ専攻を設置し、また同年、本学４つ目の大学院組織として国際芸術創造研究科を創設し、これらの組織基盤を中心として、中期計画１－２－１－１に記載の通り海外大学等から卓越した芸術家や指導者を招聘し、少人数教育・個人指導等に係る体制を整備している。また併せて、中期計画１－２－１－２に記載の通り、国内外における展覧会・演奏会等の教育研究活動の成果発信に係る場の確保や、学生の海外実践に係る支援制度の創設等を積極的に展開した。

こうした取組により、基盤となる教育研究組織の整備、卓越した教員の誘致による体制強化、教育システムと一体的な国内外における実践機会および支援制度の充実等を総合的に推進し、学生の創造性を最大限に引き出す環境の整備と、それによるグローバル人材の育成促進が実現できている。

また、大学院映像研究科における「ゲームコース」の開設や、「早期教育リサーチセンター」および「アートイノベーション推進機構」の創設など、中期目標の達成に向けた更なる取組を推進している。

○特記事項（小項目１－２－１）
(優れた点)

・　大学全体として、海外一流大学等から卓越した芸術家・指導者を継続的に招聘・配置することにより、少人数教育・個人指導等に係る体制の強化・充実を図るとともに、芸術と社会とを繋ぐ教育の推進として、産業界等からの講師招聘を充実している。（中期計画１－２－１－１）

・　美術学部・研究科においては、ロンドン芸術大学等との「グローバルアート国際共同カリキュラム」の一環として、共同制作した作品等をフランス世界遺産シ

ャンボール城や、３年に１度開催される国際芸術祭「瀬戸内国際芸術祭」等において展示し、国際的に発信したほか、海外大学との交流展覧会を、韓国のソウル大学校、台湾赤粒画廊、タイのチェンマイ大学、ミャンマーのバガン漆芸技術大学、オーストラリアのメルボルン大学、フィンランドのユヴァスキュラ美術館等で開催した。（中期計画１－２－１－２）

・　音楽学部・研究科においては、2018 年度に、本学と英国王立音楽院の学生による合同オーケストラ交流演奏会を英国と日本において開催した（英国において英国王立音楽院及びオックスフォードの２公演、日本において郡山市及び本学の２公演の合計４公演）。（中期計画１－２－１－２）

・　映像研究科においては、2018 年度に、ジャパン・ハウス ロサンゼルスにおいて、本学および南カリフォルニア大学(USC)映画芸術学部アニメーション＆デジタルアート学科、カリフォルニア芸術大学(CalArts)映像・ビデオ学部実験アニメーション専攻の三機関による「アニメーションの夕べ～日米アニメーション上映会～」と題した学生作品上映会を開催した。（中期計画１－２－１－２）

・　2017 年度より、世界三大音楽レーベルの一つである（株）ワーナーミュージック・ジャパンと連携し、本学が主体となり「藝大レーベル」を立ち上げ、学生の在学中における演奏音源をデジタル配信するという、国内の音楽大学では初となる取組を開始した。同年に配信リリースされた本学の学生代表９組の演奏を収録したアルバム「東京藝大音楽学部 推薦学生によるクラシックから純邦楽まで！現在（いま）聴くべき究極（９曲）！」は iTunes クラシックチャートにて第１位に浮上するなど、高い評価を得ている。（中期計画１－２－１－２）

（特色ある点）

・　国際芸術創造研究科においては、東京都足立区の「音まち計画」、茨城県取手市の「取手アートプロジェクトオフィス」、東京都台東区の「谷中のおかって」等との連携により、地域社会等における多彩なアートプロジェクトの企画・運営に学生が参加し、教育研究成果を発信している。（中期計画１－２－１－２）

・　2018 年度、本学と株式会社小学館との共同事業として、本学の学生・教職員・卒業生の作品を中心に展示・販売を行うギャラリー・ショップである「藝大アートプラザ」を本学上野キャンパス内に開設し、教育研究成果の発信の場と機能を拡充・強化した。（中期計画１－２－１－２）

・　2018 年度にアメリカの南カリフォルニア大学(USC)と連携し「日米ゲームクリエイション共同プログラム-メディア革新時代の新しいアーティスト育成-」を開始し、2019 年度には大学院映像研究科に「ゲームコース」を開設した。（中期計画１－２－１－３）

（今後の課題）

・　大学美術館や奏楽堂等、本学の教育研究成果の発信に係る中核的な施設の計画的な運営・修繕を行いつつ、学外における成果発表の場を拡充する為、地方自治体や民間企業、各種芸術文化施設等とのネットワークを拡大していく。（中期計画１－２－１－２）

〔小項目１―２－１の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画１－２－１－１に係る状況≫

中期計画の内容	【５】本学の伝統であり、芸術教育に欠かせない、少人数教育・個人指導を着実に実施するための教員配置等指導体制を整備するとともに、ロンドン芸術大学等海外一流大学等から卓越した芸術家・指導者を継続的に招聘・配置することにより、指導体制の強化・充実を図る。（★）
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画１－２－１－１）

(A)　以下(B)～(E)の通り、大学全体として、海外一流大学等から卓越した芸術家・指導者を継続的に招聘・配置することにより、少人数教育・個人指導等に係る体制の強化・充実を図るとともに、芸術と社会とを繋ぐ教育の推進として、産業界等からの講師招聘を充実している。**(別添資料：27-13、27-14a～d)**

(B)　美術学部・研究科においては、毎年度、中国の広州美術学院、イギリスの AA スクールおよびロンドン芸術大学、ドイツのブレーメン芸術大学、ポーランドのブロツワフ芸術大学、フランスのパリ国立高等美術学校等から卓越した芸術家・指導者・研究者を３０名規模で招聘し、少人数教育・個人指導および幅広い芸術表現の学習を可能にしている。また、基礎から応用までの授業や作品制作等に係る個別指導を充実するとともに、工房の稼働環境を整備し、学生それぞれの技量に合わせて個別に指導を行う事で、安全管理を徹底している。

(C)　音楽学部・研究科においては、毎年度、パリ国立高等音楽院、英国王立音楽院、リスト音楽院、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団など世界的な音楽大学及びオーケストラから一流の演奏家を招聘し、個人指導、グループレッスン、特別講座、演奏会による共演等を実施して指導体制の強化・充実に努めている。また、ハーバード大学、パリ第４大学、スタンフォード大学、ニューヨーク大学、ボルドー芸術大学等から音楽理論・作曲・マルチメディア分野の研究者を招聘し、講演会や研究指導等を実施した。

(D)　映像研究科においては、フランス国立映画学校(FEMIS)、アメリカの南カリフォルニア大学(USC)の教員を卓越教授として雇用し、「映画学」「国際映像メディア論」「国際映画芸術表現研究」等を開講するとともに、壇国大学（韓国）、テヘラン芸術大学（イラン）、ラサール芸術大学（シンガポール）から招聘した教員による「撮影」「録音」「編集」領域の講義を実施している。加えて、株式会社スクウェア・エニックス等、産業界からの講師招聘を充実している。

(E)　国際芸術創造研究科については、一学年あたりの学生定員が修士課程 10 名・博士後期課程５名であるのに対し、教授・准教授・講師６名および助教３名の計 9 名の専任教員を配置し、少人数教育・個人指導を徹底している。加えて、パリ政治学院副学長のブルーノ・ラトゥール、ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ教授のマシュー・フラーおよびマイク・フェザーストーン、元パリ国立高等学校学長でキュレーターのニコラ・ブリオー、台北藝術大学・学長の陳愷璜、ハーバード大学の依田富子教授およびアレクサンダー・ザルテン准教授等、卓越した業績を有する教員・実務家等を毎年度多数招聘し、特別講義や研究会を開催している。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画１－２－１－１）
　上記の通り、ロンドン芸術大学等海外一流大学等から卓越した芸術家・指導者を継続的に招聘・配置することにより、少人数教育・個人指導等に係る体制が強化・充実し、専門教育環境およびグローバル人材の育成等の社会的要請を踏まえた教育体制の整備が促進され、学生の創造性を最大限に引き出す環境の構築に繋がった。この成果として、全学における専任教員あたりの学生数は、2016 年度の時点で約 5.89 だったのに対し、2019 年度は約 5.54 まで数値が改善している(分析データ集の指標 9)。
　また、海外大学や産業界から招聘した教員による多様な教育プログラムの展開により、世界トップアーティストや、芸術文化力を武器としてイノベーション創出を担う人材、我が国のアーティストや芸術文化価値の世界展開を牽引するアートプロデュース人材等の育成に係る機能が大きく強化され、目標の達成および個性の伸長に繋がった。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画１－２－１－１）
(A)　個人指導・少人数教育を更に充実する為の、実技指導、工房・スタジオ等での実習を支える専門スタッフの拡充について検討を進める。

(B)～(E)　各学部・研究科および全学において、海外一流大学や産業界等からの多様な芸術家・指導者および実務家等の継続的な招聘・配置を行うとともに、オンラインによる教育の充実等を図る。

≪中期計画１－２－１－２に係る状況≫

中期計画の内容	【６】大学における教育システムの一環として、国内及び海外における展覧会・演奏会等、学外において多様な制作・発表等活動の場を確保し、教育研究活動の成果を積極的に発信する。（★）
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画１－２－１－２）

(A)　以下(B)～(E)に詳述する通り、大学全体として、中期計画１－１－１－３および１－１－１－４に係る取組として記載した国際共同カリキュラムや社会実践プログラムの一環として、地方を含む国内および海外において多数の展覧会・演奏会・上映会等を開催し、教育研究活動の成果を積極的に発信した。

(B)　美術学部・研究科においては、ロンドン芸術大学等との「グローバルアート国際共同カリキュラム」の一環として、共同制作した作品等をフランス世界遺産シャンボール城や、３年に１度開催される国際芸術祭「瀬戸内国際芸術祭」等において展示し、国際的に発信したほか、海外大学との交流展覧会を、韓国のソウル大学校、台湾赤粒画廊、タイのチェンマイ大学、ミャンマーのバガン漆芸技術大学、オーストラリアのメルボルン大学、フィンランドのユヴァスキュラ美術館等で開催した。加えて、社会実践型の教育プログラムの一環として、地域・産学連携等による教育研究成果を、茨城県大子町の県北芸術祭、福島県磐梯山慧日寺資料館、青森県酸ヶ湯温泉の旅館、上野動物園、浅草文化観光センター、天王洲セントラルタワー、世界のカバン博物館等、各プロジェクトに係る場において展覧会等を開催することで多様な観客等に発信することにより、地域の活性化や社会への還元等に繋げた。

(C)　音楽学部・研究科においては、本学の奏楽堂等において演奏会や公開試験などを数多く実施しているほか、地域連携事業や依頼演奏等において、全国各地で教育研究成果を発表している。2018 年度には、本学と英国王立音楽院の学生による合同オーケストラ交流演奏会を英国と日本において開催した（英国において英国王立音楽院及びオックスフォードの２公演、日本において郡山市及び本学の２公演　の合計４公演）。また同年、本学においてシベリウス音楽院との交流演奏会、延世大学校との交流演奏会を開催した。2019 年度には学生オーケストラが、南仏ラ・クロワ・ヴァルメールでの吹奏楽フェスティヴァルとパリ日本文化会館での演奏を実施した。

(D)　映像研究科においては、各専攻の修了制作の発表および一年次の成果発表を、本学の馬車道校舎、渋谷・ユーロスペース、BankART Studio NYK、横浜美術館等で実施するとともに、YouTube や Vimeo 等の Web メディアでも作品配信している。また、地域におけるワークショップ等の場において、併せて学生作品の上映等を実施しているほか、地域連携事業の一環として、神奈川県立歴史博物館や取手市西口自転車駐車場で学生作品のプロジェクションマッピングや投影を実施した。加えて、2018 年度に、ジャパン・ハウス ロサンゼルスにおいて、本学および南カリフォルニア大学(USC)映画芸術学部アニメーション＆デジタルアート学科、カリフォルニア芸術大学(CalArts)映像・ビデオ学部実験アニメーション専攻の三機関による「アニメーションの夕べ～日米アニメーション上映会～」と題した学生作品上映会を開催した。

(E)　国際芸術創造研究科においては、毎年度、本学の大学美術館陳列館を活用し、学生がアーティストの選定から出品交渉、展示コンセプト構成等全てを行う学生企画展を開催している。また、東京都足立区の「音まち計画」、茨城県取手市の「取手アートプロジェクトオフィス」、東京都台東区の「谷中のおかって」等との連携により、地域社会等における多彩なアートプロジェクトの企画・運営に学生が参加し、教育研究成果を発信している。加えて、2017 年度および 2018 年度に、ベトナムのホーチミン市美術大学およびベトナム国家音楽院、ラオスの国立美術学校等との国際共同プロジェクトの成果を展覧会や演奏会等により発信した。その他、アートフェア東京 2018 特別展「World Art Tokyo」、ジャポニスム 2018「深みへー日本の美意識を求めてー」展等、外部の展覧会等に学生が企画・運営等として参加し、教育研究成果を発信した。

(F)　全学として海外実践研修型授業の学内助成事業「アーツ・スタディ・アブロード・プログラム(ASAP)」を毎年度実施し、参加学生を「海外派遣奨学金」により支援することで、海外における学生の教育研究成果の発表を促進している。

(G)　2017 年度より、世界三大音楽レーベルの一つである（株）ワーナーミュージック・ジャパンと連携し、本学が主体となり「藝大レーベル」を立ち上げ、学生の在学中における演奏音源をデジタル配信するという、国内の音楽大学では初となる取組を開始した。**(別添資料 27-15)**

(H)　2018 年度、本学と株式会社小学館との共同事業として、本学の学生・教職員・卒業生の作品を中心に展示・販売を行うギャラリー・ショップである「藝大アートプラザ」を本学上野キャンパス内に開設し、教育研究成果の発信の場と機能を拡充・強化した。

(I)　2018 年度、本学内に東京藝術大学国際藝術リソースセンターを竣工し、施設内に新設した「ラーニングコモンズ」は、用途に応じて自由に組み替えられるオリジナルの家具を配置し、空間・壁面を利用したコンサート、展示、ワークショップ等のイベントにも対応できる、本学ならではのスペースである。

(J)　2019 年度、茨城県取手の取手駅・駅ビル内に、新たなアート施設「たいけん美じゅつ場」をオープンし、施設内には「オープンアーカイブ」と呼ばれる展示空間を設け、本学の教育研究成果を恒常的に発信している。**(別添資料 27-16)**

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画１－２－１－２）
　上記の通り、国内及び海外における展覧会・演奏会等、学外において多様な制作・発表等活動の場を確保し、教育研究活動の成果を積極的に発信した。また、「ASAP」および「海外派遣奨学金」、「藝大レーベル」「藝大アートプラザ」「国際藝術リソースセンター」「たいけん美じゅつ場」など、学内外における教育研究成果の発信を促進する新しい仕組みや場を創出したことにより、専門教育環境および学生の創造性を最大限に引き出す環境が構築され、グローバルに活躍する人材の育成に係る機能が大きく強化され、目標の達成および個性の伸長に繋がった。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画１－２－１－２）
(A)～(J)　大学美術館や奏楽堂等、本学の教育研究成果の発信に係る中核的な施設の計画的な運営・修繕を行いつつ、学外における成果発表の場を拡充する為、地方自治体や民間企業、各種芸術文化施設等とのネットワークを拡大していく。

≪中期計画１－２－１－３に係る状況≫

中期計画の内容	【７】グローバル人材育成を推進するため、平成２８年度に独立研究科をはじめとする新たな大学院組織を整備するとともに、教育組織・指導体制見直し等の学内資源の再配分・最適化を継続的に行い、社会的要請に即応した教育推進体制を構築する。（★）
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画１－２－１－３）

(A)　2016 年度、美術研究科の修士課程にグローバルアートプラクティス専攻を新たに設置し、カリキュラムの一環として毎年度、パリ国立高等美術学校およびロンドン芸術大学との国際共同授業「グローバルアート国際共同カリキュラム」を実施している。**(別添資料 27-17a～d)**

(B)　2016 年度、音楽研究科の修士課程にオペラ専攻を新たに設置し、高度実践型カリキュラムとして、ウィーン音楽大学の元教授であり世界的なオペラ演出家のミヒャエル・テンメ演出によるオペラ定期演奏会「コシ・ファン・トゥッテ」を開催するなど、国際舞台で活躍する教員による世界最高水準の教育プログラムを実施した。

(C)　2016 年度、本学４つ目の大学院組織として国際芸術創造研究科を創設し、同年にアートプロデュース専攻の修士課程を、2018 年度には博士後期課程を設置し、アートマネジメント、キュレーション、リサーチの３領域で芸術と社会との関係にアプローチする高度人材育成プログラムを構築している。

(D)　2018 年度に「日米ゲームクリエイション共同プログラム-メディア革新時代の新しいアーティスト育成-」として「大学の世界展開力強化事業（アメリカ）」の採択を受け、アメリカの南カリフォルニア大学（USC）と連携し、ゲーム教育に係る国際共同プログラムを充実し、2019 年度からは、大学院映像研究科に「ゲームコース」を開設した。**(別添資料 27-18)**

(E)　2017 年度に「早期教育リサーチセンター」、2019 年度に「アートイノベーション推進機構」を創設するなど、学内資源の再配分・最適化による教育研究組織の再編を推進している。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画１－２－１－３）
　上記の通り、新たな大学院組織の整備を着実に実施したほか、ゲーム分野の教育研究の展開や、早期教育やイノベーションの促進に係る組織の創設等、学内教育資源の再配分・最適化を積極的に行い、専門教育環境および学生の創造性を最大限に引き出す環境の構築が進展している。また、グローバルに活躍する人材の育成に係る機能が大きく強化され、目標の達成および個性の伸長に繋がった。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画１－２－１－３）

(A)～(D)　新研究科・新専攻における教育活動・成果の継続的な検証と改善。

(E)　新たに創設したセンターおよび機構を基盤として、早期教育および産学連携や異分野融合を通じたアートイノベーションの促進に係る取組を展開する。

〔小項目１―２－２の分析〕

小項目の内容	【Ⅰ－１－（２）－２】 　世界的な人材育成拠点として相応しい教育力の向上を図るため、芸術分野の特性に応じたＦＤ等を実践する。

○小項目１－２－２の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	0	0
中期計画を実施している。	1	0
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	1	0

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」
※

　本小項目については、関係する中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および中期計画の達成状況に記載の通り、特色のある取組を実施している。

　中期計画１－２－２－１に記載の通り、学生による授業評価アンケート等を定期的に実施し、評価結果を教育内容の改善・充実に繋げるとともに、芸術分野の特性を踏まえ、公開型講評会や公開レッスン等をＦＤ研修として実施し、相互評価・第三者評価に活用している。
　また、これらの取組は、上記の小項目１－１－１や１－２－１に記載した海外一線級アーティストの誘致や海外大学等との国際共同プログラムの充実、教育システムの一環としての産学連携・地域連携プロジェクトや国内外における教育研究成果の発信等と連動した取組であり、そうした機会に外部からの評価・意見を取り入れることにより、客観的かつ多角的な視点での教育内容の改善・充実およびＦＤの実施に繋がっている。

○特記事項（小項目１－２－２）
(優れた点)
・　映像研究科においては、毎年度、海外から著名な教員や映像作家等を招聘し、国際合同講評会を開催している。
（中期計画１－２－２－１）

(特色ある点)
・　美術学部・研究科においては、国際共同プログラムや産学・地域連携プロジェクト等の機会に併せ、講評会に外部評論家や美術家等をゲストに招き、教育現場に外部からの評価・意見を積極的に取り入れている。また、音楽学部・研究科においては、海外大学等から誘致したアーティスト等と、教育内容や指導方法について意見交換を行っている。
（中期計画１－２－２－１）

(今後の課題)
・　授業評価アンケートやＦＤ活動を継続的に実施しつつ、新しい教育研究の充実や展開にあわせて、ＦＤのあり方や内容についても、随時改善を進めていく。
（中期計画１－２－２－１）

〔小項目１―２－２の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画１－２－２－１に係る状況≫

中期計画の内容	【８】学生による授業評価アンケート等を定期的に実施し、評価結果を教育内容の改善・充実に繋げるとともに、公開型講評会や公開レッスン等をＦＤ研修として、相互評価・第三者評価に活用することにより、教育力向上に繋げる。
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画１－２－２－１）

(A)　全学的に毎年度２回の授業評価アンケートを行い、その回答結果を各教員にフィードバックし、各教員には学生からの指摘を確認してもらった上で授業評価への対応アンケートに回答してもらい、授業改善に役立てている。また、教育担当理事を中心とする教育推進室でアンケートの結果報告を行い、課題と対策について検討している。

(B)　美術学部・研究科においては、各学科・専攻において公開型講評会等を行い、教育および評価の透明性を図るとともに、教員同士の相互評価および授業内容等について共有・意見交換をしている。また、国際共同プログラムや産学・地域連携プロジェクト等の機会に併せ、講評会に外部評論家や美術家等をゲストに招き、教育現場に外部からの評価・意見を積極的に取り入れている。

音楽学部・研究科においては、公開試験演奏会や公開レッスン、研究発表会等を実施し、相互評価・第三者評価を行う事により教育力向上を図っているほか、海外大学等から誘致したアーティスト等と、教育内容や指導方法について意見交換を行っている。

映像研究科においては、毎年度、海外から著名な教員や映像作家等を招聘し、国際合同講評会を開催している。

(C)　国際芸術創造研究科においては、FD 対策部会を設置し、FD 活動の実施時期・具体的取組・フィードバック方法・教員の資質向上方策について検討を行い、教員の相互評価結果の報告等を実施している。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画１－２－２－１）

上記の通り、全学的な授業評価アンケートの定期実施とその結果に基づく授業改善や、公開型の講評会や試験演奏会・レッスン等を機会とした教員同士の相互評価や授業内容の共有・意見交換等により、芸術分野の特性を踏まえた教育力の向上に繋がっている。また、海外大学等との共同プログラムや産学連携・地域連携プロジェクト等の機会において、外部からの評価・意見を取り入れることにより、客観的かつ多角的な視点で教育内容の改善・充実およびＦＤが行われている。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画１－２－２－１）

(A)　授業評価アンケートを継続的に実施し、定量的・定性的な分析により経年変化等を捉え、授業改善やＦＤに役立てていく。

(B)～(C)　各学部・研究科において、引き続き、産業界や海外大学等から外部人材を招聘しての公開型の講評会・試験演奏会等を積極的に実施し、芸術分野の特性を踏まえたＦＤの充実に繋げる。

（３）中項目１－３「学生への支援」の達成状況の分析

〔小項目１―３－１の分析〕

小項目の内容	**【Ⅰ－１－（３）－１】** グローバル化時代における多様なニーズに対応するため、学習支援・生活支援・経済支援体制を拡充する。

○小項目１－３－１の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	1	0
中期計画を実施している。	1	0
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	2	0

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」

本小項目については、関係する全ての中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および各中期計画の達成状況に記載の通り、顕著な実績を挙げている。

中期計画１－３－１－１に記載の通り、2018 年 9 月に、新たに国際藝術リソースセンター（IRCA：International Resource Center of the Arts）を竣工し、図書館としての基本性能の大幅な強化に加え、「ラーニングコモンズ」の新設により、多様な方法での学修が寄与するとともに、空間・壁面を利用したコンサート、展示、ワークショップ等のイベント開催スペースを拡充した。また、ダイバシティなキャンパス環境の整備として、特別修学支援室の専用スペースの整備、バリアフリー対策工事の実施、段差解消機の設置、多目的トイレの新設等を実施した。
また、中期計画１－３－１－２に記載の通り、学生の海外留学・海外活動に対する支援を中心に、新たな奨学金制度を創設しており、「アーツ・スタディ・アブロード・プログラム(ASAP)」の実施や、「大学の世界展開力強化事業」の活用、「ベルリン・フィルハーモニー・カラヤン・アカデミー」との協定締結による同アカデミーへの派遣制度の創設等も推進した。
これらの取組により、図書館施設やバリアフリー対応等のハード面、図書資料等の教育研究リソース、奨学金等の経済的支援、海外派遣プログラム等の場や機会の創出など、グローバル化時代における多様なニーズに対応した多角的な学習支援・学生生活支援の一体的な拡充が実現している。

○特記事項（小項目１－３－１）
(優れた点)

・　IRCA の創設により、図書館としての基本性能が大幅に補強され、収容能力は従来の 1.6 倍となり、学生からの要望が多かった開架率は 19%（7 万冊）から 50%（18 万冊）に増加した。（中期計画１－３－１－１）

・　全学として、海外実践研修型授業への学内助成事業「アーツ・スタディ・アブロード・プログラム(ASAP)」を毎年度実施し、参加学生を「海外派遣奨学金」により支援することで、海外における学生の活動を促進し、2016～19 年度の 4 年間で、同事業・奨学金により延べ 462 名の学生が海外研修に参加した。（中期計画１－３－１－２）

・　大学の世界展開力強化事業等の活用により、海外大学との国際共同プログラムや海外留学・海外研修に参加する学生に対して、渡航費や宿泊費の支援を実施し、2016～19 年度の 4 年間で、延べ 245 名の学生が、同事業の活用による支援を受けて海外における実践的な活動に参加した。（中期計画１－３－１－２）

・　2018 年度に、「ベルリン・フィルハーモニー・カラヤン・アカデミー」と人材育成に係る協定（特別選抜制度）を締結し、同アカデミーのヴァイオリン部門に「東京藝術大学枠」が設けられ、試験が毎年行われ、合格者は 2 年間同アカデミーに留学できる制度を構築した。以降毎年度、本学において「派遣者オーディション」を実施しており、合格した派遣者には寄附金を原資とする奨学金によりサポートが行われる。（中期計画１－３－１－２）

・　2017 年度より毎年度、シャネルやセリーヌ等フランスを代表するラグジュアリーブランド 81 社と歴史的文化施設 14 団体により構成される文化機関「コルベール委員会」との連携により、学生を対象にコンペを行う本学限定のアワードを設立し、入賞した学生作品の展覧会を本学大学美術館で行うとともに、上位入賞学生はパリでの展示に招待される。（中期計画１－３－１－２）

（特色ある点）

・　IRCA 内に新設した「ラーニングコモンズ」は、用途に応じて自由に組み替えられるオリジナルの家具が配置されており、空間・壁面を利用したコンサート、展示、ワークショップ等のイベントにも対応できる本学ならではのスペースである。（中期計画１－３－１－１）

・　美術学部・研究科の油画専攻では、独自のプログラムとして、公益財団法人石橋財団の助成による石橋財団国際交流油画奨学生を実施している。海外留学や海外での創作研究活動・リサーチ等を希望する学生に対し、渡航費と現地での活動資金を支援するもので、短期型の派遣（主に学部学生）、長期型の派遣（主に大学院学生）および海外アーティストインレジデンスへの参加を目的とした枠の三枠で募集を行い、毎年 10 名ほどの学生が本奨学プログラムを活用して海外渡航・海外留学に臨んでいる。（中期計画１－３－１－２）

・　音楽学部・研究科独自の支援制度として、2017 年度に「宗次徳二海外留学支援奨学金」が創設された。これは、海外の高等教育機関への留学や、海外で開催される国際コンクールへの参加、海外での実技指導者からのレッスン受講等を目指す学生に、最大で年額 200 万円の奨学金給付を行うものであり、世界トップアーティストの育成促進に繋がっている。（中期計画１－３－１－２）

（今後の課題）

・　グローバル展開等に係る新たな取組として、2021 年度末までに大学会館の改修工事を行い、専門性や国籍を超えた多様な学生間交流を促進する為の国際交流拠点を整備するにあたり、構想を実現する為の仕組みや仕掛けについて、ハードおよびソフトの両面から、十分な検討を行う。（中期計画１－３－１－１）

・　学生の海外留学・海外活動に係る経済的支援制度や海外派遣プログラム等の機会を充実する為、寄附金等の募集強化や、海外大学・機関等との持続的なネットワークの構築に係る検討を進める（中期計画１－３－１－２）

〔小項目１―３－１の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画１－３－１－１に係る状況≫

中期計画の内容	【９】平成３０年度までに附属図書館改修に伴う機能強化により、学生の自主的・自律的な学習支援を充実させるとともに、専門性や国籍を超えた多様な学生間交流を実現する。また、女子学生や障がいを抱えた学生に配慮したダイバシティなキャンパス環境整備や支援体制強化を図る。
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画１－３－１－１）

(A)　2018 年 9 月、東京藝術大学国際藝術リソースセンター（IRCA：International Resource Center of the Arts）を竣工した。IRCA は、キャンパスマスタープランおよび上野「文化の杜」新構想やグローバル展開等の機能強化戦略等の方針に基づき、学長裁量経費による重点支援も含めトップマネジメント下で整備を進めてきた芸術文化拠点であり、本学が有する過去・現在・未来の藝術資源の保存や活用、そして世界に向けての発信を担う施設として創設された。図書館としての基本性能が大幅に補強され、収容能力は従来の 1.6 倍となり、学生からの要望が多かった開架率は 19%（7 万冊）から 50%（18 万冊）に増加した。また、新設した「ラーニングコモンズ」には、用途に応じて自由に組み替えられるオリジナルの家具を配置し、空間・壁面を利用したコンサート、展示、ワークショップ等のイベントにも対応できる、本学ならではのスペースである。

(B)　2016 年度、特別修学支援室の専用スペースを大学会館に整備し、障がいのある学生への支援について、各部局の実情に即した支援までの流れを定め、学習支援・生活支援体制を強化した。また、バリアフリー対策工事の実施、段差解消機設置、多目的トイレの新設など、ダイバシティなキャンパス環境の整備を段階的に実施している。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画１－３－１－１）
上記の通り、IRCA の創設により図書館としての基本性能が大幅に強化され、併せて、ラーニングコモンズの新設により、学生の学習環境および教育研究成果の発信に係る場が充実しており、障害のある学生への支援の強化やダイバシティなキャンパス環境の整備に係る取組と併せ、グローバル化時代における多様なニーズに対応した学習支援・学生生活支援の拡充に繋がっている。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画１－３－１－１）

(A)　グローバル展開等に係る新たな取組として、2021 年度末までに大学会館の改修工事を行い、専門性や国籍を超えた多様な学生間交流を促進する為の国際交流拠点を整備する。

(B)　上記の拠点整備と一体的に、引き続き、ダイバシティなキャンパス環境の整備を着実に実施する。

≪中期計画１－３－１－２に係る状況≫

中期計画の内容	【10】海外渡航における経済的負担の軽減を目的としたプロジェクト基金を設立し、学生の留学・海外活動等を積極的に支援する。また、傑出した才能を有する学生を支援するため、平成２８年度から、新たに成績優秀学生への学生納付金免除制度を整備するとともに、平成２９年度から、在学中、特に優れた業績を上げた学生に対する特別奨学金制度を創設する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画１－３－１－２）

(A)　全学として、海外実践研修型授業への学内助成事業「アーツ・スタディ・アブロード・プログラム(ASAP)」を毎年度実施し、参加学生を「海外派遣奨学金」により支援することで、海外における学生の活動を促進している。2016～19 年度の 4 年間で、同事業・奨学金により延べ 462 名の学生が海外研修に参加した。**(別添資料 27-19)**

(B)　大学の世界展開力強化事業等の活用により、海外大学との国際共同プログラムや海外留学・海外研修に参加する学生に対して、渡航費や宿泊費の支援を実施している。2016～19 年度の 4 年間で、延べ 245 名の学生が、同事業の活用による支援を受けて海外における実践的な活動に参加した。（**【再掲】別添資料 27-02, 27-03, 27-08, 27-09**）

(C)　海外留学を希望する学生に対し 40 万円を一括給付する「東京藝術大学海外留学支援奨学金」制度を毎年度実施し、平均 4～5 名の学生を採択している。**（別添資料 27-20）**

(D)　交換留学や短期の学生派遣プログラムにおいて、日本学生支援機構(JASSO)の奨学金制度に計画を申請し、継続的に採択を受けており、学生の海外派遣に係る支援を充実している。

(E)　成績優秀学生への学生納付金免除制度として、飛び入学試験による入学者の入学料及び授業料免除を実施している。また、2017 年度に美術学部及び及び音楽学部の在学生のうち成績優秀者を対象とした新たな特別奨学金制度を創設し、給付を開始した。

(F)　2018 年度に、「ベルリン・フィルハーモニー・カラヤン・アカデミー」と人材育成に係る協定（特別選抜制度）を締結し、同アカデミーのヴァイオリン部門に「東京藝術大学枠」が設けられ、試験が毎年行われ、合格者は 2 年間同アカデミーに留学できる制度を構築した。以降毎年度、本学において「派遣者オーディション」を実施しており、合格した派遣者には寄附金を原資とする奨学金によりサポートが行われる。**(【再掲】別添資料 27-06, 27-07**）

(G)　美術学部・研究科の油画専攻では、独自のプログラムとして、公益財団法人石橋財団の助成による石橋財団国際交流油画奨学生を実施している。海外留学や海外での創作研究活動・リサーチ等を希望する学生に対し、渡航費と現地での活動資金を支援するもので、短期型の派遣（主に学部学生）、長期型の派遣（主に大学院学生）および海外アーティストインレジデンスへの参加を目的と

した枠の三枠で募集を行い、毎年 10 名ほどの学生が本奨学プログラムを活用して海外渡航・海外留学に臨んでいる。(別添資料 27-21)

(H)　音楽学部・研究科独自の支援制度として、2017 年度に「宗次徳二海外留学支援奨学金」が創設された。これは、海外の高等教育機関への留学や、海外で開催される国際コンクールへの参加、海外での実技指導者からのレッスン受講等を目指す学生に、最大で年額 200 万円の奨学金給付を行うものであり、世界トップアーティストの育成促進に繋がっている。(別添資料 27-22)

(I)　2017 年度より毎年度、シャネルやセリーヌ等フランスを代表するラグジュアリーブランド 81 社と歴史的文化施設 14 団体により構成される文化機関「コルベール委員会」との連携により、学生を対象にコンペを行う本学限定のアワードを設立し、入賞した学生作品の展覧会を本学大学美術館で行うとともに、上位入賞学生はパリでの展示に招待される。(別添資料 27-23a)

(J)　2019 年度より、本学とブルガリジャパン株式会社が連携して行う文化支援プロジェクト「BVLGARI MECENATE/ブルガリ　メチェナーテ」を開始した。本企画は、若い作家に芸術活動のチャンスを提供すること、日本の伝統的美術・工芸技術技法の継承に役立つこと、古き良き技術とコンテンポラリーの融合・出逢いを目的としている。作品プランの公募を在学生・卒業生を対象として行い、優秀作品には奨学金やメディア掲載の機会が与えられる。(別添資料 27-23b)

(K)　成績優秀者等に対する新たな奨学金制度として、2016 年度に「Art の力賞」「早暁賞」、2017 年度に「宮田亮平奨学金」「あさかぜ賞」、2018 年度に「江崎スカラーシップ」を創設し、従来からの奨学金制度も含め、毎年度 180～200 名程度の学生を採用している。(別添資料 27-23c)

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画１－３－１－２）
　上記の通り、学生の海外留学・海外活動に対する支援を中心に、新たな奨学金制度を創設しており、また、「アーツ・スタディ・アブロード・プログラム(ASAP)」の実施や、「大学の世界展開力強化事業」の活用、「ベルリン・フィルハーモニー・カラヤン・アカデミー」との協定締結による同アカデミーへの派遣制度など、経済的な支援だけでなく、海外活動の場や機会の創出と一体的な取組を実施することで、グローバル化時代における多様なニーズに対応した学習支援・学生生活支援の拡充に繋がっている。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画１－３－１－２）
(A)～(K)　引き続き、学生の海外留学・海外活動に係る経済的支援制度や海外派遣プログラム等の機会を充実する為、寄附金等の募集強化や、海外大学・機関等との持続的なネットワークの構築を進めていく。

（４）中項目１－４「入学者選抜」の達成状況の分析

〔小項目１―４－１の分析〕

小項目の内容	**【Ⅰ－１－（４）－１】** アドミッションポリシーに基づき、志願者一人一人の適性、能力を仔細に検証し、多角的・総合的に判断する入学者選抜方法を徹底するとともに、稀有な才能を有する者の積極的な受入れ等、グローバルスタンダードを踏まえた新たな入学者選抜方法を導入する。

○小項目１－４－１の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	1	0
中期計画を実施している。	3	0
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	4	0

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」

本小項目については、関係する中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および中期計画の達成状況に記載の通り、特色のある取組を実施している。

中期計画１－４－１－１に記載の通り、明確なアドミッションポリシーを作成した上で、中期計画１－４－１－２および１－４－１－３に記載の通り、飛び入学制度や国際バカロレア資格を活用した入試制度、外国人留学生入試など、新たな入試制度を段階的に導入し、併せて、大学全体のブランディング戦略の一環として入試に係る広報・情報発信を積極的に展開している。加えて、入学試験においては丁寧に時間をかけ、受験者一人一人の基礎能力・判断能力・応用能力を判定する多角的・総合的な審査を継続的に実施することで、稀有な才能を有する者の積極的な受入れ等、グローバルスタンダードを踏まえた入学者の募集・選抜に繋がっている。

また、早期教育プロジェクトの全国的な展開や、早期教育リサーチ・センターの創設、Web 出願システムの構築による志願者の利便性向上、早期教育受講者から卒業生までを含めて一元的に管理する総合的なデータベースの構築等、入試段階に限らず、入学前から卒業後までを含む継続的なキャリア支援の充実や、各段階における教育プログラムの有効性の検証等の効率的な実施に繋がるよう、多角的な取組を推進している。

○特記事項（小項目１－４－１）
(優れた点)

・　音楽学部において、2017 年度入試(2016 年度実施)より「飛び入学」入試を実施し、同年度および 2020 年度入試(2019 年度実施)に、それぞれヴァイオリン専攻で１名の合格者を決定し、専用のカリキュラムであるスペシャルソリストプログラム(SSP：Special Soloist Program)による指導を行っている。飛び入学制度により入学した学生が既に国際的な賞を複数受賞するなど、大きな成果があがっている。（中期計画１－４－１－２）

・　外国人留学生志願者数について、2015 年度入試に対して 2019 年度入試の実績値は、学士課程では 23 名から 41 名と約２倍に増加、修士課程では 106 名から 417 名と約４倍に増加、博士後期課程では 31 名から 54 名に増加しており、本学に入学する外国人留学生の増加にも繋がっている。（中期計画１－４－１－４）

(特色ある点)

・　2019 年度に、広報・ブランディング戦略の一環として、受験生を含む社会への情報発信を強化するため、学長特命（広報・ブランディング戦略担当）を中心とした体制により、本学 Web サイトのリニューアルを実施し、トップページに季節ごとに変化するアニメーションを追加したほか、複数の連載コラムを新たに開始し、定期的に更新している。この成果として、本学公式 Web サイトのアクセスユーザー数は対前年度比で約 22%増加(年間約 99 万人→約 121 万人)した。また、本学の Twitter(SNS)公式アカウントのフォロワー数についても、2019 年度の１年間で約 5,000 名増加した。（中期計画１－４－１－１）

・　美術学部の入試説明会では、希望者が自作品を持ち込み講師が講評を行う、教員による学部入試合格作品の評価・解説を行う、構内に実際の入試合格作品を展示する等、様々な取組・情報発信を実施している。（中期計画１－４－１－１）

・　国際芸術創造研究科では、外国人留学生入試に係る広報の強化として、ロンドンで開催された日本留学フェアでの資料配布や個別相談の実施や、同研究科の特性を踏まえ、登録者およそ８万人のメーリングリスト Art & Education に広告を掲載する等の施策を推進している。（中期計画１－４－１－１）

・　2014 年度より全国各地で実施している「早期教育プロジェクト」は、エリアを拡大しながら毎年度継続的に 10 都市以上で実施しており、2016 年度～2019 年度の４年間で計 63 回を開催している。また、特筆すべきこととして、2018 年度より新たに全日本空輸株式会社（ＡＮＡ）とタイアップし、航空運賃を負担いただいており、持続可能なプロジェクトとなるよう自助努力を図っている。（中期計画１－４－１－２）

・　2017 年度より、義務教育段階からより専門的に音楽を勉強することを可能にする新しい教育システムとして、中学生を対象とする早期英才教育特別コースである「東京藝大ジュニア・アカデミー」を開講している。（中期計画１－４－１－２）

・　2016 年度に設置した美術研究科修士課程のグローバルアートプラクティス専攻では１学年の定員 18 名のうち 6 名を、国際芸術創造研究科修士課程のアートプロデュース専攻では１学年の定員 10 名のうち 4 名を、それぞれ外国人留学生入試により募集している。また、この外国人留学生入試においては、研究計画書やポートフォリオ等の書類・資料および Skype によるオンライン面接により合否を判定している為、入試時の渡日を必要とせず、国際的に志願者を集め、適切な入学者を確保するための制度としている。（中期計画１－４－１－４）

(今後の課題)

・　受験者一人一人の基礎能力・判断能力・応用能力を判定する多角的・総合的な入試を継続する為の安定的な体制に係る継続的な検証と改善。（中期計画１－４－１－１）

・　早期教育受講者から卒業生までを含めて一元的に管理する総合的なデータベースの構築に向けた検討・試行。（中期計画１－４－１－３）

〔小項目１―４－１の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画１－４－１－１に係る状況≫

中期計画の内容	【11】本学の伝統である、受験者一人一人の基礎能力・判断能力・応用能力を判定する多角的・総合的な審査を継続する。またグローバルスタンダードを踏まえた明確なアドミッションポリシーを平成３０年度までに作成するとともに、ブランディング戦略の一環として、入試に係る広報・情報発信を積極的に行う。
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画１－４－１－１）

(A)　2016 年度、３つのポリシーの明確化についてのプロジェクトチームを組織し、アドミッションポリシーを策定した。入学者選抜においては、同ポリシーに基づき、受験者一人一人の基礎能力・判断能力・応用能力を判定する多角的・総合的な審査を実施している。

(B)　2016 年度に、入試情報の発信に係る特設 Web サイトを新設し、入試説明会の資料や動画、在学生や卒業生の声等を同 Web サイトで公開するとともに、毎年度の新入生アンケート等の結果に基づきコンテンツを調整している。加えて、Twitter を用いて本学入試にかかるニュースを配信するなど、情報発信・入試広報の強化・充実に努めている。**(別添資料 27-24)**

(C)　2019 年度に、広報・ブランディング戦略の一環として、受験生を含む社会への情報発信を強化するため、学長特命（広報・ブランディング戦略担当）を中心とした体制により、本学 Web サイトのリニューアルを実施し、トップページに季節ごとに変化するアニメーションを追加したほか、複数の連載コラムを新たに開始し、定期的に更新している。この成果として、本学公式 Web サイトのアクセスユーザー数は対前年度比で約 22%増加(年間約 99 万人→約 121 万人)した。また、本学の Twitter(SNS)公式アカウントのフォロワー数についても、2019 年度の１年間で約 5,000 名増加した。**(【再掲】別添資料 27-24)**

(D)　美術学部の入試説明会では、希望者が自作品を持ち込み講師が講評を行う、教員による学部入試合格作品の評価・解説を行う、構内に実際の入試合格作品を展示する等、様々な取組・情報発信を実施している。また、「デッサンコンクール(講習会)」では、受験生を対象にした実践的な講習を行い、作品の評価付けと講評会を実施している。

(E)　音楽学部では、毎年度７月下旬の土曜日・日曜日にオープンキャンパスを開催し、入試広報に力を入れている。実施に当たっては Web 事前申込み制を導入し利用者の利便性を向上させ、来場者アンケートの結果を踏まえて、年々内容を充実させている。

(F)　映像研究科では毎年度、入試説明会を京都会場・上野会場・横浜会場で開催しているほか、受験希望者の個別対応を行う研究室訪問を実施している。また、説明会の開催にあたっては、ツイッター広告の配信等により情報の周知を効果的に行いつつ、学生作品の上映を併せて行う等の施策を実施している。加えて、同研究科のキャンパスが所在している横浜市および横浜市内の大学と連携し

て行われる「ヨコハマ大学まつり」や、「大学・都市パートナーシップ協議会（横浜市政策局大学調整課)」の WEB サイトにおいても入試広報を実施するなど、地域連携との一体的な施策を展開している

(G)　国際芸術創造研究科では、毎年度の入試説明会に加え、外国人留学生入試に係る広報の強化として、ロンドンで開催された日本留学フェアでの資料配布や個別相談の実施や、同研究科の特性を踏まえ、登録者およそ８万人のメーリングリスト Art & Education に広告を掲載する等の施策を推進している。

(H)　2017 年度に、大学全体の広報・ブランディング戦略の一環として、入試広報とも連動し、新たな広報誌「藝える（うえる)」を創刊した。2019 年度末までに第１号～第６号を制作・発行しており、様々な観点で東京藝大の魅力や「藝大らしさ」を広く発信している。また、「藝える」は、一般の方々や大学関係者等から内容・構成等が高く評価されており、編集長を務めるデザイン科の教員は、2019 年 9 月に国立大学協会が主催した「国立大学法人等広報担当者勉強会」に講師として招かれ、「東京藝術大学広報誌『藝える』のつくり方」と題して講演を行い、各大学・機関の広報担当者からの質疑等に応じた。**(別添資料 27-25)**

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画１－４－１－１）
　上記の通り、明確なアドミッションポリシーの作成した上で、大学全体のブランディング戦略の一環として入試に係る広報・情報発信を積極的に展開し、入学試験においては丁寧に時間をかけ、受験者一人一人の基礎能力・判断能力・応用能力を判定する多角的・総合的な審査を継続的に実施することで、適切な入学者の募集および選抜に繋がっている。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画１－４－１－１）

(A)　受験者一人一人の基礎能力・判断能力・応用能力を判定する多角的・総合的な入試を継続する為の安定的な体制に係る継続的な検証と改善。

(B)～(H)　入試説明会および、Web サイトや SNS を用いた入試広報・情報発信等の更なる充実。

≪中期計画１－４－１－２に係る状況≫

中期計画の内容	【12】音楽学部において、稀有な才能を有する者を対象として、入学後の特別カリキュラムを連動させた独自の飛び入学制度を平成２８年度から実施する。また、毎年国内５か所以上の市町村において、高校生以下を対象とする個人レッスンを中心とした早期教育プログラムを継続的に実施する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画１－４－１－２）

(A)　音楽学部において、2017 年度入試(2016 年度実施)より「飛び入学」入試を実施し、同年度および 2020 年度入試(2019 年度実施)に、それぞれヴァイオリン専攻で１名の合格者を決定し、専用のカリキュラムであるスペシャルソリストプログラムによる指導を行っている。**(別添資料 27-26)**

(B)　2014 年度より全国各地で実施している「早期教育プロジェクト」は、エリアを拡大しながら毎年度継続的に 10 都市以上で実施しており、2016～2019 年度の４年間で計 63 回を開催している。また、2018 年度より新たに全日本空輸株式会社（ＡＮＡ）とタイアップし、航空運賃を負担いただいており、持続可能なプロジェクトとなるよう自助努力を図っている。**(【再掲】別添資料 27-01)**

(C)　2017 年度より、義務教育段階からより専門的に音楽を勉強することを可能にする新しい教育システムとして、中学生を対象とする早期英才教育特別コースである「東京藝大ジュニア・アカデミー」を開講している。**(別添資料 27-27)**

(D)　2017 年度に早期教育リサーチ・センターを創設し、音楽における早期教育に関する研究を進め、その成果に基づき早期教育プロジェクトおよびジュニア・アカデミーの内容・運営に係る検証・改善を継続に実施している。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画１－４－１－２）

上記の通り、飛び入学制度の導入・運用により、グローバルスタンダードを踏まえた入学者選抜方法が構築され、稀有な才能を有する者の積極的な受け入れに繋がっており、飛び入学制度により入学した学生が既に国際的な賞を複数受賞するなど、大きな成果があがっている。また、早期教育プロジェクトについても、毎年国内５カ所以上という当初計画の倍以上の頻度で、内容の充実を図りつつ開催しており、ジュニア・アカデミーの開講と併せ、中長期的なビジョンで卓越した音楽家を育成・輩出するプログラムが構築できている。併せて、早期教育リサーチ・センターの創設により、これらの取組・制度の継続的な検証・改善に係る体制が整備されている。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画１－４－１－２）

(A)　飛び入学制度および専用カリキュラムの安定的な運用。

(B)～(C)　早期教育プロジェクトおよびジュニア・アカデミーの持続的な実施・展開に向けた体制整備や、財源の確保等の自助努力の充実。

(D)　飛び入学制度や早期教育プログラムに係る継続的な検証と改善の実施。

≪中期計画１－４－１－３に係る状況≫

中期計画の内容	【13】インターネットを活用したＷＥＢ出願システムを平成２９年度までに導入する。また、音楽学部の早期教育受講者に係る基本情報をはじめ、卒業生までを含め一元的に管理する総合的なデータベースを構築する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画１－４－１－３）

(A)　2016 年度に、入試に係る Web 出願システムを導入した。その後も、新入生から「Web 出願にあたって困ったこと、わかりにくかったこと」等について継続的にアンケートをとり、システムの利便性について調査・確認を行い、改善を図っている。

(B)　早期教育プロジェクトおよびジュニア・アカデミーの受講者について、統合的な情報整備・管理を実施している。同情報と、在学生・卒業生等の情報とを一元的に管理する総合的なデータベースについては、各システムの相互連携等、本稼働に向けた環境の整備について検討を進めている。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画１－４－１－３）

上記の通り、Web 出願システムの構築により、志願者の利便性が向上し、幅広い入学者の募集および積極的な受け入れに繋がっている。また、早期教育受講者から卒業生までを含めて一元的に管理する総合的なデータベースの構築を進めることで、入学前から卒業後までを含む継続的なキャリア支援の充実や、各段階における教育プログラムの有効性の検証等の効率的な実施に繋がる。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画１－４－１－３）

(A)　Web 出願システムについて、引き続き利便性の向上を図りつつ運用する。

(B)　総合的なデータベースの構築に向け、引き続き検討・試行を進める。

≪中期計画１－４－１－４に係る状況≫

中期計画の内容	【14】国内のみならず広く海外も対象として、多様な個性・特色・能力を有する学生を確保するため、平成２８年度以降、飛び入学制度の導入や国際バカロレア資格活用等をはじめとする新たな入試制度を段階的に導入する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画１－４－１－４）

(A)　音楽学部において、2017 年度入試(2016 年度実施)より「飛び入学」入試を実施し、同年度および 2020 年度入試(2019 年度実施)に、それぞれヴァイオリン専攻で１名の合格者を決定し、専用のカリキュラムであるスペシャルソリストプログラム(SSP:Special Soloist Program)による指導を行っている。また、2020 年度入試より、「飛び入学」の対象専攻に管楽器を加え募集を行った。

(B)　美術学部において、先端芸術表現科で国際バカロレア資格の活用を含む帰国子女入試を毎年度実施している。また、入試運営委員会にて帰国子女入試の拡大について検討し、2020 年度入試(2019 年度実施)より油画科・工芸科・デザイン科・建築科においても導入をすることを決定し、実施した。

(C)　音楽学部において、2017 年度入試(2016 年度実施)より、国際バカロレア資格を含む外国教育課程出身者特別入試を導入した。

(D)　2016 年度に設置した美術研究科修士課程のグローバルアートプラクティス専攻では１学年の定員 18 名のうち 6 名を、国際芸術創造研究科修士課程のアートプロデュース専攻では１学年の定員 10 名のうち 4 名を、それぞれ外国人留学生入試により募集している。また、この外国人留学生入試においては、研究計画書やポートフォリオ等の書類・資料および Skype によるオンライン面接により合否を判定している為、入試時の渡日を必要とせず、国際的に志願者を集め、適切な入学者を確保するための制度としている。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画１－４－１－４）

上記の通り、飛び入学制度の導入や国際バカロレア資格活用等をはじめとする新たな入試制度を段階的に導入しており、また、新設した専攻において外国人留学生入試を実施するなど、国内のみならず広く海外も対象として、多様な個性・特色・能力を有する学生の確保に繋げており、グローバルスタンダードを踏まえた入学者選抜方法が構築できている。

これらの取組の成果により、外国人留学生志願者数について、2015 年度入試に対して 2019 年度入試の実績値は、学士課程では 23 名から 41 名と約２倍に増加、修士課程では 106 名から 417 名と約４倍に増加、博士後期課程では 31 名から 54 名に増加しており、本学に入学する外国人留学生の増加にも繋がっている。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画１－４－１－４）

(A)～(D)　各入試制度による入学者の教育成果等について検証を行うとともに、既存制度の見直しや新しい制度の導入等について引き続き検討を行う。

２　研究に関する目標（大項目）

（１）中項目２－１「研究水準及び研究の成果等」の達成状況の分析

〔小項目２―１－１の分析〕

小項目の内容	**【Ⅰ－２－（１）－１】** 伝統文化の継承を確実に行うとともに、新しい芸術表現の創造やイノベーション創出、研究成果の社会実装化を推進し、我が国の芸術文化力の向上と戦略的な国際展開、産業競争力強化等に貢献する。

○小項目２－１－１の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	2	0
中期計画を実施している。	2	0
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	4	0

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」

本小項目については、関係する全ての中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および各中期計画の達成状況に記載の通り、顕著な実績を挙げている。

中期計画２－１－１－１に記載の通り、本学 COI 拠点において、芸術と科学技術の融合を基盤として、伝統文化の伝承・世界発信や教育・コミュニケーションに関する研究等を総合的に推進し、文化教育コンテンツや文化外交アイテムの開発・社会実装を実現している。

また、全学的にも、中期計画２－１－１－３および２－１－１－４に記載の通り、学内における芸術諸分野の枠を超えた連携・共同を促進しつつ、国内及び海外関係機関とのネットワーク基盤を構築し、人材の相互交流・国際循環や、他分野の研究者との学際的な領域に関する連携・共同研究等の機会を拡大している。

加えて、中期計画２－１－１－２に記載の通り、本学の大学美術館や奏楽堂および、学外施設等も有効に活用し、多数の展覧会・演奏会等を開催することで研究成果を広く発信しており、更に、国際藝術リソースセンターや藝大アートプラザ等、新しい成果発信の場も順次拡充している。

これらの取組により、伝統文化の継承を確実に行うとともに、新しい芸術表現の創造やイノベーション創出、研究成果の広域的な発信および社会実装化を推進し、我が国の芸術文化力の向上と戦略的な国際展開、産業競争力強化等への貢献および、本学の機能強化による個性の伸長に繋がっている。

○特記事項（小項目２－１－１）
(優れた点)

・　本学の教員が国内外で多数の受賞をしており、本学における研究成果の質の高さと、社会への貢献を表している（中期計画２－１－１－３）

・　文部科学省ＣＯＩ拠点事業「「感動」を創造する芸術と科学技術による共感覚イノベーション」の取組について、2016 年度および 2018 年度に実施された中間評価で、いずれも最高の「Ｓ評価」を獲得した。（中期計画２－１－１－１）

・　2016 年 5 月、G7　伊勢志摩サミットのサイドイベント「テロと文化財ーテロリストによる文化財破壊・不正取引へのカウンターメッセージ」において、本 COI 拠点で制作したクローン文化財の「バーミヤン東大仏天井壁画・天翔ける太陽神」と「法隆寺金堂壁画第 6 号壁」を展示し、その意義を、本学教員が G7 各国首脳に直接説明・解説し、全世界に向けて発信した。（中期計画２－１－１－１）

・　2017 年度、オランダ芸術科学保存協会との協定に基づく共同研究、人材交流等を実施し、東京都美術館で開催されたブリューゲル作「バベルの塔」展との関連企画「Study of BABEL」展では、3 メートルを超える立体化したバベルの塔やクローン文化財を制作・展示したほか、本国オランダ・ボイマンス美術館での「BABEL／Old Masters Back From JAPAN」展においても「バベルの塔」拡大複製画、３D 解説映像、動く絵画作品の 3 点を出展し、多数の現地メディアから取材を受ける等好評を得た。（中期計画２－１－１－１）

・　2019 年度に「横浜音祭り 2019」で社会包摂事業として、発達障がいのある子供たちとその保護者が一緒に参加・体験し楽しみながら感性や感覚を磨くプログラム「音と光の動物園」を実施し、その映像コンテンツが、文部科学省学習指導要領準拠令和２年度改訂版教育芸術社小学校音楽教科書準拠の副教材「小学生の音楽鑑賞・表現」に採用・収録された。（中期計画２－１－１－１）

・　2018 年度、本学と南カリフォルニア大学（USC）およびジャパン・ハウスロサンゼルスの主催により、米国・ロサンゼルスの Aratani Theatre において、「音楽とアニメーションの調べ in LA」を開催した。この取組は、2017 年度にクラウドファンディングによる支援を得て本学がアニメーション化したヴィヴァルディによる名曲「四季」の音楽世界の映像と、本学及び USC 両音楽学部の精鋭学生と本学澤和樹学長による生演奏とを AI（人工知能）技術により同期させて上映・演奏する世界初のライブ・アニメーション・コンサートである。会場の収容人数 880 人に対して 1600　人以上の申し込みがあり、キャンセル待ちが出るほどの盛況となったほか、コンサートの様子は、NHK の全国ニュース及び NHK World で放送され、JR のトレインニュースでも繰り返し放映された。また、2019 年度は、同コンサートをフランスの第 43 回アヌシー国際アニメーション映画祭の特別会場のアヌシー城内で上演した。加えて、エストニアやブルカリアにおいても上演し、ブルガリア国立文化宮殿では、3000 人の観客席を有するホールが創設以来初めて満席になるという快挙となった。（中期計画２－１－１－１）

・　2019 年度、京都国立近代美術館、朝日新聞社との共催による展覧会「円山応挙から京都近代画壇へ」では、近世京都画壇の祖とも言える円山応挙の表現と技法を詳しく検証して、その伝統表現が近代の京都系日本画の芸術表現創造にどのように継承されたかを多角的に考察した。日本美術や日本画の専門家からの評価も高く、予想の 5 万人をはるかに越える 76,918 人の入館者を得た。（中期計画２－１－１－２）

・　2017 年度の第 7 回モスクワ国際現代美術ビエンナーレ「Clouds⇄Forests」や、フランスのポンピドゥ・センター・メッス別館で開催された「ジャパノラマ：1970 年以降のアートの新しいヴィジョン」展、2018 年度に日仏両政府の協力の下フランスで実施された大型日本文化紹介事業「ジャポニスム 2018」の一環である「深みへ - 日本の美意識を求めて - 」展等において、国際芸術創造研究科の教員がキュレーターを務めた。（中期計画２－１－１－２）

・　2016 年度より「国際文化財保存修復プロジェクト室」において、一般財団法人日本国際協力センター（JICE）と共同企業体を設立し、独立行政法人国際協力機構（JICA）より 2016 年 11 月から 3 ヵ年計画の「大エジプト博物館合同保存修復プロジェクト」を受託し、大エジプト博物館保存修復センターの保存修復･保存科学の専門家と日本人専門家とが合同で対象遺物の調査、移送、保存修復を行うことで、人材育成および技術移転を図ることを目的とした活動を実施した。（中期計画２－１－１－４）

（特色ある点）

・　法隆寺釈迦三尊像のクローン文化財としての再現にあたって、中核的なプロデュースを行い、高岡市の伝統工芸である鋳物技術を応用するなど、我が国独自のコンテンツや技術をもとにした文化外交アイテムや地方創生ビジネスの開発と実装において、成果をあげている。（中期計画２－１－１－１）

・　2019 年 10 月に、横浜市の「横浜音祭り 2019」において、本学の教員とヤマハ株式会社とが共同開発した、障害の有無や、楽器の演奏経験の有無など、その人の能力や経験に関わらず「だれでも」演奏する楽しさを体感できる「だれでもピアノ」を出展し、体験ワークショップを実施した。（中期計画２－１－１－１）

・　2016 年度、大学美術館において、全国美術館会議および東北地方３県の県立美術館との連携により「いま、被災地から　岩手･宮城・福島の美術と震災復興」展を開催し、9,032 名の入館者を得た。東北地方の伝統美術と現代美術を展示公開するとともに、美術品の震災復興の記録を紹介し、今後も続く復興活動への支援を行った。（中期計画２－１－１－２）

・　南カリフォルニア大学および株式会社スクウェア・エニックスとの連携によりゲーム分野の教育研究を新たに開始し、その成果発信として、2017 年度に「ゲーム学科（仮）展」、2018 年度に「ゲーム学科（仮）０年次展」を開催した。（中期計画２－１－１－２）

・　演奏藝術センターが中心となって音楽学部・研究科の枠を超え、また、舞台美術を美術学部･研究科が担当する絢爛豪華な演奏会「和楽の美」シリーズとして、2016 年度に「邦楽絵巻「大和は国のまほろば」」、2017 年度に「源平の盛衰～有為転変賦」、2018 年度に「和楽の美　安土桃山～信長・秀吉英雄譚」、2019 年度に「大江戸歌舞絵巻」を上演した。（中期計画２－１－１－３）

・　2016 年度より、芸術と科学が互いに重なり合い共有できる力を探求するための多様なアプローチの展開を目的として、学長直属の「Arts Meet Science プロジェクト」を展開している。また、順天堂大学と包括連携協定を締結し、音楽セラピー等の共同研究の推進や、解剖・病理分野と美術解剖学における連携、ホスピタルアート・ヒーリング アートの展開など、医学・医療と芸術の融合および相乗効果の最大化を目指した取組を進めている。（中期計画２－１－１－４）

（今後の課題）

・　COI 拠点におけるこれまでの活動によって得られた新たなコンテンツや表現方法を、自立的で持続的なイノベーション・プラットフォームの構築へとつなげていく。（中期計画２－１－１－１）

・　大学美術館や奏楽堂等、本学における成果発信に係る中核的な施設について、計画的な運営・修繕を実施していく。（中期計画２－１－１－２）

〔小項目２―１－１の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画２－１－１－１に係る状況≫

中期計画の内容	【15】文部科学省ＣＯＩ拠点事業「「感動」を創造する芸術と科学技術による共感覚イノベーション」において、芸術と科学技術の融合を基盤として、伝統文化の伝承・世界発信や教育・コミュニケーションに関する研究等を総合的に推進し、平成３３年度までには文化教育コンテンツや文化外交アイテムの開発・社会実装を実現する。（★）
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画２－１－１－１）

(A)　文部科学省ＣＯＩ拠点事業「「感動」を創造する芸術と科学技術による共感覚イノベーション」において、以下(B)～(O)に記載する取組等により、芸術と科学技術の融合を基盤として、伝統文化の伝承・世界発信や教育・コミュニケーションに関する研究等を総合的に推進し、2016 年度および 2018 年度に実施された中間評価において、いずれも最高の「Ｓ評価」を獲得した。**（別添資料 27-28a～l）**

(B)　2016 年度に、「素心 東京藝術大学アフガニスタン特別企画展 バーミヤン大仏天井壁画～流出文化財とともに～」に壁画「太陽神と飛天」の 3D 原寸大復元を行い展示し、61 日間の会期中に 55,969 名の入場者を記録した。

(C)　2016 年 5 月、G7 伊勢志摩サミットのサイドイベント「テロと文化財ーテロリストによる文化財破壊・不正取引へのカウンターメッセージ」において、本 COI 拠点で制作したクローン文化財の「バーミヤン東大仏天井壁画・天翔ける太陽神」と「法隆寺金堂壁画第 6 号壁」を展示し、その意義を、本学教員が G7 各国首脳に直接説明・解説し、全世界に向けて発信した。

(D)　2017 年度に、本学の特許を活用して制作した「クローン文化財」により構成される世界初の展覧会「シルクロード特別企画展 素心伝心」を開催し、政府要人・著名文化人を含め、30 日間に 37,009 名の来場者を得た。

(E)　2017 年度、NICAS（オランダ芸術科学保存協会）との協定に基づく共同研究、人材交流等を実施し、東京都美術館で開催されたブリューゲル作「バベルの塔」展との関連企画「Study of BABEL」展では、3 メートルを超える立体化したバベルの塔やクローン文化財を制作し、東京都美術館及び本学 Arts & Science LAB. で展示したほか、本国オランダ・ボイマンス美術館での「BABEL／Old Masters Back From JAPAN」展においても「バベルの塔」拡大複製画、３D 解説映像、動く絵画作品の 3 点を出展し、多数の現地メディアから取材を受ける等好評を得た。

(F)　2018 年度に、「クローン文化財」の移動展示を開始し、第１回の大型展覧会として「甦る世界の文化財ー法隆寺からバーミヤンへの旅ー」を島根県立美術館で開催した。

(G)　法隆寺釈迦三尊像のクローン文化財としての再現にあたって、中核的なプロデュースを行い、高岡市の伝統工芸である鋳物技術を応用するなど、我が国独

自のコンテンツや技術をもとにした文化外交アイテムや地方創生ビジネスの開発と実装において、成果をあげている。

(H)　2016 年度に、ヤマハ株式会社が開発した AI による自動演奏システムを搭載したグランドピアノ「ディスクラビア」と、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団シャルーンアンサンブルが共演する演奏会「音舞の調べ～超越する時間と空間～」を開催した。

(I)　2017 年度に上演した「舞・飛天遊」は、芸術家（音楽と舞踏）と AI 技術の融合がコンサートの形で実証され、世界から大きな注目を集めた。

(J)　2018 年度に、「からだできくオペラ」を、文化庁戦略的芸術文化創造推進事業により企画・制作・実施した。「からだできくオペラ」は、音楽と美術だけではなく、最新技術を用いた映像等の視覚や、触覚、嗅覚からのアプローチなど、五感を最大限に活用する新しい試みとして期待されており、横浜市立ろう特別支援学校および横浜みなとみらいホールにおいて計３回のワークショップを実施し、聴覚障がいの有無にかかわらず参加者全員で体験と感動を共有できるボーダーレスな取組として成果を上げた。

(K)　2019 年 10 月に、横浜市の「横浜音祭り 2019」において、本学の教員とヤマハ株式会社とが共同開発した、障害の有無や、楽器の演奏経験の有無など、その人の能力や経験に関わらず「だれでも」演奏する楽しさを体感できる「だれでもピアノ」を出展し、体験ワークショップを実施した。「だれでもピアノ」は、演奏者のレベルや好みに合わせて自動演奏機能とペダル駆動装置を搭載したピアノ伴奏が追従するシステムを搭載している。

(L)　上記(K)と同じく「横浜音祭り 2019」で社会包摂事業として開催した「音と光の動物園」では、発達障がいのある子供たちとその保護者が一緒に参加・体験し楽しみながら感性や感覚を磨く機会として、ペーパークラフトづくり、デジタルアートと打楽器の体験、音楽とペーパークラフトで作った作品が動く映像の鑑賞など、五感に働きかけるプログラムを提供した。また「音と光の動物園」の映像コンテンツが、文部科学省学習指導要領準拠令和２年度改訂版教育芸術社小学校音楽教科書準拠の副教材「小学生の音楽鑑賞・表現」に採用・収録された。

(M)　2019 年 12 月に、本学・奏楽堂において「七感で楽しむシアター」を開催した。人間の多様性が生み出す超感覚を「七感」と名づけ、視覚・聴覚・嗅覚・触覚など様々な感覚に働きかける革新的な舞台を創出。障がいの有無を超えて子どもたちとトップアーティストが共に創り上げる〈動物の謝肉祭〉や、義足のダンサー・大前光市氏と世界的作曲家・藤倉大氏によるコラボレーションを発表した。また、トークセッションでは、作品が誕生するまでの経緯、映像や音響の仕組み等の舞台裏を紹介した。

(N)　2018 年度、NHK による８K 放送が開始されるのに合わせ、本学修了生他のクリエイターによる最新技術を使った映像表現を観覧者に体験してもらうことを目的に、COI 拠点と映像研究科および NHK が連携し、超高精細映像が広げる表現の可能性を探求することを目的として、本学上野キャンパス陳列館において展覧会「ART of 8K ～テクネ 映像の教室 in 東京藝術大学～」を企画・開催し、8 日間の会期中に約 6,399 名人が来場した。また、最終日にはパネルディスカッション「8K と表現」を開催した。

(O)　2018 年度、本学と南カリフォルニア大学（USC）およびジャパン・ハウスロサンゼルスの主催により、米国・ロサンゼルスの Aratani Theatre において、「音楽とアニメーションの調べ in LA」を開催した。この取組は、2017 年度にクラウドファンディングによる支援を得て本学がアニメーション化したヴィヴァルディによる名曲「四季」の音楽世界の映像と、本学及び USC 両音楽学部の精鋭学生と本学澤和樹学長による生演奏とを AI（人工知能）技術により同期させて上映・演奏するライブ・アニメーション・コンサートである。実施の度に速度等が微妙に変化する生演奏に合わせ、本学 COI 拠点とヤマハが共同開発した AI 技術によりアニメーションを同期上映するのは世界初であり、会場の収容人数 880 人に対して 1600 人以上の申し込みがあり、キャンセル待ちが出るほどの盛況となったほか、コンサートの様子は、NHK の全国ニュース及び NHK World で放送され、JR のトレインニュースでも繰り返し放映された。

また、2019 年度は、同コンサートをフランスの第 43 回アヌシー国際アニメーション映画祭の特別会場のアヌシー城内で上演した。加えて、エストニアやブルカリアにおいても上演し、ブルガリア国立文化宮殿では、3000 人の観客席を有するホールが創設以来初めて満席になるという快挙となった。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画２－１－１－１）

上記の通り、本学 COI 拠点において、芸術と科学技術の融合を基盤として、伝統文化の伝承・世界発信や教育・コミュニケーションに関する研究等を総合的に推進し、文化教育コンテンツや文化外交アイテムの開発・社会実装を実現しており、伝統文化の継承を確実に行うとともに、新しい芸術表現の創造やイノベーション創出により、我が国の芸術文化力の向上と戦略的な国際展開、産業競争力強化等への貢献に繋がっている。

また、これらの取組により、本学が目指す「我が国固有の芸術文化力や産学官連携基盤を活かした教育研究組織・人材育成プログラム改革等によるイノベーション創出・国際芸術拠点形成」に係る機能が大きく強化され、個性の伸長に繋がっている。

「クローン文化財」制作の基盤技術となる特許については、文化財複製の品質を飛躍的に向上させ、古くからの課題である「保存と公開」というジレンマの解消に成功したもので、経年劣化や破壊が進む文化財の複製や修復技術の伝承に資するだけでなく、教育・観光分野での活用、文化外交・アートビジネスへの展開など、今後の活用可能性に国内外から大きな期待が寄せられており、平成 29 年度全国発明表彰「21 世紀発明奨励賞」を受賞する快挙を達成した。

加えて、COI 拠点事業において主としてクローン文化財に係る研究・振興を主導してきた本学教員が、平成 30 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰において、科学技術賞（科学技術振興部門）を受賞した。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画２－１－１－１）

(A)～(O)　COI 拠点におけるこれまでの活動によって得られた新たなコンテンツや表現方法を、自立的で持続的なイノベーション・プラットフォームの構築へとつなげていく。

≪中期計画２－１－１－２に係る状況≫

中期計画の内容	【16】大学における研究推進システムの一環として、伝統文化や新たな芸術表現創造に関する研究成果を、大学美術館や奏楽堂等学内施設はもとより、学外施設等も有効に活用した展覧会や演奏会等を通して広く社会に発信する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画２－１－１－２）

(A)　2016 年度～2019 年度にかけて、以下(B)～(F)も含め、本学の大学美術館および陳列館・正木記念館で 110 件の展覧会を開催し、約 100 万人の観覧客を集めている。**(別添資料 27-29)**

(B)　2016 年度、大学美術館において、全国美術館会議および東北地方３県の県立美術館との連携により「いま、被災地から　岩手･宮城・福島の美術と震災復興」展を開催し、9,032 名の入館者を得た。東北地方の伝統美術と現代美術を展示公開するとともに、美術品の震災復興の記録を紹介し、今後も続く復興活動への支援を行った。

(C)　2016 年度に開催した「観音の里の祈りと暮らし展Ⅱ」では、長浜市と協力して、北近江地方に伝わる貴重な仏像を紹介し、30,284 名の入館者を記録した。

(D)　2018 年度、大学美術館が所蔵する上村松園の代表作《序の舞》の大規模修復の完了を記念し、「東西美人画の名作　《序の舞》への系譜」を開催し、52,858 名の入館者を得た。《序の舞》の修復課程を学術的に紹介すると共に日本伝統美術の中における「美人画」というジャンルを関東画壇と関西画壇を比較検討しながら考察し、その成果から新たな表現方法の可能性を見出すことを試みた。

(E)　2018 年度、COI 拠点と大学美術館との共同で「アートの保存・修復 ― 未来への遺産」を開催し、5,045 名の入館者を記録した。仏像、敦煌莫高窟壁画などの伝統美術も含めて、アートの保存方法あるいは復元再現方法、デジタル化の便宜性と将来的な危険性などを検証した。

(F)　2019 年度、京都国立近代美術館、朝日新聞社との共催による展覧会「円山応挙から京都近代画壇へ」では、近世京都画壇の祖とも言える円山応挙の表現と技法を詳しく検証して、その伝統表現が近代の京都系日本画の芸術表現創造にどのように継承されたかを多角的に考察した。日本美術や日本画の専門家からの評価も高く、予想の 5 万人をはるかに越える 76,918 人の入館者を得た。

(G)　2016 年度、渋谷区立松濤美術館で開催された「月―夜を彩る清けき光」に日本画研究室収蔵の国宝「源氏物語絵巻」現状模写を展示し、同研究室の行う現状摸写の正確さと緻密な表現力を広く一般に披露し、日本画の周知に貢献した。

(H)　2016 年度、銀座で開催された「銀茶会」と連携し、銀座伊東屋を舞台に茶道をテーマに展覧会を行い、工芸科教員･学生が制作した茶室･茶道具を展示し、また、藝大茶道部の協力の下、茶会を 13 回行った。以降も、毎年度継続的に連携し、「東京藝大 in 銀茶会」を実施している。

(H)　2019 年度にイタリアのミラノで開催されたフォーリサローネ「RESONANCE MATERIALS Project 2019」に美術学部・研究科が出展し、「体験性」をテーマに科の枠を超え教員・学生の制作した作品を展示した。

(I)　2016 年度～2019 年度における本学・奏楽堂でのコンサート開催数は 229 回で、約 15 万人の観客を集めている。海外大学との合同オーケストラによる演奏や、新たな演出による邦楽舞台等を発表した。**(別添資料 27-30)**

(J)　台東区や荒川区、取手市をはじめ自治体との連携も積極的に行い、また、新規の受託事業を東北や九州などの自治体から受け入れ、各地で演奏会等を開催し研究成果を発信している。2016 年度～2019 年度における受託した演奏依頼は合計で 606 件に上る(同一の依頼で年間に複数回～数十回の演奏を行う場合も 1 件としてカウントしている)。**(別添資料 27-31)**

(K)　南カリフォルニア大学および株式会社スクウェア・エニックスとの連携によりゲーム分野の教育研究を新たに開始し、その成果発信として、2017 年度に「ゲーム学科(仮)展」、2018 年度に「ゲーム学科(仮)０年次展」を開催した。

(L)　2017 年度の第 7 回モスクワ国際現代美術ビエンナーレ「Clouds⇄Forests」や、フランスのポンピドゥ・センター・メッス別館で開催された「ジャパノラマ：1970 年以降のアートの新しいヴィジョン」展、2018 年度に日仏両政府の協力の下フランスで実施された大型日本文化紹介事業「ジャポニスム 2018」の一環である「深みへ - 日本の美意識を求めて - 」展等において、国際芸術創造研究科の教員がキュレーターを務めた。**(別添資料 27-32～27-34)**

(M)　2018 年度、本学内に国際藝術リソースセンターを竣工し、併せて、本学と株式会社小学館との共同事業として、本学の学生・教職員・卒業生の作品を中心に展示・販売を行うギャラリー・ショップである「藝大アートプラザ」を本学上野キャンパス内に開設し、教育研究成果の発信の場と機能を拡充・強化した。
　また、2019 年度、茨城県取手の取手駅・駅ビル内に、新たなアート施設「たいけん美じゅつ場」をオープンし、施設内には「オープンアーカイブ」と呼ばれる展示空間を設け、本学の教育研究成果を恒常的に発信している。

(N)　本学のアーカイブセンターWeb サイトにおいて、美術資料や演奏会映像等の教育研究成果を発信・配信している。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画２－１－１－２）
　上記の通り、本学の大学美術館や奏楽堂、学外施設等も有効に活用し、多数の展覧会・演奏会等の開催により伝統文化や新たな芸術表現創造に関する研究成果を広く社会に発信しており、伝統文化の確実な継承とイノベーションの社会実装化が推進され、我が国の芸術文化力の向上と戦略的な国際展開、産業競争力強化等への貢献に繋がっている。また、国際藝術リソースセンターや藝大アートプラザ等、新しい成果発信の場も拡充している。こうした研究成果の発信と社会貢献により、本学の教員が国内外で多数の受賞をしている。**(別添資料 27-35a～d)**

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画２－１－１－２）
(A)～(N)　大学美術館や奏楽堂等、成果発信に係る中核的な施設について、計画的な運営・修繕を行いつつ、本学が有する研究シーズやアーカイブ等を Web サイト等で広く発信し、併せて、学外における成果発信の場を拡充する為の、地方自治体や民間企業、各種芸術文化施設等とのネットワークを拡大していく。

≪中期計画２－１－１－３に係る状況≫

中期計画の内容	【17】芸術研究院として再編された分野融合・横断型の研究体制を活かし、芸術諸分野の研究者同士が分野の枠を超えて連携・共同することにより、複合的領域研究を推進する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画２－１－１－３）

(A)　中国・敦煌研究院と、デジタル技術とアナログ技術を融合するための共同研究を推進し、敦煌・莫高窟の土壁構造及び壁画の再現実験を、壁画、保存科学、保存修復、東洋美術史の各研究室が共同で実施した。

(B)　東京国立博物館の制作工程模型班において、工芸科染織研究室、デザイン科、芸術学科工芸史研究室の教員・学生が協力してプロジェクトに取り組んだ。

(C)　美術学部芸術学科主催のシンポジウム「ドイツ近代美術におけるディレッタンティズム」において、音楽学部の教員、美術教育分野の教員とともに研究発表を行い、複合的領域研究を推進した。

(D)　美術学部デザイン科と GEIDAI FACTORY LAB、ガラス造形研究室、石材工房、金工工房鋳造室、木材造形工房とが連携し、共通工房の特色を活かした異種素材の結合によるデザイン及び造形についての研究を実施した。

(E)　演奏藝術センターが中心となって音楽学部・研究科の枠を超え、また、舞台美術を美術学部・研究科が担当する絢爛豪華な演奏会「和楽の美」シリーズとして、2016 年度に「邦楽絵巻「大和は国のまほろば」」、2017 年度に「源平の盛衰～有為転変賦」、2018 年度に「和楽の美　安土桃山～信長・秀吉英雄譚」、2019 年度に「大江戸歌舞絵巻」を上演した。

(F)　国際芸術創造研究科、美術学部・研究科、音楽学部・研究科とのコラボレートによる、クラッシク音楽を可視化するコンサート「BACH CONCERT：MUSIC×TYPOGRAPHY　バッハ・コンサート：音楽×タイポグラフィ」を開催した。

(G)　2017 年度、岡倉天心による『茶の本』（1906 年）の精神を受け継ぎ、日本文化の伝統の継承と新しい芸術表現の創造を目指すため、茶道各流派家元、京都美術倶楽部・東京美術倶楽部、本学茶道部による茶会「藝大茶会「それゆえに」」を開催した。併せて、教員による創作茶席の展示や演奏会等を全学横断的な取組としてオール東京藝大の体制で実施し、延べ約 2,000 人の方々を集めた。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画２－１－１－３）
　上記の通り、国際的な共同研究の機会や展覧会・演奏会等の場において、分野横断的な連携・共同を行い、複合領域の研究を推進したことにより、新しい芸術表現の創造やイノベーションの創出が促進され、我が国の芸術文化力の向上等への貢献に繋がった。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画２－１－１－３）

(A)～(G)　学部・研究科および学科・専攻の枠を超えた連携・共同を更に促進し、新しい芸術表現の創造やイノベーションの創出に係る取組を実施する。

≪中期計画２－１－１－４に係る状況≫

中期計画の内容	【18】国内及び海外関係機関との研究開発・イノベーション創出等に係るネットワーク基盤を構築するとともに、若手研究者を中心とした人材の相互交流・国際循環等を推進し、他機関・他分野の研究者と連携・共同することにより、学際的領域に関する共同研究等を推進する。（★）
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画２－１－１－４）

(A)　2016 年度より 3 年間、頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム(2018 年度からは国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業)として「マルティメディア・コンテンツに関する領域融合・実践型国際研究ネットワーク形成」を実施し、ハーバード大学、スタンフォード大学、ニューヨーク大学、ソルボンヌ大学に音楽分野および映像分野の若手研究者を派遣したほか、国際シンポジウム等を多数開催した。**(別添資料 27-36a, b)**

(B)　中国・敦煌研究院と、デジタル技術とアナログ技術を融合するための共同研究を推進し、各種文化財の保存と伝承を目指すことを目的とする「文化財共同研究に関する覚書」および、双方の学術文化交流の促進及び芸術文化の振興に資することを目的とする「学術交流協定」を締結した。これらの協定に基づき、同研究院と研究者の相互派遣を定期的に実施し、敦煌莫高窟に代表されるシルクロード芸術における文化財保護に関する学術シンポジウム及び展覧会の開催、共同研究及び学術文化交流を促進するためのシルクロード芸術の再現、芸術を通じた文化外交や観光業界への貢献を推進している。**(別添資料 27-37)**

(C)　2016 年度より「国際文化財保存修復プロジェクト室」において、一般財団法人日本国際協力センター（JICE）と共同企業体を設立し、独立行政法人国際協力機構（JICA）より 2016 年 11 月から 3 ヵ年計画の「大エジプト博物館合同保存修復プロジェクト」を受託し、大エジプト博物館保存修復センターの保存修復・保存科学の専門家と日本人専門家とが合同で対象遺物の調査、移送、保存修復を行うことで、人材育成および技術移転を図ることを目的とした活動を実施した。研究内容としては、ツタンカーメン王の墓から出土した儀式用ベッドや戦車等の移送及び三次元測量や X 線撮影、並びにマスタバ墓から発見されたイニ・スネフェル・イシェテフの壁画の電磁波レーダー解析等を行い、加えて、プロジェクト活動を広く一般へ広報するため、2017 年度に本学および国立民族学博物館（大阪）にてシンポジウム「ファラオの至宝をまもる 2017」を、2018 年度にはシンポジウム「ファラオの至宝をまもる 2018」を東北大学（仙台）および本学にて開催した。なお、本プロジェクトは世論の関心も高く、プロジェクト関係者へのインタヴューや事業の取材等も多数受けており、これまでにエジプト内も含めて 260 件以上の既出報道となっている。**(別添資料 27-38)**

(D)　2016 年度より、芸術と科学が互いに重なり合い共有できる力を探求するための、多様なアプローチの展開を目的とした学長直属の「Arts Meet Science プロジェクト」を展開している。2019 年度には第 3 回目のイベントとして、「美と科学；より豊かな社会を目指して」をテーマに、沖縄科学技術大学院大学学長ピーター・グルース氏らをゲストに迎え、また、本学と東京大学医学部の現役生も登壇し、講演・ディスカッション・演奏を実施した。**(別添資料 27-39)**

(E)　2016 年度、順天堂大学と包括連携協定を締結し、音楽セラピー等の共同研究の推進や、解剖・病理分野と美術解剖学における連携、順天堂医院におけるホスピタルアート・ヒーリング アートの展開など、医学・医療と芸術の融合および相乗効果の最大化を目指した取組を進めている。**(別添資料 27-40)**

(F)　2018 年度、JAXA より油井亀美也宇宙飛行士を招聘し、シンポジウム「未来創発講座―宇宙と芸術における未来への創造の可能性－」を開催した。

(G)　美術学部・研究科において、台湾文化部と本学との共催による日本芸術文化交流事業（光点計画）を毎年度実施している。2018 年度は、美術学部先端芸術表現科の企画により、『台湾写真表現の今〈Inside / Outside〉』と題して、展覧会及びシンポジウムを開催した。

(H)　2016 年度より本学と東京工業大学の連携活動として、共同研究会「TechArt 越境」を実施しており、その一環として、大学院において「デザインプロジェクト授業」を開講している。

(I)　本学の GEIDAI FACTORY LAB において、株式会社ムラヤマとの共同研究により音響彫刻の研究を展開し、感動創造のための器具と空間の研究に取り組み、研究成果をイタリアで開催されたミラノサローネで発表した。

(J)　映像研究科において、ゲーム分野の研究を、南カリフォルニア大学、スクウェア・エニックス等との連携により推進している。

(K)　2019 年度、ゲーム分野に係る研究の一環として、アステラス製薬、横浜市立大学とともに、ゲーミフィケーションを用いた新たなデジタルヘルスケアソリューション創出へ向けて、Health Mock Lab. を発足した。**(別添資料 27-41)**

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画２－４－１－４）
　上記の通り、国内外の様々な大学･機関とのネットワーク基盤の構築を促進し、研究者の連携および相互交流により、学際的な領域に関する共同研究等を推進した。これにより、イノベーションの創出および我が国の芸術文化力の向上と戦略的な国際展開への貢献に繋がった。
　また、これらの取組により、芸術分野の教育研究に係るアジアにおける中核機関としてのプレゼンスが向上し、他分野との融合によるイノベーション創出や国際的な芸術拠点としての機能が大きく強化され、個性の伸長に繋がっている。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画２－４－１－４）
(A)～(K)　国内及び海外関係機関との研究開発・イノベーション創出等に係るネットワーク基盤を持続的なプラットフォームへと発展させつつ、若手研究者を中心とした人材の相互交流・国際循環を更に促進する。

（２）中項目２－２「研究実施体制等」の達成状況の分析

〔小項目２―２－１の分析〕

小項目の内容	**【Ⅰ－２－（２）－１】** 産業界や国際交流協定締結校等との研究連携を強化し、新領域での研究を推進・活性化するとともに、研究組織体制強化や新たな支援体制を構築し、グローバル化や産業競争力強化等の社会的要請を踏まえた多様な研究を支援する。

○小項目２－２－１の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	2	0
中期計画を実施している。	1	0
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	3	0

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」

本小項目については、関係する全ての中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および各中期計画の達成状況に記載の通り、顕著な実績を挙げている。

中期計画２－２－１－３に記載の通り、学内において学部・研究科の枠を超えた有機的連携を図るとともに、国内外の関係機関等から多様な人材を配置し、また、中期計画２－２－１－１に記載の通り、海外大学・機関とのネットワークを拡大し、欧米からの研究者等の受入を促進しつつ、アジアにおける研究拠点として、韓国・中国・台湾をはじめ、ＡＳＥＡＮ諸国等との連携基盤を強化し、共同研究や共同プロジェクト等を積極的に展開し、教員・研究者の交流の場と機会を形成している。加えて、中期計画２－２－１－２に記載の通り、ダイバシティな研究環境を実現するため、コーディネーターやリサーチアドミニストレーターの配置による体制整備等と併せて、間接経費を活用したインセンティブの付与や研究活動に対する助成制度の拡充等を行い、芸術における革新的な研究活動等を組織的に推進している。

これらの取組により、新領域での研究の推進・活性化や、グローバル化や産業競争力強化等の社会的要請を踏まえた多様な研究の支援に繋がっている。

○特記事項（小項目２－２－１）
(優れた点)

・　2016 年度より 3 年間、頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム(2018 年度からは国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業)として「マルティメディア・コンテンツに関する領域融合・実践型国際研究ネットワーク形成」を実施し、ハーバード大学、スタンフォード大学、ニューヨーク大学、ソルボンヌ大学に音楽分野および映像分野の研究者を派遣したほか、連携機関から卓越した研究者を招聘した。（中期計画２－２－１－１）

・　映像研究科において、産業界と連携し、日中韓文化大臣会合や ASEAN+3 文化大臣会合における合意事項等に基づく事業として、ASEAN 全 10 カ国を対象とした実践的ワークショップの開催を通じて、各国の産業界や映像教育機関とも連携した

国際的映画教育の手法についての研究を推進している。（中期計画２－２－１－１）

・　2016 年度、科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」に本学の申請プランが採択されたことを機に、新たに「ダイバーシティ推進室」を設置し、コーディネーター等専門スタッフを雇用し、女性研究者に対する支援・相談体制を整備した。併せて、女性研究者の研究力向上を図るための研究支援プログラムとして、女性研究者が自らの研究分野やキャリア形成を題材として立案・運営する研究企画について学内公募を行い、特に優れたプロジェクト提案に対して助成を行う「ダイバーシティパイロットプログラム」を実施し、これまでに計 20 件の助成を行っている。（中期計画２－２－１－２）

・　2016 年度～2019 年度において、受託研究・受託事業・共同研究・共同事業等を 631 件実施しており、科学研究費補助金において 131 件の研究課題が新規採択されている。また、科学研究費補助金および受託研究・共同研究・受託事業(共同事業を含む)による外部資金獲得額は、第 2 期中期目標・計画期間と比べて第 3 期は大きく増加しており、2013 年度～2015 年度の平均獲得額が年間約 6 億 8,937 万円なのに対し、2016 年度～2018 年度の平均獲得額は年間約 9 億 7,382 万円となっている。加えて、2019 年度に評価結果が出された、令和２年度の運営費交付金の算定に係る「成果を中心とする実績状況に基づく配分」においては、「常勤教員当たり研究業績数」の項目において、本学は重点支援の枠組内で１位を獲得している。（中期計画２－２－１－２）

（特色ある点）

・　「大学の世界展開力強化事業」として採択を受けた 4 件の取組を推進し、トルコ・イスラエル、中国・韓国、ASEAN 諸国、アメリカの芸術系大学・機関とのネットワークを強化し、主に大学院生や若手教員の相互交流や共同プロジェクトを重点的に推進した。（中期計画２－２－１－１）

・　映像研究科において、三菱電機株式会社との共同研究として「ライティング機器（路面やウィンカー等のアニメーション研究）」「次世代ビル内交通システムコンセプトにおける人と施設をつなぐ映像・音のデザイン」を実施した。（中期計画２－２－１－１）

・　学長直属のアートイノベーション推進機構にＵＲＡを配置し、公的な補助金や研究費等への応募者に対する相談体制等の支援環境を整備した。また、2019 年度には産学連携・異分野融合コーディネーターを新たに雇用し、「シーズ集」を作成した。本学における「シーズ集」は、特設 Web サイト「アートイノベーションのシーズ集｜GEIDAI SEEDS 」として開発・公開しており、未来のイノベーションのきっかけとなる様々な発想のタネ（Seeds）を集め、広く社会に共有していくためのプラットフォームとして構築した。（中期計画２－２－１－１）

（今後の課題）

・　産業界や海外大学等との、質の伴う継続的な共同研究や共同プロジェクト、人材交流・国際循環を促進するための、持続可能なネットワーク・連携関係の構築。（中期計画２－２－１－１）

・　女性研究者や若手研究者等に対する支援の持続・拡大およびシーズ集の充実による多様な領域での産学連携・異分野融合事業の促進。（中期計画２－２－１－２）

〔小項目２―２－１の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画２－２－１－１に係る状況≫

中期計画の内容	【19】産業界や国際交流協定締結校、海外一線級アーティストユニット等との共同研究や共同プロジェクトを通して、積極的な教員・研究者の交流を行うとともに、アジアにおける芸術研究拠点（ハブ）として、韓国・中国・台湾をはじめ、ＡＳＥＡＮ諸国等との連携基盤を強化するとともに、欧米からの研究者等の受入体制を整備する。（★）
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画２－２－１－１）

(A)　2016 年度より 3 年間、頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム(2018 年度からは国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業)として「マルティメディア・コンテンツに関する領域融合・実践型国際研究ネットワーク形成」を実施し、ハーバード大学、スタンフォード大学、ニューヨーク大学、ソルボンヌ大学に音楽分野および映像分野の研究者を派遣したほか、連携機関から卓越した研究者を招聘した。**(【再掲】別添資料 27-36a, b)**

(B)　中国・敦煌研究院と、デジタル技術とアナログ技術を融合するための共同研究を推進し、各種文化財の保存と伝承を目指すことを目的とする「文化財共同研究に関する覚書」および、双方の学術文化交流の促進及び芸術文化の振興に資することを目的とする「学術交流協定」を締結した。これらの協定に基づき、研究者の相互交流を行い、敦煌・莫高窟の土壁構造及び壁画の再現実験等の共同研究を実施した。**(【再掲】別添資料 27-37)**

(C)　「大学の世界展開力強化事業」として採択を受けた 4 件の取組を推進し、トルコ・イスラエル、中国・韓国、ASEAN 諸国、アメリカの芸術系大学・機関とのネットワークを強化し、主に大学院生や若手教員の相互交流や共同プロジェクトを重点的に推進した。特に ASEAN 諸国については、これまであまり連携がなかったカンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムの芸術系大学・機関と、各国における絵画の技法・材料や伝統音楽等をテーマとして交流を促進した。
(【再掲】別添資料 27-02, 27-03, 27-08, 27-09)

(D)　美術学部・研究科においては毎年度、台湾文化部の共催により「台湾・日本芸術文化交流事業台湾文化光点計画」を実施し、芸術表現の可能性を探り、次世代の芸術家を育成し、文化交流の促進及び台湾文化に対する認識向上を目的とした取組を推進している。**(別添資料 27-42)**

(E)　2018 年度、韓国大邱大学校の教員を招聘し、共同プロジェクトとして「いもののかたち」と題した日韓交流展を駐日韓国大使館韓国文化院で開催した。作品展示、講演会、合同講評会を実施し、韓国のソウル大学、伝統文化大学校、大邱大学校の教員が作品を出品した。

(F)　音楽学部・研究科においては、パリ国立高等音楽院、英国王立音楽院、リスト音楽院、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団、ウィーン音楽演劇大学、韓国芸術綜合学校等の国際交流協定校と、合同演奏会やワークショップ等を通じて、積極的な教員・研究者の交流を実施している。また、韓国の延世大学、タイの

マヒドン大学等、アジアにおける新たなネットワークの拡大を促進している。

(G)　映像研究科において、三菱電機株式会社との共同研究として「ライティング機器（路面やウィンカー等のアニメーション研究)」「次世代ビル内交通システムコンセプトにおける人と施設をつなぐ映像・音のデザイン」を実施した。

(H)　映像研究科において、産業界と連携し、日中韓文化大臣会合やASEAN+3文化大臣会合における合意事項等に基づく事業として、ASEAN全10カ国を対象とした実践的ワークショップの開催を通じて、各国の産業界や映像教育機関とも連携した国際的映画教育の手法についての研究を推進している。2019年度にマレーシアで開催した映画分野のワークショップには、ASEAN諸国7カ国（マレーシア、ブルネイ、インドネシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナム）の学生が参加し、映像教育拠点の形成に大きく貢献した。

(I)　国際芸術創造研究科においては、毎年度、「ソウル／東京／台北・アートリサーチ・ワークショップ」として、韓国総合芸術学校、国立台北藝術大学との三大学合同の共同研究会を開催している。**（【再掲】別添資料27-05）**

(J)　2018年度、国際芸術創造研究科において、中国からキュレーターとアーティストを招聘し、公開シンポジウム「新たなキュレーションを求めて：情報のエコロジーとネットワーク」を開催した。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画２－２－１－１）
　上記の通り、産業界や国際交流協定締結校、海外一線級アーティストユニット等との共同研究や共同プロジェクト等を積極的に展開し、教員・研究者の交流の場と機会を形成することで、欧米からの研究者等の受入を促進しつつ、アジアにおける研究拠点として、韓国・中国・台湾をはじめ、ＡＳＥＡＮ諸国等との連携基盤を強化しており、新領域での研究の推進・活性化や、グローバル化や産業競争力強化等の社会的要請を踏まえた多様な研究に繋がっている。
　また、こうした取組により、我が国固有の芸術文化力を国際的に発信し、アジアにおける中核拠点としての機能が抜本的に強化され、世界を代表する国際芸術教育研究拠点への飛躍に向けて、個性の伸長に繋がっている。

○2020年度、2021年度の実施予定（中期計画２－２－１－１）
(A)～(J)　産業界や海外大学等との、質の伴う継続的な共同研究や共同プロジェクト、人材交流・国際循環を促進するため、持続可能なネットワーク・連携関係の構築に向けた検討・取組を推進する。

≪中期計画２－２－１－２に係る状況≫

中期計画の内容	【20】ダイバシティな研究環境を実現するため、コーディネーター・カウンセラー・キャリアアドバイザー・リサーチアドミニストレーターを新たに配置するとともに、研究支援に係る事務体制の強化等、多様な研究活動を支援する体制を整備する。また芸術における革新的な研究活動等を組織的に推進するため、間接経費を活用したインセンティブ付与等の支援システムを構築する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画２－２－１－２）

(A)　2016 年度、科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」に本学の申請プランが採択されたことを機に、新たに「ダイバーシティ推進室」を設置し、コーディネーター等専門スタッフを雇用し、女性研究者に対する支援・相談体制を整備した。併せて、女性研究者の研究力向上を図るための研究支援プログラムとして、女性研究者が自らの研究分野やキャリア形成を題材として立案・運営する研究企画について学内公募を行い、特に優れたプロジェクト提案に対して助成を行う「ダイバーシティパイロットプログラム」を実施し、これまでに計 20 件の助成を行っている。

(B)　研究活動の活性化を図ることを目的として、大型の科研費等の外部資金の獲得を目指した助走的研究に対して助成を行うこととし、間接経費を活用した学内公募「研究推進プロジェクト」を展開している。例として、2016 年度には、「和紙の耐久性に及ぼすヘミセルロースの役割の解明－雁皮紙の超長寿命化をめざして－」「20 世紀前半のヴァイオリン演奏様式史研究―野澤コレクションの調査を中心に」「映像アーカイヴスの基盤形成に関する総合的研究」の３件を採択した。

(C)　受託研究・事業等の積極的な受け入れを行うためのインセンティブとして、間接経費について、当該事業等を受け入れた部局および実施研究室に対する配分比率を拡充した。

(D)　大型の科研費に応募して不採択になった者に対し、評価結果に応じて研究費を支援する制度を導入・実施した。

(E)　妊娠・出産・子育て・介護等の理由で研究時間の確保が難しい研究者に対し、教育研究支援員を配置する制度や、ベビーシッター派遣事業を導入し、女性研究者の働きやすい環境整備に努め、支援充実を図った。

(F)　学長直属のアートイノベーション推進機構にＵＲＡを配置し、公的な補助金や研究費等への応募者に対する相談体制等の支援環境を整備した。また、2019 年度には産学連携・異分野融合コーディネーターを新たに雇用し、「シーズ集」を作成した。本学における「シーズ集」は、特設 Web サイト「アートイノベーションのシーズ集｜GEIDAI SEEDS 」として開発・公開しており、未来のイノベーションのきっかけとなる様々な発想のタネ（Seeds）を集め、広く社会に共有していくためのプラットフォームとして構築した。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画２－２－１－２）
　上記の通り、ダイバシティな研究環境を実現するため、コーディネーターやリサーチアドミニストレーターの配置による体制整備等と併せて、間接経費を活用したインセンティブの付与や研究活動に対する助成制度の拡充等を行い、芸術における革新的な研究活動等の組織的な推進し、新領域での研究の推進・活性化や、グローバル化や産業競争力強化等の社会的要請を踏まえた多様な研究の支援に繋がった。
　こうした取組の成果として、2016 年度～2019 年度において、受託研究・受託事業・共同研究・共同事業等を 631 件実施しており、科学研究費補助金において 131 件の研究課題が新規採択されている。**(別添資料 27-43, 27-44)**
　また、科学研究費補助金および受託研究・共同研究・受託事業(共同事業を含む)による外部資金獲得額は、第 2 期中期目標・計画期間と比べて第 3 期は大きく増加しており、2013 年度～2015 年度の平均獲得額が年間約 6 億 8,937 万円なのに対し、2016 年度～2018 年度の平均獲得額は年間約 9 億 7,382 万円となっている。**(別添資料 27-45)**
　加えて、2019 年度に評価結果が出された、令和２年度の運営費交付金の算定に係る「成果を中心とする実績状況に基づく配分」においては、「常勤教員当たり研究業績数」の項目において、本学は重点支援の枠組内で１位を獲得している。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画２－２－１－２）
(A)～(F)　女性研究者や若手研究者等に対する支援の持続・拡大および、シーズ集の充実による多様な領域での産学連携・異分野融合事業の促進。

≪中期計画２－２－１－３に係る状況≫

中期計画の内容	【21】新たに設置された芸術研究院において、既存の学部・研究科の枠を超えた分野融合・横断型の研究体制による有機的連携を図るとともに、新領域研究やイノベーション創出を構築するため、国内外関係機関等から多様な人材を配置するなど、研究実施体制の整備を行う。
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画２－２－１－３）

(A)　COI 拠点事業において学部・研究科を超えた体制を構築し、大阪大学、名古屋大学、情報通信研究機構、（株）JVC ケンウッド、（株）ベネッセホールディングス、ソフトバンクロボティクス（株）、（株）Makers’、一般財団法人 NHK エンジニアリングシステム、（株）NHK エンタープライズ、（株）NHK プロモーション、ヤマハ（株）、（株）東急エージェンシー、（株）朝日新聞社、（株）竹尾、小川香料（株）等の参画により産官学の連携を行い、研究テーマごとに関連機関・自治体・企業等の協力も得て、研究開発と成果の社会実装を推進している。

(B)　中国・敦煌研究院と、デジタル技術とアナログ技術を融合するための共同研究を推進し、敦煌・莫高窟の土壁構造及び壁画の再現実験を、壁画、保存科学、保存修復、東洋美術史の各研究室が共同で実施した。

(C)　壁画研究室・保存修復油画研究室・保存科学研究室が共同し、また、イタリア・ラヴェンナ国立博物館前館長、敦煌研究院から教員を招聘し、「ユーラシア大陸における壁画技法の比較調査～日本・中国・イタリア」をテーマにシンポジウムを開催し、国と分野を超えた取組を推進した。

(D)　油画技法材料研究室において、横浜国立大学やホルベイン工業等の他大学・産業界から、高精細デジタル撮影技術、蜜蝋（エンカオスティーク）による絵画技法、絵具製造等に係る専門家・研究開発者を招聘した。

(E)　演奏藝術センターが中心となって音楽学部・研究科の枠を超え、また、舞台美術を美術学部・研究科が担当する絢爛豪華な演奏会「和楽の美」シリーズとして、2016 年度に「邦楽絵巻「大和は国のまほろば」」、2017 年度に「源平の盛衰～有為転変賦」、2018 年度に「和楽の美　安土桃山～信長・秀吉英雄譚」、2019 年度に「大江戸歌舞絵巻」を上演した。

(F)　国際芸術創造研究科、美術学部・研究科、音楽学部・研究科とのコラボレートによる、クラッシク音楽を可視化するコンサート「BACH　CONCERT：MUSIC×TYPOGRAPHY　バッハ・コンサート：音楽×タイポグラフィ」を開催した。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画２－２－１－３）
　上記の通り、学部・研究科の枠を超えた有機的連携を図るとともに、国内外関係機関等から多様な人材を配置し、新領域での研究の推進・活性化に繋げた。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画２－２－１－３）

(A)～(F)　引き続き学内外の多様な連携による分野融合・横断型の研究体制の充実を図り、新領域の研究やイノベーションの創出を促進する。

３　社会との連携や社会貢献及び地域を志向した教育・研究に関する目標（大項目）

〔小項目３―１－１の分析〕

小項目の内容	【Ⅰ－３－（１）－１】 展覧会、演奏会、発表会等を通して、教育研究成果を広く社会へ提供・還元することにより、我が国の芸術文化の振興・発展や地域創生等に貢献する。

○小項目３－１－１の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	2	0
中期計画を実施している。	1	0
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	3	0

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」

本小項目については、関係する全ての中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および各中期計画の達成状況に記載の通り、顕著な実績を挙げている。

中期計画３－１－１－１に記載の通り、芸術を活かした町づくり、製品やサービスの開発、市民や子供への教育、高齢者や障がい者の活躍促進など、地域社会や産業界、海外関係機関等との連携により多数の社会実践プログラムを展開し、学部生・大学院生に対する課題解決型・社会実践型の芸術教育を推進しており、併せて、展覧会や演奏会等により教育研究成果の発信を実施している。

また、中期計画３－１－１－２に記載の通り、大学美術館、奏楽堂や学内ギャラリー、音楽ホール等の施設を活用することにより、本学が有する所蔵品等芸術資源の展示・公開をはじめ、教育研究成果発表としての展覧会、演奏会等を積極的に開催している。加えて、中期計画３－１－１－３に記載の通り、国や東京都、地域自治体等との連携により、２０２０年東京オリンピック・パラリンピックを契機とした「文化プログラム」を展開し、我が国の芸術文化の振興・発展や地域の活性化等への貢献に繋げている。

これらの取組により、教育研究成果を広く社会へ提供・還元し、我が国の芸術文化の振興・発展や地方創生等への貢献が実現している。

○特記事項（小項目３－１－１）
(優れた点)

・　2016 年度～2019 年度において、地方自治体や産業界等との受託研究・受託事業等を 631 件実施しており、受託研究等による外部資金獲得額は、第 2 期中期目標・計画期間と比べて第 3 期は大きく増加しており、2013 年度～2015 年度の平均獲得額が年間約 6 億 8,937 万円なのに対し、2016 年度～2018 年度の平均獲得額は年間約 9 億 7,382 万円となっている。（中期計画３－１－１－１）

・　音楽学部・研究科において 2014 年度より全国各地で実施している「早期教育プロジェクト」は、エリアを拡大しながら毎年度継続的に 10 都市以上で実施してお

り、2016 年度～2019 年度の４年間で計 63 回を開催している。また、特筆すべきこととして、2018 年度より新たに全日本空輸株式会社（ＡＮＡ）とタイアップし、航空運賃を負担いただいており、持続可能なプロジェクトとなるよう自助努力を図っている。（中期計画３－１－１－１）

・　大学美術館において、「藝大コレクション展」を毎年度開催している。2019 年度の開催では、本学所蔵の名品の定例的なお披露目のみならず、「池大雅《富士十二景図》全点展示」「起立工商会社工芸図案」「イギリスに学んだ画家たち」「東京美術学校日本画科の風景画」などの特集を組み、大学美術館での調査研究成果を公開した。このうちで《富士十二景図》は池大雅（1723－1776）存命中から知られていた代表作で、7 幅を当館が、4 幅を他館が所蔵しているが、1 幅は 1925 年に確認されて以来、行方不明になっていた。それを当館教員が発見・確認して所蔵者の好意により当館の所蔵となり、他館から借用した 4 幅と合わせて、約 100 年ぶりに全点を一堂に会することができた。（中期計画３－１－１－２）

（特色ある点）

・　2018 年度に香川県・長野県、2019 年度に長崎県と、活力ある地域づくりや人材育成・交流を図り、地域社会の発展に寄与することを目的とした連携・協力に関する基本協定を締結した。（中期計画３－１－１－１）

・　2017 年度より「全国美術・教育リサーチプロジェクト」を開始し、幼稚園・小学校・中学校・高等学校と繋がる美術教育の流れが途切れることの無いよう、一層関係性を強化し、大学とも深く連携することで、子供たちの成長過程に即した創造力の育成を行うことを目指し、幼稚園児、小中高生、現役大学生からアーティストまでの作品を一堂に展示する展覧会やシンポジウム等を毎年度開催している。（中期計画３－１－１－１）

・　2018 年度、本学と株式会社小学館との共同事業として、本学の学生・教職員・卒業生の作品を中心に展示・販売を行うギャラリー・ショップである「藝大アートプラザ」を本学上野キャンパス内に開設し、教育研究成果の発信の場と機能を拡充・強化した。（中期計画３－１－１－２）

・　2017 年度より毎年度、シャネルやセリーヌ等フランスを代表するラグジュアリーブランド 81 社と歴史的文化施設 14 団体により構成される文化機関「コルベール委員会」との連携により、美術学部の学生を対象にコンペを行う本学限定のアワードを設立し、入賞した学生作品の展覧会を本学大学美術館で行うとともに、上位入賞学生はパリでの展示に招待される。（中期計画３－１－１－２）

・　2019 年度、東京オリパラ大会に向けた文化プログラムとして、本学・大会組織委員会・東京都の共催により文化芸術による東京 2020 復興支援プロジェクト（復興モニュメント制作）を企画し、文化庁「日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業」の採択を受け、実施した。同プロジェクトにより、2019 年 8 月に被災三県の中高生と藝大生によりモニュメントのデザイン・メッセージを決定するワークショップを開催し、決定したデザインを元にモニュメントを制作した。（中期計画３－１－１－３）

（今後の課題）

・　大学美術館や奏楽堂等、成果発信に係る中核的な施設について、計画的な運営・修繕を行いつつ、引き続き、教育研究成果の発信に係る場と機会を拡充していく。（中期計画３－１－１－２）

〔小項目３―１－１の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画３－１－１－１に係る状況≫

中期計画の内容	【22】地域の自治体や国内外の関連機関・企業等との連携基盤を一層強化し、日本各地における早期教育プロジェクトやアートプロジェクト等の諸活動を自治体等との共同により継続的に実施する。(★)
実施状況(実施予定を含む)の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画３－１－１－１）

(A)　芸術を活かした町づくり、製品やサービスの開発、市民や子供への教育、高齢者や障がい者の活躍促進など、地域社会や産業界、海外関係機関等との連携により多数の社会実践プログラムを展開し、学部生・大学院生に対する課題解決型・社会実践型の芸術教育を推進しており、併せて、展覧会や演奏会等により教育研究成果の発信を実施している。**(【再掲】別添資料 27-11a～d)**

こうした取組の成果として、2016 年度～2019 年度において、地方自治体や産業界等との受託研究・受託事業・共同研究・共同事業等を 631 件実施しており、受託研究等による外部資金獲得額は、第 2 期中期目標・計画期間と比べて第 3 期は大きく増加しており、2013 年度～2015 年度の平均獲得額が年間約 6 億 8,937 万円なのに対し、2016 年度～2018 年度の平均獲得額は年間約 9 億 7,382 万円となっている。**(【再掲】別添資料 27-43, 27-45)**

(B)　2018 年度に香川県・長野県、2019 年度に長崎県と、活力ある地域づくりや人材育成・交流を図り、地域社会の発展に寄与することを目的とした連携・協力に関する基本協定を締結した。**(別添資料 27-46)**

(C)　中期計画１－１－１－４に記載の通り、地域社会や産業界との連携協力により、実践的な教育研究の場を構築し、社会実践プログラムとして発展させ、課題解決型・社会実践型の芸術教育を積極的に展開している。

(D)　2017 年度より「全国美術・教育リサーチプロジェクト」を開始し、幼稚園・小学校・中学校・高等学校と繋がる美術教育の流れが途切れることの無いよう、一層関係性を強化し、大学とも深く連携することで、子供たちの成長過程に即した創造力の育成を行うことを目指し、幼稚園児、小中高生、現役大学生からアーティストまでの作品を一堂に展示する展覧会やシンポジウム等を毎年度開催している。**(別添資料 27-47)**

(E)　美術学部・研究科においては、長野県東御市北御牧地区を対象に、地域資源を活かした地域の活性化や地域づくりの人材育成を図る目的として大規模な芸術祭(天空の芸術祭)を開催した。また、茨城県の県北アートフェスティバルにおいて、北茨城大子町の常陸大子駅周辺を会場とし、鍛造技術を使った Sign arm「とおりのさしえ」を制作し、街路灯のポールに設置した。

また、長野県松本市で行われた国内最大級のクラフトフェア「まつもとクラフトフェア」でクラフト作品の発表、工芸教育と鋳金の内容を充実させたワークショップを実施し、一般参加者や地域に教育研究内容や成果を発信した。

加えて、台東区芸術文化財団主催による特別公開講座を台東区との連携により開催し、絹本に植物をモチーフとした制作を行い、日本画の魅力を広く伝えられるよう指導をした。

その他、文化財保存日本が研究室において、「偕楽園好文亭襖絵　保存修復監理業務」「琉球王朝第十四代尚穆王御後絵　復元模写」「平成 30 年度県博文化遺産絵画製作業務(沖縄県)」等を実施している。

(F)　音楽学部・研究科においては、2014 年度より全国各地で実施している「早期教育プロジェクト」は、エリアを拡大しながら毎年度継続的に 10 都市以上で実施しており、2016 年度～2019 年度の４年間で計 63 回を開催している。また、特筆すべきこととして、2018 年度より新たに全日本空輸株式会社（ＡＮＡ）とタイアップし、航空運賃を負担いただいており、持続可能なプロジェクトとなるよう自助努力を図っている。

また、2018 年度には新たに、和歌山県からオペラ公演の事業を受託しており、2016 年度に設置した音楽研究科オペラ専攻による海外一流演奏家の招聘等による世界最高水準の教育プログラムの構築等と連動する形で地域連携事業の充実が実施できている。

(G)　映像研究科においては、株式会社グリーンルームとの連携による「Marine and Walk における映像展示事業」、大日本印刷株式会社との連携による「1970 年大阪万国博覧会　参加企業・関係者・関係団体の資料の現状調査と資料目録の作成」、公益財団法人ユニジャパンとの連携による「ASEAN 文化交流・協力事業（アニメーション、映画分野)」を実施した。

また、渋谷の映画館「ユーロスペース」「ユーロライブ」において、映画専攻の「『息ぎれの恋人たち』顕彰記念 芳泉文化財団助成作品 一挙 8 作品特集上映会」を開催した。

加えて、鹿児島市のシティプロモーションアニメ「火山の妖精“さつマグニョン”～未来のタマゴ篇～」を制作、公開した。

(H)　国際芸術創造研究科においては、東京都足立区の「音まち計画」、茨城県取手市の「取手アートプロジェクトオフィス」、東京都台東区の「谷中のおかって」等との連携により、多彩なアートプロジェクトの企画・運営を実施している。

また、2016 年度に本学と駐日韓国大使館韓国文化院との共催により同ギャラリーMI で開催された「東京藝術大学韓日学生交流展 Challenge Art in Japan 環状の岸辺」展において、企画運営を同研究科の学生が担当した。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画３－１－１－１）

上記の通り、地方自治体や国内外の関連機関・企業等との連携により、日本各地における早期教育プロジェクトやアートプロジェクト等の諸活動を継続的に実施しており、展覧会・演奏会等を通して、教育研究成果を広く社会へ提供・還元することにより、我が国の芸術文化の振興・発展や地域創生等への貢献に繋げている。

また、これらの取組により、本学が目指す「我が国固有の芸術文化力や産学官連携基盤を活かした教育研究組織・人材育成プログラム改革等によるイノベーション創出・国際芸術拠点形成」に係る機能が大きく強化され、個性の伸長に繋がっている。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画３－１－１－１）

(A)～(H)　本学の研究シーズの発信・活用等により新規事業の開拓を促進しつつ、産学・地域連携事業と社会実践型教育プログラムおよび博士後期課程学生等の若手研究者支援との連動を促進していく。

≪中期計画３－１－１－２に係る状況≫

中期計画の内容	【23】大学美術館、奏楽堂や学内ギャラリー、音楽ホール等の施設を活用することにより、本学が有する所蔵品等芸術資源の展示・公開をはじめ、教育研究成果発表としての展覧会、演奏会等を積極的に開催する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画３－１－１－２）

(A)　2016 年度～2019 年度にかけて、本学の大学美術館および陳列館・正木記念館で 110 件の展覧会を開催し、約 100 万人の観覧客を集めている。**（【再掲】別添資料 27-30）**

(B)　2016 年度～2019 年度における本学・奏楽堂でのコンサート開催数は 229 回で、約 15 万人の観客を集めている。海外大学との合同オーケストラによる演奏や、新たな演出による邦楽舞台等を発表した。**（【再掲】別添資料 27-31）**

(C)　本学の大学美術館において、「藝大コレクション展」を毎年度開催している。2019 年度の開催では、本学所蔵の名品の定例的なお披露目のみならず、「池大雅《富士十二景図》全点展示」「起立工商会社工芸図案」「イギリスに学んだ画家たち」「東京美術学校日本画科の風景画」などの特集を組み、大学美術館での調査研究成果を公開した。このうちで《富士十二景図》は池大雅（1723－1776）存命中から知られていた代表作で、7 幅を当館が、4 幅を他館が所蔵しているが、1 幅は 1925 年に確認されて以来、行方不明になっていた。それを当館教員が発見・確認して所蔵者の好意により当館の所蔵となり、他館から借用した 4 幅と合わせて、約 100 年ぶりに全点を一堂に会することができた。

(D)　2018 年度、本学と株式会社小学館との共同事業として、本学の学生・教職員・卒業生の作品を中心に展示・販売を行うギャラリー・ショップである「藝大アートプラザ」を本学上野キャンパス内に開設し、教育研究成果の発信の場と機能を拡充・強化した。

(E)　2018 年度、本学内に国際藝術リソースセンター（IRCA：International Resource Center of the Arts）を竣工し、施設内に新設した「ラーニングコモンズ」は、用途に応じて自由に組み替えられるオリジナルの家具を配置し、空間・壁面を利用したコンサート、展示、ワークショップ等のイベントにも対応できる、本学ならではのスペースである。

(F)　2019 年度、茨城県取手の取手駅・駅ビル内に、新たなアート施設「たいけん美じゅつ場」をオープンし、施設内には「オープンアーカイブ」と呼ばれる展示空間を設け、本学の教育研究成果を恒常的に発信している。

(G)　附属図書館において、「蓄音機コンサート」や「Art Book Fair」を定期的に開催している。

(H)　本学のアーカイブセンターWeb サイトにおいて、美術資料や演奏会映像等の教育研究成果を発信・配信している。

(I)　美術学部・研究科においては、毎年度、学内において、各学科・専攻の教育研究成果の発表として、「新入生展」「素描展」「ドローイング展」「うるしのかたち展」「染織展」「先端 Prize」「WIP 展」「取手アートパス」等を学内施設において開催している。

また、2017 年度より毎年度、シャネルやセリーヌ等フランスを代表するラグジュアリーブランド 81 社と歴史的文化施設 14 団体により構成される文化機関「コルベール委員会」との連携により、美術学部の学生を対象にコンペを行う本学限定のアワードを設立し、入賞した学生作品の展覧会を本学大学美術館で行うとともに、上位入賞学生はパリでの展示に招待される。**(【再掲】別添資料 27-23a)**

(J)　映像研究科においては、毎年度、横浜キャンパスの馬車道校舎において、音楽学部・音楽研究科の協力を得て教員・学生によるコンサート「馬車道コンサート」を開催している。

また、2017 年度および 2018 年度に、南カリフォルニア大学およびスクウェア・エニックスとの連携によりゲーム分野の教育研究を新たに開始し、その成果発信として「ゲーム学科(仮)展」および「ゲーム学科(仮)０年次展」を本学で開催した。**(【再掲】別添資料 27-28f, j)**

加えて、2018 年度に上野キャンパスに竣工した国際藝術リソースセンターにおいて、メディア映像専攻の学生作品並びにメディアアート関係作家の作品展示を開催した。

(K)　国際芸術創造研究科においては、毎年度、本学大学美術館陳列館を活用し、学生がアーティストの選定から出品交渉、展示コンセプト構成等全てを行う学生企画展を開催している。

また、2017 年度、本研究科の学生の企画により、音楽研究科オルガン専攻及び美術研究科先端芸術表現科の修士学生とのコラボレートによるコンサート「オルガンと話してみたらー新しい風を求めてー」が学内公募で選出され、奏楽堂で開催された。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画３－１－１－２）

上記の通り、大学美術館、奏楽堂や学内ギャラリー、音楽ホール等の施設を活用することにより、本学が有する所蔵品等芸術資源の展示・公開をはじめ、教育研究成果発表としての展覧会、演奏会等を積極的に開催し、我が国の芸術文化の振興・発展に繋げた。

また、国際藝術リソースセンターや藝大アートプラザの創設や、学外機関との連携等により、新しい成果発信の場と機会を拡充している。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画３－１－１－２）

(A)～(K)　大学美術館や奏楽堂等、成果発信に係る中核的な施設について、計画的な運営・修繕を行いつつ、引き続き、教育研究成果の発信に係る場と機会を拡充していく。

≪中期計画３－１－１－３に係る状況≫

中期計画の内容	【24】２０２０年東京オリンピック・パラリンピック開催に伴う「文化プログラム」実行に向け、国や東京都をはじめ、政財界や産業界、地域自治体、文化施設、芸術系大学、さらには海外も含めた関係機関等とも緊密に連携・協力することにより、国際水準での戦略的文化芸術事業を先導的に展開する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画３－１－１－３）

(A)　2019 年度、東京オリパラ大会に向けた文化プログラムとして、本学・大会組織委員会・東京都の共催により文化芸術による東京 2020 復興支援プロジェクト（復興モニュメント制作）を企画し、文化庁「日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業」の採択を受け、実施した。同プロジェクトにより、2019 年８月に被災三県の中高生と藝大生によりモニュメントのデザイン・メッセージを決定するワークショップを開催し、決定したデザインを元にモニュメントを制作した。**(別添資料 27-48)**

(B)　2019 年度、社会の基盤として芸術が担う役割の重要性や、あらゆる分野と繋がり新しい価値を創出する芸術の力を社会に発信するため、「東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクト」を開始し、文化庁「日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業」の採択を受けた。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画３－１－１－３）
　上記の通り、国や東京都、地域自治体等との連携により、２０２０年東京オリンピック・パラリンピックを契機とした「文化プログラム」を展開し、我が国の芸術文化の振興・発展や地域創生等への貢献に繋げた。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画３－１－１－３）

(A)～(B)　引き続き、国や東京都をはじめ、政財界や産業界、地域自治体、文化施設、芸術系大学、海外関係機関等と連携・協力し、我が国の芸術文化の振興・発展に向けたプログラムを展開していく。

〔小項目３―１－２の分析〕

小項目の内容	**【Ⅰ－３－（１）－２】** 社会人のキャリアアップに必要な高度かつ専門的な知識・技術・技能を身につけるためのプログラムをはじめ、生涯学習・リカレント教育等多様な受講者ニーズ、ユニバーサルアクセスに対応した総合的な教育支援プログラムを構築・提供する。

○小項目３－１－２の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	1	0
中期計画を実施している。	0	0
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	1	0

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」

本小項目については、関係する中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および中期計画の達成状況に記載の通り、顕著な実績を挙げている。

中期計画３－１－２－１に記載の通り、履修証明制度を活用したプログラムや公開講座、地方自治体との連携による市民や子ども達を対象とした教育プログラム等、本学独自の多様な教育プログラムやコンテンツを構築・提供しており、社会人のキャリアアップや、生涯学習、早期教育等、多様な受講者ニーズへの貢献に繋がっている。

○特記事項（小項目３－１－２）
(優れた点)

・　2017 年度より、SOMPO ホールディングス株式会社と連携し、「芸術×福祉」の視点を軸として、多様な人々が共生できる社会環境を創り出す人材育成を目的として履修証明プログラム「Diversity on the Arts Project (DOOR)」を開講している。本プログラムは、芸術やダイバーシティに関する知識を習得する講義に加えて、介護施設を活用したより実践的な実習などを展開し、社会人と芸大生が共に学修する場を設けている。本プログラム修了生は、SOMPO ケア株式会社が運営する「そんぽの家Ｓ 王子神谷」(サービス付き高齢者向け住宅)に１年間住み、高齢者と交流しながら作品制作を行なう「アーティスト・イン・そんぽの家Ｓ 王子神谷」を実施し、施設を利用する高齢者等の社会性、生活の質（QOL）の向上に寄与するなど、コミュニケーションの場を作るクリエイタとして、地域や医療福祉施設など多様性を持つ人々が存在する場所で活躍している。(中期計画３－１－２－１)

・　音楽学部・研究科において、2017 年度より、義務教育段階からより専門的に音楽を勉強することを可能にする新しい教育システムとして、中学生を対象とする早期英才教育特別コースである「東京藝大ジュニア・アカデミー」を開講している。また、小中学生を対象とした早期教育プロジェクトを、毎年度、全国各地で 10 回以上開催している。(中期計画３－１－２－１)

（特色ある点）

・　2017 年度より本学では、多様な感性を育む「美術」においてその「授業」の具体的な内容をリサーチすることで、授業そのものの多様性を通じ美術・芸術について教育現場の理解を深め美術界全体の活性化に繋げることを目標とし、「全国美術・教育リサーチプロジェクト」を実施している。2018 年度には、幼稚園から大学までの美術教育の流れを体感する展覧会・シンポジウム「美術の授業ってなんだろう？」を開催し、2019 年度には、国外の事例や作品も含めて調査を行い、美術教育のあるべき姿を考えることを通じて美術と社会の関係性を考え、これからの時代に必要な美術教育のビジョンを描くため、展覧会・シンポジウム「こんな授業を受けてみたい！」を開催した。（中期計画３－１－２－１）

・　2019 年度に「文化庁 文化芸術による子供育成総合事業」として「芸術系教科等担当教員等研修」を実施した。他教科に比べ、学校内における研鑽の機会が乏しい美術や音楽といった芸術系教科等担当教員を対象に、研修を通じた学びの機会を提供し、今後の芸術教育の方向性や文化と教育両分野の一体的な学習プログラムの構築を目指し、取組を進めている。（中期計画３－１－２－１）

・　2019 年度より、企業人や経営者が ART を学ぶ「出前講座」を開講し、芸術文化が有する力を様々な業界・組織の経営や現場に繋げている。（中期計画３－１－２－１）

・　映像研究科において、2018 度より、ノンディグリープログラムとして「メディアプロジェクトを構想する映像ドキュメンタリスト育成事業」（通称、RAM Association: Research for Arts and Media-project）を実施している。（中期計画３－１－２－１）

・　国際芸術創造研究科において、2016 年度～2018 年度に、「文化庁　大学を活用した文化芸術推進事業」により、社会人等を対象に、国際的な視座を持つマネジメント人材の育成を目指す「グローバル時代のアートプロジェクトを担うマネジメント人材育成事業」を実施した。また、2019 年度より、「文化庁　大学における文化芸術推進事業」により、社会人に対する実践講座として、「2020 の先にある新たな文化政策を実現するための広域連携について思考し、実践する人材育成講座 Meeting アラスミ」を実施している。（中期計画３－１－２－１）

・　2016 年度～2019 年度に 251 件の公開講座を開催し、合計で 6,757 名の受講者を集めている。（中期計画３－１－２－１）

（今後の課題）

・　履修証明プログラムや公開講座、地方自治体との連携による市民向けの講座や早期教育プロジェクト等の持続的な展開。（中期計画３－１－２－１）

・　企業人向けのプログラムの拡充。（中期計画３－１－２－１）

〔小項目３―１－２の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画３－１－２－１に係る状況≫

中期計画の内容	【25】キャリアアッププログラム実施はもとより、生涯学習やリカレント教育の観点から、履修証明制度を活用したプログラムや公開講座をはじめ、本学独自の多様な教育支援プログラムやコンテンツを構築・提供することにより、受講者ニーズに対応する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画３－１－２－１）

(A)　2017 年度より、SOMPO ホールディングス株式会社と連携し、「芸術×福祉」の視点を軸として、多様な人々が共生できる社会環境を創り出す人材育成を目的として履修証明プログラム「Diversity on the Arts Project (DOOR)」を開講している。本プログラムは、芸術やダイバーシティに関する知識を習得する講義に加えて、介護施設を活用したより実践的な実習などを展開し、社会人と芸大生が共に学修する場を設けている。本プログラム修了生は、SOMPO ケア株式会社が運営する「そんぽの家 S 王子神谷」（サービス付き高齢者向け住宅）に 1 年間住み、高齢者と交流しながら作品制作を行なう「アーティスト・イン・そんぽの家 S 王子神谷」を実施し、施設を利用する高齢者等の社会性、生活の質（QOL）の向上に寄与するなど、コミュニケーションの場を作るクリエイタとして、地域や医療福祉施設など多様性を持つ人々が存在する場所で活躍している。**（別添資料 27-49）**

(B)　2017 年度より本学では、多様な感性を育む「美術」においてその「授業」の具体的な内容をリサーチすることで、授業そのものの多様性を通じ美術・芸術について教育現場の理解を深め美術界全体の活性化に繋げることを目標とし、「全国美術・教育リサーチプロジェクト」を実施している。2018 年度は、幼稚園から大学までの美術教育の流れを体感する展覧会・シンポジウム「美術の授業ってなんだろう？」を開催し、2019 年度は、国外の事例や作品も含めて調査を行い、美術教育のあるべき姿を考えることを通じて美術と社会の関係性を考え、これからの時代に必要な美術教育のビジョンを描くため、展覧会・シンポジウム「こんな授業を受けてみたい！」を開催した。**（【再掲】別添資料 27-47）**

(C)　2019 年度に「文化庁 文化芸術による子供育成総合事業」として「芸術系教科等担当教員等研修」を実施した。他教科に比べ、学校内における研鑽の機会が乏しい美術や音楽といった芸術系教科等担当教員を対象に、研修を通じた学びの機会を提供し、今後の芸術教育の方向性や文化と教育両分野の一体的な学習プログラムの構築を目指し、取組を進めている。**（別添資料 27-50）**

(D)　2019 年度より、企業人や経営者が ART を学ぶ「出前講座」を開講し、芸術文化が有する力を様々な業界・組織の経営や現場に繋げている。**（別添資料 27-51）**

(E)　美術学部・研究科において、社会人向けの試行プログラムとして公益法人生産性本部経営アカデミーと「感性ポテンシャル開発プログラム」を開発している。企業経営層向けのキャリアアッププログラムとしての具体化に向け、試行実施と効果分析を進めている。

(F)　音楽学部・研究科において、2017 年度より、義務教育段階からより専門的に音楽を勉強することを可能にする新しい教育システムとして、中学生を対象とする早期英才教育特別コースである「東京藝大ジュニア・アカデミー」を開講している。また、小中学生を対象とした早期教育プロジェクトを、毎年度、全国各地で 10 回以上開催している。

(G)　映像研究科において、2018 度より、ノンディグリープログラムとして「メディアプロジェクトを構想する映像ドキュメンタリスト育成事業」（通称、RAM Association: Research for Arts and Media-project）を実施している。RAM Association は、芸術の社会的な役割が問われているなかで、同時代芸術としての新たな問いを発見し、それをいかにして表現していくのか、先鋭な芸術表現とプロジェクト実践を探求する場になることを目指している。**(別添資料 27-52)**

　また、横浜市からの受託事業として、公開講座「オープン・シアター」「映画編集公開講座」「コンテンポラリー・アニメーション入門」「クリスマスアニメーションワークショップ」「スクール・シアター」等を毎年度開催している。

　加えて、取手市において「ねんどで作るアニメーション「クレイアニメ」をつくろう！」、台東区立田原幼稚園にて「台東区学びのキャンパスプランニング事業『身体を使ったアニメーション表現』」を実施した。

(H)　国際芸術創造研究科において、2016 年度～2018 年度に、「文化庁　大学を活用した文化芸術推進事業」により、社会人等を対象に、国際的な視座を持つマネジメント人材の育成を目指す「グローバル時代のアートプロジェクトを担うマネジメント人材育成事業」を実施した。また、2019 年度より、「文化庁　大学における文化芸術推進事業」により、社会人に対する実践講座として、「2020 の先にある新たな文化政策を実現するための広域連携について思考し、実践する人材育成講座 Meeting アラスミ」を実施している。**(別添資料 27-53, 54)**

　加えて、2019 年度、本研究科の教員が社会人に向けてリレー式に講義を行う「文化芸術プロデュースへの招待」を開講した。

　その他、小学生とその親を対象にした公開講座「藝大ムジタンツ　親子で楽しむ　音楽とダンス！」を毎年度実施している。

(I)　2016 年度～2019 年度に 251 件の公開講座を開催し、合計で 6,757 名の受講者を集めている。**(別添資料 27-55)**

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画３－１－２－１）

　上記の通り、履修証明制度を活用したプログラムや公開講座、地方自治体との連携による市民や子ども達を対象とした教育プログラム等、本学独自の多様な教育プログラムやコンテンツを構築・提供しており、社会人のキャリアアップや、生涯学習、早期教育等、多様な受講者ニーズへの貢献に繋がっている。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画３－１－２－１）

(A)～(I)　履修証明プログラムや公開講座、地方自治体との連携による市民向けの講座や早期教育プロジェクト等を引き続き実施しつつ、企業人向けのプログラムを順次拡充していく。

４　その他の目標（大項目）

（１）中項目４－１「グローバル化」の達成状況の分析

〔小項目４―１－１の分析〕

小項目の内容	**【Ⅰ－４－（１）－１】** 国際交流協定校や芸術関係団体をはじめ、世界トップクラスの芸術系大学等との連携・ネットワーク基盤の強化を図り、国際舞台で活躍し、世界の芸術文化を牽引できる人材を継続的に育成・輩出するための人材育成プログラムを整備する。

○小項目４－１－１の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	2	2
中期計画を実施している。	0	0
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	2	2

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」

本小項目については、関係する全ての中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および各中期計画の達成状況に記載の通り、顕著な実績を挙げている。

中期計画４－１－１－２に記載の通り、海外大学・機関や国際的な芸術団体等との教育研究の充実等に係るネットワークの構築を推進し、中期計画４－１－１－１に記載の通り、国際交流協定校等との共同プロジェクトを全学的に展開し、国際共同授業および国際共同カリキュラム・コースワークの整備を進めている。
これらの取組により、世界水準の教育プログラムの構築に向けた改革が推進し、国際舞台で活躍し、世界の芸術文化を牽引できる人材を継続的に育成・輩出するための人材育成プログラムが整備された。

○特記事項（小項目４－１－１）
(優れた点)

・　2019 年度末時点で、国際共同カリキュラム・コースワークを計 6 コース整備している(ロンドン芸術大学、パリ国立高等美術学校、シカゴ美術館附属美術大学、韓国芸術総合学校、中国伝媒大学、南カリフォルニア大学)。また、機能強化の一環および、スーパーグローバル大学創成支援事業や大学の世界展開力強化事業等の活用等により、海外大学との国際共同プロジェクトの拡充を進めており、海外大学との共同授業および共同成果発表や、海外一線級アーティストの誘致を全学的に推進した。（中期計画４－１－１－１）

・　2016 年度以降に新たに 18 大学・機関との協定を締結し、本学の国際交流協定校の数は、2019 年度末時点で計 28 カ国・地域 78 大学・機関に達している。また、包括的な協定は結んでいないものの多様な形で連携関係にある海外の高等教育機関・芸術団体等は 105 機関となっている。（中期計画４－１－１－２）

・　2018 年１月に、世界規模での教育研究ネットワークを構築し、歴史も文化も異なる様々な地域の芸術大学の現状を知り、芸術分野と他分野の融合を進め、未来の教育研究について議論し、21　世紀の芸術のビジョンを共有することを目的として「五大陸アーツサミット 2018」（協力：全国芸術系大学コンソーシアム、後援：外務省、日本経済新聞社）を開催した。北アメリカ大陸から南カリフォルニア大学、コロンビア大学、南アメリカ大陸からチリ大学、ユーラシア大陸からベルリン芸術大学、モスクワ大学、オセアニア大陸からメルボルン大学、アフリカ大陸からヘルワン大学（エジプト）の学長・学部長が参加し、「大学紹介セッション」と「シンポジウム」の一般参加者は、高校生、大学生、教職員、自治体、企業、市民ら総勢 400 人を超えた。（中期計画４－１－１－２）

（特色ある点）

・　美術学部・研究科において、2015 年度～2019 年度の５年間、「Global Arts Crossing ～中東地域との戦略的芸術文化外交～」として「大学の世界展開力強化事業(中東)」の採択を受け、トルコのミマール・シナン美術大学およびアナドール大学、イスラエルのベツァルエル美術アカデミーとの国際共同プロジェクトを実施した。（中期計画４－１－１－１）

・　音楽学部・研究科において、2018 年度に、本学と英国王立音楽院の学生による合同オーケストラ交流演奏会を英国と日本において開催した（英国において英国王立音楽院及びオックスフォードの２公演、日本において郡山市及び本学の２公演の合計４公演)。また同年、本学においてシベリウス音楽院との交流演奏会、延世大学校との交流演奏会を開催した。（中期計画４－１－１－１）

・　映像研究科において、2016 年度に「日中韓学生アニメーション共同制作　co-work」として「大学の世界展開力強化事業(キャンパスアジア)」の採択を受け、2020 年度までの 5 年間の取組として、2010 年より継続している本学と韓国芸術総合学校および中国伝媒大学とのアニメーション共同制作を発展させ、国際共同制作を基盤とした共同カリキュラムを構築・実施している。
　また、2018 年度に「日米ゲームクリエイション共同プログラム-メディア革新時代の新しいアーティスト育成-」として「大学の世界展開力強化事業(アメリカ)」の採択を受け、アメリカの南カリフォルニア大学(USC)と連携し、ゲーム教育に係る国際共同プログラムを充実している。（中期計画４－１－１－１）

・　国際芸術創造研究科において、「ソウル／東京／台北・アートリサーチ・ワークショップ」として、韓国総合芸術学校、国立台北藝術大学との三大学合同の共同研究会を毎年度開催している。また、2016 年度より全学で「大学の世界展開力強化事業(ASEAN)」の採択を受けて実施している「日 ASEAN 芸術文化交流が導く多角的プロモーション」に参画し、ベトナムのホーチミン市美術大学およびベトナム国家音楽院、ラオスの国立美術学校等との共同プロジェクトを実施している。（中期計画４－１－１－１）

（今後の課題）

・　海外大学との国際共同教育プログラムについての、継続的な実施および教育的効果の検証・改善と、国際共同学位課程(ダブルディグリーまたはジョイントディグリー)への移行に係る検討。（中期計画４－１－１－１）

・　海外大学・機関や国際的な芸術関係団体・組織等との持続的な相互交流関係の構築に向けた検討・取組の推進。（中期計画４－１－１－２）

〔小項目４―１－１の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画４－１－１－１に係る状況≫

中期計画の内容	【26】国際交流協定校等との共同プロジェクトについて、本学のカリキュラムへの反映を拡充し、平成３３年度までに、３０科目以上の国際共同授業を整備するとともに、ジョイントディグリーを含めた国際共同カリキュラム・コースワークを８コース以上整備する等、国際舞台で活躍し、世界の芸術文化を牽引できる人材を育成するための教育プログラムを開発する。（★）（◆）
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－１－１－１）

(A)　2019 年度末時点で、国際共同カリキュラム・コースワークを計 6 コース整備している（ロンドン芸術大学、パリ国立高等美術学校、シカゴ美術館附属美術大学、韓国芸術総合学校、中国伝媒大学、南カリフォルニア大学）。また、機能強化の一環および、スーパーグローバル大学創成支援事業や大学の世界展開力強化事業等の活用等により、海外大学との国際共同プロジェクトの拡充を進めており、海外大学との共同授業および共同成果発表や、海外一線級アーティストの誘致を全学的に推進した。**（別添資料 27-56）**

(B)　美術学部・研究科においては、2016 年度、修士課程にグローバルアートプラクティス専攻を新たに設置し、カリキュラムの一環として毎年度、パリ国立高等美術学校およびロンドン芸術大学との国際共同授業「グローバルアート国際共同カリキュラム」を実施しており、さらに、全専攻から横断的に履修者を募り、シカゴ美術館付属美術大学との国際共同プログラムを毎年度実施している。

また、2015 年度～2019 年度の５年間、「Global Arts Crossing ～中東地域との戦略的芸術文化外交～」として「大学の世界展開力強化事業（中東）」の採択を受け、トルコのミマール・シナン美術大学およびアナドール大学、イスラエルのベツァルエル美術アカデミーとの国際共同プロジェクトを実施した。
（別添資料 27-57a～c）

加えて、オーストリアのウィーン応用美術大学、デンマークのデザインスクール・コリング、オスロ国立芸術アカデミー、イギリスの AA スクール、ドイツのミュンスター美術アカデミー等との国際共同授業を実施している。

(C)　音楽学部・研究科においては、パリ国立高等音楽院やベルリン・フィルハーモニー管弦楽団等、海外大学・機関等から毎年度 50～70 名の一線級アーティストを短～長期間において招聘し、学生への実技レッスンをはじめ、学生・教員等との合同演奏会や特別講義を実施する等、世界トップアーティスト育成プログラムを展開した。2018 年度には、本学と英国王立音楽院の学生による合同オーケストラ交流演奏会を英国と日本において開催した（英国において英国王立音楽院及びオックスフォードの２公演、日本において郡山市及び本学の２公演の合計４公演）。また同年、本学においてシベリウス音楽院との交流演奏会、延世大学校との交流演奏会を開催した。**（別添資料 27-58）**

(D)　映像研究科においては、2016 年度に「日中韓学生アニメーション共同制作 co-work」として「大学の世界展開力強化事業（キャンパスアジア）」の採択を受け、2020 年度までの 5 年間の取組として、2010 年より継続している本学と韓

国芸術総合学校および中国伝媒大学とのアニメーション共同制作を発展させ、国際共同制作を基盤とした共同カリキュラムを構築・実施している。**(別添資料 27-59a～d)**

また、2018 年度に「日米ゲームクリエイション共同プログラム-メディア革新時代の新しいアーティスト育成-」として「大学の世界展開力強化事業(アメリカ)」の採択を受け、アメリカの南カリフォルニア大学(USC)と連携し、ゲーム教育に係る国際共同プログラムを充実している。

加えて、フランス国立映画学校(FEMIS)と、映画分野の共同ワークショップを毎年度実施している。

(E)　国際芸術創造研究科においては、ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジと芸術国際交流協定の締結に向けた協議を進めており、近年の具体的な交流として、二つのオリンピック都市をテーマしたワークショップの開催、ゴールドスミス・カレッジで開催されたシンポジウム「ロンドン・リオ・東京オリンピック」への本学教員・学生の参加、公開シンポジウム「ポストメディア時代の芸術文化と理論」の開催等が挙げられる。

また、「ソウル／東京／台北・アートリサーチ・ワークショップ」として、韓国総合芸術学校、国立台北藝術大学との三大学合同の共同研究会を毎年度開催しており、加えて、コペンハーゲン大学との共同研究プロジェクト「コラボレーション・コミュニティ・コンテンポラリーアート（CCCA）ワークショップ」を実施している。**(別添資料 27-60)**

その他、2016 年度より全学で「大学の世界展開力強化事業(ASEAN)」の採択を受けて実施している「日 ASEAN 芸術文化交流が導く多角的プロモーション」に参画し、ベトナムのホーチミン市美術大学およびベトナム国家音楽院、ラオスの国立美術学校等との共同プロジェクトを実施している。**(別添資料 27-61)**

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－１－１－１）

上記の通り、戦略性が高く意欲的な目標・計画に係る取組として、世界トップクラスの芸術系大学等との連携・ネットワーク基盤を強化するとともに、国際交流協定校等との共同プロジェクトを全学的に展開し、国際共同授業および国際共同カリキュラム・コースワークの整備を進めたことにより、国際舞台で活躍し、世界の芸術文化を牽引できる人材を継続的に育成・輩出するための人材育成プログラムの構築に繋がった。第３期中期目標期間中に３０科目以上の国際共同授業および８コース以上の国際共同カリキュラム・コースワークを整備するという目標に向けて、各年度の計画を順調に達成している。

また、これらの取組により、世界水準の教育プログラムの構築に向けた改革が推進し、世界トップアーティストの戦略的育成に係る機能が大きく強化され、個性の伸長に繋がった。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画４－１－１－１）

(A)～(E)　海外大学との国際共同授業科目やプロジェクトについて、国際共同カリキュラムやコースワーク等への発展的な展開を検討する。また、各プログラム等の継続的な実施と教育的効果の検証・改善および、国際共同学位課程(ダブルディグリーまたはジョイントディグリー)への移行に係る検討を進める。

≪中期計画４－１－１－２に係る状況≫

中期計画の内容	【27】海外の芸術系大学等との国際交流協定について、交流活動の内容や有効性をはじめとする連携の質を精査しつつ、平成３３年度までに、協定締結数を８０大学規模に拡充するとともに、大学以外における海外の芸術団体・楽団・ギャラリー等の連携機関数を１１０機関規模に拡充する。（★）（◆）
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－１－１－２）

(A)　2016 年度以降に新たに 18 大学・機関との協定を締結し、本学の国際交流協定校の数は、2019 年度末時点で計 28 カ国・地域 78 大学・機関に達している。また、包括的な協定は結んでいないものの多様な形で連携関係にある海外の高等教育機関・芸術団体等は 105 機関となっている。

(B)　2018 年 1 月に、世界規模での教育研究ネットワークを構築し、歴史も文化も異なる様々な地域の芸術大学の現状を知り、芸術分野と他分野の融合を進め、未来の教育研究について議論し、21　世紀の芸術のビジョンを共有することを目的として「五大陸アーツサミット 2018」（協力：全国芸術系大学コンソーシアム、後援：外務省、日本経済新聞社）を開催した。北アメリカ大陸から南カリフォルニア大学、コロンビア大学、南アメリカ大陸からチリ大学、ユーラシア大陸からベルリン芸術大学、モスクワ大学、オセアニア大陸からメルボルン大学、アフリカ大陸からヘルワン大学（エジプト）の学長・学部長が参加し、「大学紹介セッション」と「シンポジウム」の一般参加者は、高校生、大学生、教職員、自治体、企業、市民ら総勢 400 人を超えた。**（別添資料 27-62）**

(C)　中国・敦煌研究院と、デジタル技術とアナログ技術を融合するための共同研究を推進し、各種文化財の保存と伝承を目指すことを目的とする「文化財共同研究に関する覚書」および、双方の学術文化交流の促進及び芸術文化の振興に資することを目的とする「学術交流協定」を締結した。これらの協定に基づき、同研究院と研究者の相互派遣を定期的に実施し、敦煌莫高窟に代表されるシルクロード芸術における文化財保護に関する学術シンポジウム及び展覧会の開催、共同研究及び学術文化交流を促進するためのシルクロード芸術の再現、芸術を通じた文化外交や観光業界への貢献を推進している。**（【再掲】別添資料 27-37）**

(D)　美術学部・研究科においては、2016 年度以降、新たに、チューリッヒ芸術大学、メルボルン大学ビクトリア・カレッジ・オブ・アート、淑明女子大学校、ミュンスター美術アカデミー、アテネ国立芸術大学、ヴァイマル古典財団、ヴュルツブルク・シュヴァインフルト応用科学大学、オスロ国立芸術アカデミー、上海大学上海美術学院、浙江師範大学美術学院、コリングデザイン大学、ミュンヘン美術アカデミー、湖北美術学院と国際交流協定を締結し、共同授業や交換留学等の取組を進めている。

(E)　音楽学部・研究科においては、2016 年度以降、新たに、リューベック音楽大学、トリニティ・ラバン音楽院と国際交流協定を締結し、共同授業や共同演奏会等の取組を進めている。

(F)　映像研究科においては、2016 年度以降、新たに、フランス国立映画学校（フェミス)、テヘラン芸術大学映画演劇学部、マルチメディア大学(マレーシア)と国際交流協定を締結し、共同授業や交換留学等の取組を進めている。
　また、2017 年度、中国伝媒大学及び韓国芸術綜合学校と「国際アニメーションコース創設に向けた日中韓 Co-work カリキュラム」の実施に関する覚書を締結し、加えて、2018 年度には、新たに「中国伝媒大学研究生院と東京藝術大学大学院映像研究科との学生交流実施計画書」および「韓国芸術綜合学校映像院と東京藝術大学大学院映像研究科との学生交流実施計画書」を締結した。

(G)　ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジと芸術国際交流協定の締結に向けた協議を進めており、近年の具体的な交流として、二つのオリンピック都市をテーマしたワークショップの開催、ゴールドスミス・カレッジで開催されたシンポジウム「ロンドン・リオ・東京オリンピック」への本学教員・学生の参加、公開シンポジウム「ポストメディア時代の芸術文化と理論」の開催等が挙げられる。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－１－１－２）
　上記の通り、戦略性が高く意欲的な目標・計画に係る取組として、海外大学・機関と教育研究の充実等に係るネットワークの構築を推進したことにより、国際舞台で活躍し、世界の芸術文化を牽引できる人材を継続的に育成・輩出するための人材育成プログラムの整備に繋がった。第３期中期目標期間中に協定締結数を８０大学規模に拡充するとともに、大学以外における海外の芸術団体・楽団・ギャラリー等の連携機関数を１１０機関規模に拡充するという目標に向けて、各年度の計画を順調に達成している。
　また、これらの取組により、世界最高峰の芸術系大学等との連携・ネットワーク基盤が強化され、世界水準の教育プログラムの構築に向けた改革が推進し、世界トップアーティストの戦略的育成に係る機能が大きく強化され、個性の伸長に繋がった。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画４－１－１－２）
(A)～(G)　海外大学・機関や国際的な芸術関係団体・組織等との持続的な相互交流関係の構築に向けた検討・取組の推進。

〔小項目４―１－２の分析〕

小項目の内容	**【Ⅰ－４－（１）－２】** 学生の国際流動性を高めるため、学生の海外留学・海外派遣および留学生の受入プログラム等を充実し、支援体制を強化する。

○小項目４－１－２の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	1	1
中期計画を実施している。	1	1
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	2	2

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」

本小項目については、関係する全ての中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および各中期計画の達成状況に記載の通り、顕著な実績を挙げている。

中期計画４－１－２－１に記載の通り、国際事業を積極的に展開するとともに、海外留学等を目的とした奨学金制度等を拡充し、語学学習に係るプログラムや支援制度の充実等も併せ、学生の海外留学・海外派遣を促進したことにより、学生の国際流動性の向上および派遣プログラムの充実や支援体制の強化に繋がった。
また、中期計画４－１－２－２に記載の通り、国際交流協定校との交換留学制度等の留学生受入プログラムの拡大や、修学や生活支援を担うチューター機能強化や日本語教育の充実等を促進したことにより、学生の国際流動性の向上および受入プログラムの充実や支援体制の強化に繋がった。
これらの取組は、中期計画４－１－１－１および４－１－１－２に係る海外大学・機関や国際的な芸術団体等との教育研究の充実等に係るネットワークの構築および国際共同プロジェクトや国際共同授業、国際共同カリキュラム・コースワークの整備と一体的に推進しており、世界水準の教育プログラムの構築に向けた総合的な改革により、国際舞台で活躍し、世界の芸術文化を牽引できる人材を継続的に育成・輩出するための人材育成プログラムを整備している。

○特記事項（小項目４－１－２）
(優れた点)

・　海外留学・海外派遣学生数について、2016 年度～2019 年度にかけて、225 名、258 名、316 名、317 名と推移している。（中期計画４－１－２－１）

・　全学として、海外実践研修型授業への学内助成事業「アーツ・スタディ・アブロード・プログラム(ASAP)」を毎年度実施し、参加学生を「海外派遣奨学金」により支援することで、海外における学生の活動を促進している。2016～19 年度の 4 年間で、同事業・奨学金により延べ 462 名の学生が海外研修に参加した。（中期計画４－１－２－１）

・　「大学の世界展開力強化事業」として採択を受けた 4 件の取組を推進し、トルコ・イスラエル、中国・韓国、ASEAN 諸国、アメリカの芸術系大学・機関への学生の留学・派遣について、支援を伴う形で実施している。2016～19 年度の 4 年間で、

延べ 245 名の学生が、同事業の活用による渡航費や宿泊費の支援を受けて海外における実践的な活動に参加した。（中期計画４－１－２－１）

・　2018 年度より、外部団体等の奨学金制度に係る申請支援として「面接審査相談会」を開催するなど、学生の海外留学や海外活動に係る総合的な支援を拡充した。その成果として、2019 年 2 月に文部科学省より発表された『官民協働海外留学支援制度「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム（大学生等コース）」』の第 10 期派遣留学生の選考結果において、本学は 16 人の合格者を輩出した。これは、すべての国公私立大学中 4 位の実績であり、学生収容定員あたりの合格者数で見れば、本学が群を抜いて 1 位である。（中期計画４－１－２－１）

・　年間単位での外国人留学生の受入数について、2016 年度～2019 年度にかけて、283 名、341 名、383 名、408 名と推移している。また、外国人留学生志願者数について、2015 年度入試に対して 2019 年度入試の実績値は、学士課程では 23 名から 41 名と約２倍に増加、修士課程では 106 名から 417 名と約４倍に増加、博士後期課程では 31 名から 54 名に増加している。（中期計画４－１－２－２）

（特色ある点）

・　特別集中講義「Introduce Yourself as an Artist～自分と作品を世界に語ろう～」の開講、e-learning システム（英語自習システム）の無償提供、ゲーテ・ドイツ語検定試験の団体受験学内申込制度の導入、グローバルサポートセンターにおける英文ライティングサポート等、学生の海外留学・派遣に係る支援の一環として、実践的な語学力の向上に係る取組を毎年度実施している。また、英、仏、独、伊、西、葡、露、中、韓の各国語の外部語学試験を受験した者や日本語能力試験を受験した外国人留学生で一定の成績を得た者に奨学金を給付する「語学学習奨励奨学金」を実施している。（中期計画４－１－２－１）

・　外国人留学生等に係る支援業務を一括して行う「グローバルサポートセンター」および「国際企画課」によるサポート体制のほか、留学生の学習及び生活上の相談等に日常的・組織的に対応するため、入学からの経過期間が１年未満の外国人留学生すべてに対してチューター制度を適用しており、修学・生活支援を実施した。2019 年度は延べ 68 名の大学院生をチューターとして採用し、外国人留学生 180 名の修学・生活支援を行った。（中期計画４－１－２－２）

（今後の課題）

・　学生の海外留学・海外活動に係る経済的支援制度や海外派遣プログラム等の機会を充実する為の、寄附金等の募集強化や、海外大学・機関等との持続的なネットワークの構築。（中期計画４－１－２－１）

・　外国人留学生の受け入れに係る支援体制の強化や、日本人学生と外国人留学生との交流機会の拡充。（中期計画４－１－２－２）

〔小項目４―１－２の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画４－１－２－１に係る状況≫

中期計画の内容	【28】国際交流協定校との単位互換・認定制度の拡大をはじめ、海外留学等を目的とした奨学金制度の拡充や、学生の海外留学・海外派遣を総合的に支援する組織・体制を充実させることにより、平成３３年度までに、年間単位での海外留学・海外派遣学生数を４００人規模に拡充する。（★）（◆）
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－１－２－１）

(A)　海外留学･海外派遣学生数について､2016 年度～2019 年度にかけて､223 名、258 名、303 名、317 名と推移している。

(B)　全学として、海外実践研修型授業への学内助成事業「アーツ・スタディ・アブロード・プログラム(ASAP)」を毎年度実施し、参加学生を「海外派遣奨学金」により支援することで、海外における学生の活動を促進している。2016～19 年度の 4 年間で､同事業・奨学金により延べ 462 名の学生が海外研修に参加した。**（【再掲】別添資料 27-19）**

(C)　「大学の世界展開力強化事業」として採択を受けた 4 件の取組を推進し、トルコ・イスラエル、中国・韓国、ASEAN 諸国、アメリカの芸術系大学・機関への学生の留学・派遣について、支援を伴う形で実施している。2016～19 年度の 4 年間で、延べ 245 名の学生が、同事業の活用による渡航費や宿泊費の支援を受けて海外における実践的な活動に参加した。**（【再掲】別添資料 27-02,27-03,27-08,27-09）**

(D)　海外留学を希望する学生に対し 40 万円を一括給付する「東京藝術大学海外留学支援奨学金」制度を毎年度実施し、平均 4～5 名の学生を採択している。また、交換留学や短期の学生派遣プログラムにおいて、日本学生支援機構(JASSO)の奨学金制度に計画を申請し、継続的に採択を受けており、学生の海外派遣に係る支援を充実している。**（【再掲】別添資料 27-20）**

(E)　2018 年度より、外部団体等の奨学金制度に係る申請支援として「面接審査相談会」を開催するなど、学生の海外留学や海外活動に係る総合的な支援を拡充した。その成果として、2019 年 2 月に文部科学省より発表された『官民協働海外留学支援制度「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム（大学生等コース)」』の第 10 期派遣留学生の選考結果において、本学は 16 人の合格者を輩出した。これは、すべての国公私立大学中 4 位の実績であり、学生収容定員あたりの合格者数で見れば、本学が群を抜いて 1 位である。

(F)　美術学部・研究科においては、ロンドン芸術大学等との「グローバルアート国際共同カリキュラム」の一環として、イギリス、フランス、アメリカに学生を派遣し、現地の学生と共同授業・成果発表を実施した。また、大学の世界展開力強化事業として、トルコ・イスラエルの大学に学生を派遣した。
　また、アナドール大学、カタルーニャ工科大学、ブロツワフ美術大学、リヒテンシュタイン国立大学、ブラティスラバ芸術大学等とエラスムス＋プログラムを締結し、渡航費等の助成金を活用して学生を派遣している。

加えて、油画専攻独自のプログラムとして、公益財団法人石橋財団の助成による石橋財団国際交流油画奨学生を実施している。海外留学や海外での創作研究活動・リサーチ等を希望する学生に対し、渡航費と現地での活動資金を支援しており、毎年 10 名ほどの学生が本奨学プログラムを活用して海外渡航・海外留学に臨んでいる。**(【再掲】別添資料 27-21)**

(G)　音楽学部・研究科においては、2018 年度に、本学と英国王立音楽院の学生による合同オーケストラ交流演奏会を英国と日本において開催した（英国において英国王立音楽院及びオックスフォードの２公演、日本において郡山市及び本学の２公演の合計４公演)。2019 年度には学生オーケストラが、南仏ラ・クロワ・ヴァルメールでの吹奏楽フェスティヴァルとパリ日本文化会館での演奏を実施した。**(【再掲】別添資料 27-58)**

(H)　映像研究科においては、韓国芸術総合学校および中国伝媒大学とのアニメーションの国際共同制作を基盤とした共同カリキュラムや、アメリカの南カリフォルニア大学(USC)との連携によるゲーム教育に係る国際共同プログラムについて、経済的支援が伴う形での学生派遣プログラムとして実施している。2018 年度には、ジャパン・ハウス ロサンゼルスにて、南カリフォルニア大学(USC)およびカリフォルニア芸術大学(CalArts)との共同プロジェクトとして、「アニメーションの夕べ～日米アニメーション上映会～」を開催した。

(I)　国際芸術創造研究科においては、毎年度、韓国総合芸術学校、国立台北芸術大学との三大学合同の共同研究会を実施しており、また、ベトナムのホーチミン市美術大学およびベトナム国家音楽院、ラオスの国立美術学校等に学生を派遣し、国際共同プロジェクトとして展覧会や演奏会等を開催した。

(J)　特別集中講義「Introduce Yourself as an Artist～自分と作品を世界に語ろう～」の開講、e-learning システム（英語自習システム）の無償提供、ゲーテ・ドイツ語検定試験の団体受験学内申込制度の導入、グローバルサポートセンターにおける英文ライティングサポート等、学生の海外留学・派遣に係る支援の一環として、実践的な語学力の向上に係る取組を毎年度実施している。また、英、仏、独、伊、西、葡、露、中、韓の各国語の外部語学試験を受験した者や日本語能力試験を受験した外国人留学生で一定の成績を得た者に奨学金を給付する「語学学習奨励奨学金」を実施している。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－１－２－１）
以上の通り、戦略性が高く意欲的な目標・計画に係る取組として、国際事業を積極的に展開するとともに、海外留学等を目的とした奨学金制度等を拡充し、語学学修に係るプログラムや支援制度の充実も併せて実施し、学生の海外留学・海外派遣を促進したことにより、学生の国際流動性の向上および派遣プログラムの充実や支援体制の強化に繋がった。第３期中期目標期間中に年間単位での海外留学・海外派遣学生数を４００人規模に拡充するという目標に向けて、各年度の計画を順調に達成している。また、これらの取組により、グローバル人材を育成するための世界水準の教育プログラムの構築に向けた改革が推進し、世界トップアーティストの戦略的育成に係る機能が大きく強化され、個性の伸長に繋がった。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画４－１－２－１）
(A)～(J)　引き続き、学生の海外留学・海外活動に係る経済的支援制度や海外派遣プログラム等の機会を充実する為、寄附金等の募集強化や、海外大学・機関等との持続的なネットワークの構築を進めていく。

≪中期計画４－１－２－２に係る状況≫

中期計画の内容	【29】国際交流協定校との交換留学制度等の留学生受入プログラムの拡大をはじめ、修学や生活支援を担うチューター機能強化や日本語教育の充実、レジデンス機能強化、留学生を支援する組織・体制等を充実させることにより、平成３３年度までに、年間単位での受入留学生数を５００名規模に拡充する。（◆）
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－１－２－２）

(A)　年間単位での外国人留学生の受入数について、2016 年度～2019 年度にかけて、283 名、341 名、383 名、408 名と推移している。また、外国人留学生志願者数について、2015 年度入試に対して 2019 年度入試の実績値は、学士課程では 23 名から 41 名と約２倍に増加、修士課程では 106 名から 417 名と約４倍に増加、博士後期課程では 31 名から 54 名に増加している。

(B)　外国人留学生等に係る支援業務を一括して行う「グローバルサポートセンター」および「国際企画課」によるサポート体制のほか、留学生の学習及び生活上の相談等に日常的・組織的に対応するため、入学からの経過期間が１年未満の外国人留学生すべてに対してチューター制度を適用しており、修学・生活支援を実施した。2019 年度は延べ 68 名の大学院生をチューターとして採用し、外国人留学生 180 名の修学・生活支援を行った。

(C)　大学全体として、機能強化の一環およびスーパーグローバル大学創成支援事業や大学の世界展開力強化事業等の活用により、海外大学との国際共同プロジェクトや国際共同授業の拡充を進めており、本学に在籍する留学生以外にも、海外大学の学生を多数受け入れ、グローバルな教育研究環境を構築している。
（【再掲】別添資料 27-56）

(D)　美術学部・研究科においては、2016 年度に修士課程にグローバルアートプラクティス専攻を新たに設置し、１学年 18 名のうち 6 名を外国人留学生入試により募集している。
　また、2015 年度～2019 年度の５年間、「Global Arts Crossing ～中東地域との戦略的芸術文化外交～」として「大学の世界展開力強化事業(中東)」の採択を受け、トルコのミマール・シナン美術大学およびアナドール大学、イスラエルのベツァルエル美術アカデミーとの国際共同プロジェクトを実施し、先方の学生を積極的に受け入れた。**（【再掲】別添資料 27-08,27-57a～c）**
　毎年度、国際交流協定校より約 40 名の交換留学生を受け入れており、共通工房等において、多国籍な学生に対しての安全管理・指導のため、機械のマニュアルの英文化や、使用手引きの修正等を継続的に実施している。

(E)　音楽学部・研究科においては、交換留学生等の受入のほか、海外大学との国際共同演奏会等を積極的に開催しており、本学に在籍する留学生以外にも海外大学・機関の学生を多数受け入れ、グローバルな教育研究環境を構築している。

(F)　映像研究科においては、大学の世界展開力強化事業等の推進により、中国・韓国・アメリカの連携大学との国際共同プロジェクトや国際共同授業を展開

し、その一環として、本学に在籍する留学生以外でも、多数の外国人留学生を受け入れ、グローバルな教育研究環境を構築している。また、2018 年度、中国伝媒大学および韓国芸術綜合学校と、「学生交流実施計画書」を締結した。

(G)　国際芸術創造研究科においては、１学年の定員 10 名のうち 4 名を外国人留学生入試により募集している。また、国際共同研究会等の実施により、海外大学の学生を多数受け入れている。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－１－２－２）
　以上の通り、戦略性が高く意欲的な目標・計画に係る取組として、国際事業を積極的に展開するとともに、国際交流協定校との交換留学制度等の留学生受入プログラムの拡大や、修学や生活支援を担うチューター機能強化や日本語教育の充実等を促進したことにより、学生の国際流動性の向上および受入プログラムの充実や支援体制の強化に繋がった。第３期中期目標期間中に年間単位での外国人留学生の受入数を５００名規模に拡充するという目標に向けて、各年度の計画を順調に達成している。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画４－１－２－２）
(A)～(G)　外国人留学生の受け入れに係る支援体制の強化や、日本人学生と外国人留学生との交流機会の拡充。

〔小項目４―１－３の分析〕

小項目の内容	**【Ⅰ－４－（１）－３】** 世界最高水準の教育研究体制・大学運営体制を構築するため、国際通用性を見据えた採用・研修・人事評価制度を段階的に整備する。

○小項目４－１－３の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	0	0
中期計画を実施している。	2	2
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	2	2

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」

本小項目については、関係する全ての中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および各中期計画の達成状況に記載の通り、特色のある取組を実施している。

中期計画４－１－３－１に記載の通り、卓越教員等の世界一線級アーティストを含む外国人教員をはじめ、海外大学での教育研究活動歴を有する教員や海外での学位取得教員等について拡充を進めており、併せて、中期計画４－１－３－２に記載の通り、海外大学での学位取得者の事務職員としての雇用や、語学研修の充実等により、国際的な教育研究体制を支援する事務組織のグローバル化を促進している。これらの取組により、世界最高水準の教育研究体制・大学運営体制を構築するための体制が整備された。

○特記事項（小項目４－１－３）
(優れた点)
・　2019 年度に、外国籍教員、海外大学での教育研究活動歴を有する教員、海外での学位取得教員等について、5 月 1 日時点で 124 名とするとともに、短期及び中長期間において、ロンドン芸術大学やベルリン・フィルハーモニー管弦楽団等から世界一線級アーティスト等を、卓越教員としての雇用計 21 名（内クロスアポイントメント協定に基づく雇用 5 名）および特別招聘教授 29 名を含め 104 名招聘し、国際連携授業やワークショップ、特別講義等の教育プログラムを実施した。（中期計画４－１－３－１）

(特色ある点)
・　事務職員に対する語学研修の一環として外国人留学生との交流授業を行い、本学に在籍する外国人留学生をチューターとして、週 1 回・45 分(年間で計 20 回程度)、研修受講者と留学生で少人数のグループを組み、様々なトピックに沿って英語でディスカッションを行う演習を実施した。（中期計画４－１－３－２）

(今後の課題)
・　若手教員等の海外大学との相互交流の促進。（中期計画４－１－３－１）

・　国際通用性の高い職員の雇用促進および、語学研修の継続的な実施と実務での活用。（中期計画４－１－３－２）

〔小項目４―１－３の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画４－１－３－１に係る状況≫

中期計画の内容	【30】世界一線級アーティストを含む外国人教員をはじめ、海外大学での教育研究活動歴を有する教員や海外での学位取得教員等について、平成３３年度までに２００人規模に拡充するとともに、教育研究に係る大学の意思決定に係る外国人教員の参画についての制度設計・運用体制整備を進める。（★）（◆）
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－１－３－１）

(A)　2019 年度に、外国籍教員、海外大学での教育研究活動歴を有する教員、海外での学位取得教員等について、5 月 1 日時点で 124 名とするとともに、短期及び中長期間において、ロンドン芸術大学やベルリン・フィルハーモニー管弦楽団等から世界一線級アーティスト等を、卓越教員としての雇用計 21 名（内クロスアポイントメント協定に基づく雇用 5 名）および特別招聘教授 29 名を含め 104 名招聘し、国際連携授業やワークショップ、特別講義等の教育プログラムを実施した。**（【再掲】別添資料 27-13, 27-14a～d）**

(B)　2018 年 3 月に外国人招聘教員用宿舎を本学上野キャンパス内に竣工し、海外一線級芸術家等の招聘による教育研究を円滑に行う体制を整備した。

(C)　2016 年度および 2017 年度に、海外から教員・アーティスト等の多様な専門家を招聘する事業「インターナショナルスペシャリスト・インビテーションプログラム」（ISIP）を学内公募により全学的に実施した。

(D)　2016 年度より、頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム（2018 年度からは国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業）として「マルティメディア・コンテンツに関する領域融合・実践型国際研究ネットワーク形成」を実施し、ハーバード大学、スタンフォード大学、ニューヨーク大学、ソルボンヌ大学に音楽分野および映像分野の若手研究者を派遣し、相手先大学から世界的な研究者を招聘した。**（【再掲】別添資料 27-36a, b）**

(E)　「大学の世界展開力強化事業」として採択を受けた 4 件の取組を推進し、トルコ・イスラエル、中国・韓国、ASEAN 諸国（特に CLMV+タイ）、アメリカの芸術系大学・機関とのネットワークを強化し、教員の相互交流を推進した。**（【再掲】別添資料 27-02, 27-03, 27-08, 27-09）**

(F)　美術学部・研究科においては、毎年度、中国の広州美術学院、イギリスの AA スクールおよびロンドン芸術大学、ドイツのブレーメン芸術大学、ポーランドのブロツワフ芸術大学、フランスのパリ国立高等美術学校等から卓越した芸術家・指導者・研究者を 30 名規模で招聘し、少人数教育・個人指導および幅広い芸術表現の学習を可能にしている。

(G)　音楽学部・研究科においては、毎年度、パリ国立高等音楽院、英国王立音楽院、リスト音楽院、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団など世界的な音楽大学及びオーケストラから一流の教授、演奏家を招聘し、個人指導、グループレッ

スン、特別講座、演奏会による協演等を実施して指導体制の強化・充実に努めている。

(H)　映像研究科においては、フランス国立映画学校(FEMIS)、アメリカの南カリフォルニア大学(USC)の教員を卓越教授として雇用し、「映画学」「国際映像メディア論」「国際映画芸術表現研究」等を開講するとともに、壇国大学（韓国)、テヘラン芸術大学（イラン)、ラサール芸術大学（シンガポール）から招聘した教員による「撮影」「録音」「編集」領域の講義を実施している。**(【再掲】別添資料 27-04)**

(I)　国際芸術創造研究科においては、パリ政治学院副学長のブルーノ・ラトゥール、ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ教授のマシュー・フラーおよびマイク・フェザーストーン、元パリ国立高等学校学長でキュレーターのニコラ・ブリオー、台北藝術大学・学長の陳愷璜、ハーバード大学の依田富子教授およびアレクサンダー・ザルテン准教授等、卓越した業績を有する教員・実務家等を毎年度多数招聘し、特別講義や研究会を開催している。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－１－３－１）
　以上の通り、戦略性が高く意欲的な目標・計画に係る取組として、卓越教員等の世界一線級アーティストを含む外国人教員をはじめ、海外大学での教育研究活動歴を有する教員や海外での学位取得教員等について拡充を行い、世界最高水準の教育研究体制の構築に繋がっている。第３期中期目標期間中に外国人教員や海外大学での教育研究活動歴を有する教員等を２００人規模に拡充するという目標に向けて、各年度の計画を順調に達成している。
　また、これらの取組により、グローバル人材の育成に係る多様なプログラムが構築され、芸術分野において先導的役割を担う卓越した芸術家・研究者およびアートプロデュース人材の戦略的な育成に係る機能が大きく強化され、個性の伸長に繋がった。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画４－１－３－１）
(A)～(I)　引き続き、多様な芸術家・指導者および実務家等の継続的な招聘・配置を進めつつ、若手教員等の海外大学との相互交流を促進する。

≪中期計画４－１－３－２に係る状況≫

中期計画の内容	【31】教育研究体制を支援する事務組織のグローバル化を推進するため、外国人職員をはじめ、海外での職歴を有する職員や海外大学での学位取得職員等数について、平成３３年度までに２０名規模に拡充するとともに、ＴＯＥＩＣスコア７００相当以上の外国語運用能力を有する職員数を８０％規模まで拡充する。(◆)
実施状況(実施予定を含む)の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－１－３－２）

(A)　外国人職員や海外大学での学位取得職員等については、2015 年度時点で 5 名だったのに対し、2019 年度は 11 名に増加している。また、ＴＯＥＩＣスコア７００相当以上の外国語運用能力を有する職員数は、2019 年度末時点で、60%に達している。また、既に基準を満たしている職員も対象に含めて語学研修プログラムを実施し、更に高度な運用能力・実務能力の修得に繋げており、組織全体としての国際対応能力の向上を図っている。

(B)　毎年度継続的に様々な語学研修プログラムを事務職員に提供し、具体的には、e ラーニングシステムによる英語学習、外国人留学生と職員の交流授業、2 週間～１カ月間の英国等における海外語学研修、ビジネス英文書研修等を実施している。外国人留学生と職員との交流授業は、特徴的な取組であり、2017 年度から継続している。本学に在籍する外国人留学生をチューターとして、週 1 回・45 分(年間で計 20　回程度)、研修受講者と留学生で少人数のグループを組み、様々なトピックに沿って英語でディスカッションを行う演習である。意見を出し合い討論することで、スピーキング・リスニング・ボキャブラリーの各能力を総合的に向上させると同時に、留学生との交流を通して異文化への理解を深めることに繋がっている。

(C)　2017 年度に本学、東京大学、東京工業大学、お茶の水女子大学及び一橋大学との間で締結した「職員の人材流動及び人材育成のアライアンスに関する協定書」に基づいて行われたビジネス英文書研修に、本学職員が参加した。

(D)　文部科学省の国際教育交流担当職員長期研修プログラム（LEAP）を活用し、2017 年５月末から 2018 年３月末まで、職員１名をアメリカ・ニューヨークの School of Visual Arts (SVA)へ派遣した。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－１－３－２）
　以上の通り、戦略性が高く意欲的な目標・計画に係る取組として、海外大学での学位取得者の事務職員としての雇用や、語学研修の充実等により、国際的な教育研究体制を支援する事務組織のグローバル化に繋がっている。第３期中期目標期間中に海外での職歴を有する職員や海外大学での学位取得職員等数について２０名規模に拡充し、ＴＯＥＩＣスコア７００相当以上の外国語運用能力を有する職員数を８０％規模まで拡充するという目標に向けて、各年度の計画を順調に達成している。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画４－１－３－２）

(A)～(D)　国際通用性の高い職員の雇用促進と、語学研修の継続的な実施。

〔小項目４―１－４の分析〕

小項目の内容	**【Ⅰ－４－（１）－４】** 国内はもとより、海外に向けての教育研究成果の発信を推進し、国際的な芸術文化の発展・振興に寄与するとともに、芸術文化外交戦略をもって我が国の国際プレゼンスを向上させる。

○小項目４－１－４の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	1	0
中期計画を実施している。	1	0
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	2	0

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」

本小項目については、関係する全ての中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および各中期計画の達成状況に記載の通り、顕著な実績を挙げている。

中期計画４－１－４－１に記載の通り、国際共同カリキュラムの実施レポート、シラバス等の教育情報、世界的に評価の高い文化財保存・修復等の研究成果に関する情報、さらには教員や学生をはじめ、卒業生も含めた本学関係者の国際的な活動状況や受賞・入賞実績等の成果を積極的に公開することにより、国内はもとより、海外に向けての教育研究成果の発信を充実している。
また、中期計画４－１－４－２に記載の通り、海外大学・機関等との連携等により、海外の芸術文化資源を活かした共同プロジェクトや、新興国等に対する芸術教育研究に係る総合的な支援等の国際的な芸術文化外交に資する取組も含め、海外における教員・学生の制作・展示・公演等の活動を積極的に実施し、国際舞台における教育研究成果の公開を推進している。
これらの取組により、国内はもとより、海外に向けての教育研究成果の発信が促進され、国際的な芸術文化の発展・振興に寄与するとともに、我が国の国際プレゼンスの向上に繋がった。

○特記事項（小項目４－１－４）
(優れた点)
・　国際共同カリキュラムや海外派遣プログラムの一環として、海外において多数の展覧会・演奏会・上映会等を開催し、教育研究活動の成果を積極的に発信しており、2019 年度は 70 件以上の実施を記録した。（中期計画４－１－４－２）

・　2019 年 5 月に、ASEAN 諸国の芸術系大学との交流事業の一環として、アウンサンスーチー国家最高顧問の指示により日メコン交流年事業としてミャンマー政府が企画したヤンゴンでの展覧会「Beauty of Mekong」に、本学美術学部及び映像研究科が誘致を受け、漆芸作品およびメディアアート作品を展示した。同展覧会のオープニング式典には、ミャンマー政府の宗教・文化大臣を筆頭に、メコン諸国以外からもシンガポール大使が出席するなど各国外交団の姿も多数見られたほか、現地メディアも詰めかけ、広く報道された。（中期計画４－１－４－２）

・　2018 年度、本学と南カリフォルニア大学（USC）およびジャパン・ハウスロサンゼルスの主催により、米国・ロサンゼルスの Aratani Theatre において、「音楽とアニメーションの調べ in LA」を開催した。この取組は、2017 年度にクラウドファンディングによる支援を得て本学がアニメーション化したヴィヴァルディによる名曲「四季」の音楽世界の映像と、本学及び USC 両音楽学部の精鋭学生と本学澤和樹学長による生演奏とを AI（人工知能）技術により同期させて上映・演奏する世界初のライブ・アニメーション・コンサートである。会場の収容人数 880 人に対して 1600　人以上の申し込みがあり、キャンセル待ちが出るほどの盛況となったほか、コンサートの様子は、NHK の全国ニュース及び NHK World で放送され、JR のトレインニュースでも繰り返し放映された。また、2019 年度は、同コンサートをフランスの第 43 回アヌシー国際アニメーション映画祭の特別会場のアヌシー城内で上演した。加えて、エストニアやブルカリアにおいても上演し、ブルガリア国立文化宮殿では、3000 人の観客席を有するホールが創設以来初めて満席になるという快挙となった。（中期計画４－１－４－２）

・　本学 COI 拠点を中心として、NICAS（オランダ芸術科学保存協会）との協定に基づく共同研究、人材交流等を実施し、2018 年 2 月にオランダ・ボイマンス美術館での「BABEL／Old Masters Back From JAPAN」展において「バベルの塔」拡大複製画、３D 解説映像、動く絵画作品の 3 点を出展し、多数の現地メディアから取材を受ける等好評を得た。（中期計画４－１－４－２）

・　2017 年度の「第７回モスクワ・ビエンナーレ 2017」および、2018 年度にロスチャイルド館（パリ）で開催された展覧会「深みへー　日本の美意識を求めて　ー」展において、国際芸術創造研究科の教員がキュレーターを務め、学生１名がキュレートリアル・アシスタントに選出された。（中期計画４－１－４－２）

（特色ある点）

・　イタリアミラノフォーリサローネに、本学のファクトリーラボと株式会社ムラヤマとの共同研究成果として、「体験性」をテーマに教員・学生が制作した作品を出品・展示し、１点の作品が成約した。（中期計画４－１－４－２）

・　2018 年度に、本学の音楽学部・研究科と英国王立音楽院の学生による合同オーケストラの交流演奏会を英国と日本において開催した。加えて 2019 年度には、東京藝大ウィンドオーケストラが南仏ラ・クロワ・ヴァルメールでの吹奏楽フェスティバルおよびパリ日本文化会館での演奏を実施し、技術面・演奏表現面において現地で高い評価を得た。（中期計画４－１－４－２）

・　2018 年度にジャパン・ハウス ロサンゼルスにて、本学の映像研究科と南カリフォルニア大学(USC)映画芸術学部アニメーション＆デジタルアート学科、カリフォルニア芸術大学(CalArts)映像・ビデオ学部実験アニメーション専攻の三機関による「アニメーションの夕べ～日米アニメーション上映会～」と題した学生作品上映会を開催した。（中期計画４－１－４－２）

（今後の課題）

・　国際的な教育研究活動に係るレポートや成果、本学が有する研究シーズ等に係る国内外への情報発信の充実。（中期計画４－１－４－１）

・　国際舞台における芸術活動の促進に係る機会と支援の充実および、海外における展覧会・演奏会等の発信活動に係る拠点形成として、海外大学・機関との持続的なネットワークおよび交流関係の構築。（中期計画４－１－４－２）

〔小項目４―１－４の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画４－１－４－１に係る状況≫

中期計画の内容	【32】国際共同カリキュラムの実施レポート、シラバス等の教育情報、世界的に評価の高い文化財保存・修復等の研究成果に関する情報、さらには教員や学生をはじめ、卒業生も含めた本学関係者の国際的な活動状況や受賞・入賞実績等の成果を積極的に公開するとともに、多言語による情報発信を段階的に進める。
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－１－４－１）

(A)　ロンドン芸術大学やパリ国立高等美術学校とのグローバルアート国際共同カリキュラム、韓国芸術総合学校・中国伝媒大学とのアニメーション国際共同制作、南カリフォルニア大学とのゲーム制作に係る国際共同プログラム等について、実施レポートや関連コンテンツについて、それぞれ Web サイトや成果報告書等により日英両言語で発信している。

(B)　シラバスについては日英で記載しているほか、検索・内容画面について自動翻訳システム(Google Translate)を導入しており、多言語により参照することができる。

(C)　文化財の保存・修復や、本学が有する多様な研究シーズ・研究成果について、研究室の Web サイトおよび、本学の「シーズ集」により発信している。

(D)　教員・学生・卒業生等の活動状況や受賞・入賞実績等について、本学の Web サイトで随時公開している。

(E)　本学の教員・学生・卒業生や大学全体の活動状況については、新聞・Web・テレビ等のメディアからの注目を集め、多数の記事や番組等が報じられており、国内外で社会や文化に大きく影響を与えるとともに、教育成果の社会発信および本学のプレゼンス向上に繋がっている。(別添資料 27-63a～c, 27-64a～c, 27-65a～d, 27-66)

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－１－４－１）
　以上の通り、国際共同カリキュラムの実施レポート、シラバス等の教育情報、世界的に評価の高い文化財保存・修復等の研究成果に関する情報、さらには教員や学生をはじめ、卒業生も含めた本学関係者の国際的な活動状況や受賞・入賞実績等の成果を積極的に公開することにより、国内はもとより、海外に向けての教育研究成果の発信が充実され、国際的な芸術文化の発展・振興に寄与するとともに、我が国の国際プレゼンスの向上に繋がっている。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画４－１－４－１）

(A)～(E)　国際的な教育研究活動に係るレポートや成果、本学が有する研究シーズ等に係る国内外への情報発信を充実する。

≪中期計画４－１－４－２に係る状況≫

中期計画の内容	【33】海外における教員・学生の制作・展示・公演等の活動について、平成３３年度までに、年間単位での実施数を７０件程度とすることを目標とし、国際舞台における教育研究成果の公開を推進する。また、海外連携大学・機関等との連携による、海外の芸術文化資源を活かした共同プロジェクトや新興国等に対する芸術教育研究に係る総合的な支援等、国際的な芸術文化外交に資する取組を推進する。（★）
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－１－４－２）

(A)　国際共同カリキュラムや海外派遣プログラムの一環として、海外において多数の展覧会・演奏会・上映会等を開催し、教育研究活動の成果を積極的に発信しており、2019 年度は 70 件以上の実施を記録した。

(B)　全学として、海外実践研修型授業への学内助成事業「アーツ・スタディ・アブロード・プログラム(ASAP)」を毎年度実施し、参加学生を「海外派遣奨学金」により支援することで、海外における学生の教育研究成果の発表を促進した。

(C)　「大学の世界展開力強化事業」として採択された 4 件の取組を推進し、トルコ・イスラエル、中国・韓国、ASEAN 諸国、アメリカの芸術系大学・機関への教員・学生の派遣を促進し、現地での制作・展示・公演等の活動を積極的に実施している。**（【再掲】別添資料 27-02,27-03,27-08,27-09）**

2019 年 5 月には、ASEAN 諸国の芸術系大学との交流事業の一環として、アウンサンスーチー国家最高顧問の指示により日メコン交流年事業としてミャンマー政府が企画したヤンゴンでの展覧会「Beauty of Mekong」に、本学美術学部及び映像研究科が誘致を受け、漆芸作品およびメディアアート作品を展示した。同展覧会のオープニング式典には、ミャンマー政府の宗教・文化大臣を筆頭に、メコン諸国以外からもシンガポール大使が出席するなど各国外交団の姿も多数見られたほか、現地メディアも詰めかけ、広く報道された。

(D)　2018 年度、本学と南カリフォルニア大学（USC）およびジャパン・ハウスロサンゼルスの主催により、米国・ロサンゼルスの AratanitTheatre において、「音楽とアニメーションの調べ in LA」を開催した。この取組は、本学がアニメーション化したヴィヴァルディによる名曲「四季」の音楽世界の映像と、本学及び USC 両音楽学部の精鋭学生と本学澤和樹学長による生演奏とを AI（人工知能）技術により同期させて上映・演奏するライブ・アニメーション・コンサートである。実施の度に速度等が微妙に変化する生演奏に合わせ、本学 COI 拠点とヤマハが共同開発した AI 技術によりアニメーションを同期上映するのは世界初であり、会場収容人数 880 人に対して 1600 人以上の申し込みがあり、キャンセル待ちが出るほどの盛況となったほか、コンサートの様子は、NHK の全国ニュース及び NHK World で放送され、JR のトレインニュースでも繰り返し放映された。**（別添資料 27-67）**

また、2019 年度は、同コンサートをフランスの第 43 回アヌシー国際アニメーション映画祭の特別会場のアヌシー城内で上演した。加えて、エストニアやブルカリアにおいても上演し、ブルガリア国立文化宮殿では、3000 人の観客席を有するホールが創設以来初めて満席になるという快挙となった。

(E)　本学 COI 拠点を中心として、NICAS（オランダ芸術科学保存協会）との協定に基づく共同研究、人材交流等を実施し、2018 年 2 月にオランダ・ボイマンス美術館での「BABEL／Old Masters Back From JAPAN」展において「バベルの塔」拡大複製画、３D 解説映像、動く絵画作品の 3 点を出展し、多数の現地メディアから取材を受ける等好評を得た。

(F)　美術学部・研究科においては、シュトゥットガルト美術アカデミーおよびソウル大学との共同によるソウル大学での交流展覧会の開催、オーストラリア国立大学（Canberra)で開催された第 13 回 ANZACA（オーストラリア NZ 合同臨床解剖学会）への参加、Korea Craft & Design Foundation 主催の International Craft Forum 2019「Why Craft Now!」での招待講演、カナダ・バンクーバーで開催された TED2019 への登壇等、海外における教員・学生の活動を積極的に実施している。

また、2018 年度、カンボジア・シェムリアップで開催された「Asian Lacquer Craft Exchange Program」の展覧会に教員・学生が出品し、日本の漆芸の研究成果をアジア各国の来場者に広く発表すると同時に、漆芸文化を通じて、アジア各国の大学やアーティストとの交流を促進した。

2019 年度には、ニューヨーク州イサカの INK SHOP ギャラリーにおいて、版画研究室の学生と教員の展覧会を開催し、ギャラリートークでは本学および学生の取り組み等を紹介した。また、フィンランドのユヴァスキュラ美術館で開催された第 15 回目となる国際版画トリエンナーレに東京藝術大学として招待を受け、版画研究室とデザイン科が共同で出品・参加し、本学の教育活動および学生の研究活動の様子を強く印象付けることが出来た。また、イタリアミラノフォーリサローネに、本学のファクトリーラボと株式会社ムラヤマとの共同研究成果として、「体験性」をテーマに教員・学生が制作した作品を出品・展示し、１点の作品が成約した。加えて、多様な人との出会い方、つながり方に創造性を携え働きかけていくアートプロジェクトである「TURN プロジェクト」の一環として、ポーランドのヴロツワフ美術大学と共同で現地の高齢者団体とのワークショップを実施し、3 週間にわたり制作と交流を行い、その成果としてヴロツワフ美術大学内にて展覧会を開催した。

(G)　音楽学部・研究科においては、韓国の延世大学音楽学部との交流事業、管打楽専攻を中心としたアメリカシカゴでのミッドウェストクリニックコンサートへの参加、モスクワ音楽院でのワークショップ、英国湖水地方音楽祭・講習会への参加、シンガポールで行われた第 3 回ＰＡＭＳ(アジア太平洋音楽大学連盟)への参加、オランダのホルンフェスティバルへの参加等、教員・学生の海外における公演や交流授業を積極的に実施した。

2018 年度には、本学と英国王立音楽院の学生による合同オーケストラ交流演奏会を英国と日本において開催した（英国において英国王立音楽院及びオックスフォードの２公演)。また同年、本学においてシベリウス音楽院との交流演奏会、延世大学校との交流演奏会を開催した。加えて 2019 年度には、東京藝大ウィンドオーケストラが南仏ラ・クロワ・ヴァルメールでの吹奏楽フェスティバルおよびパリ日本文化会館での演奏を実施し、技術面・演奏表現面において現地で高い評価を得た。

(H)　映像研究科においては、2018 年度に、ジャパン・ハウス ロサンゼルスにて、南カリフォルニア大学(USC)映画芸術学部アニメーション＆デジタルアート学科、カリフォルニア芸術大学(CalArts)映像・ビデオ学部実験アニメーション専攻の三機関による「アニメーションの夕べ～日米アニメーション上映会～」

と題した学生作品上映会を開催した。

また、文化庁 ASEAN 文化交流・協力事業（映画・アニメーション分野）として毎年度実施している「デジタルシネマ撮影照明・編集ワークショップ in マレーシア」「アニメーションブートキャンプ ASEAN」において、研究科の教員が専門家として参画したほか、タイおよびミャンマーへの学生派遣を実施し、現地でワークショップや上映会を開催した。

加えて、海外における上映会・交流会の際に必要となる英語によるプレゼンテーション能力やピッチ（売り込み）能力の開発を目的に、自身のアニメーション作品等についてシノプシス（あらすじ）や紹介文を英語で書く等の実践的な教育プログラムを提供する新たな授業科目「国際コミュニケーション演習」を新規開設した。

(I)　国際芸術創造研究科においては、「ソウル-東京-台北　アートリサーチ・ワークショップ」等を開催し、学生および教員の海外における共同研究会や成果発表を促進しているほか、ベトナムのホーチミン市美術大学およびベトナム国家音楽院、ラオスの国立美術学校等に学生・教員を派遣し、国際共同プロジェクトとして展覧会や演奏会等を実施した。

また、2017 年度の「第７回モスクワ・ビエンナーレ 2017」および、2018 年度にロスチャイルド館（パリ）で開催された展覧会「深みへー 日本の美意識を求めて ー」展において、本研究科の教員がキュレーターを務め、学生１名がキュレートリアル・アシスタントに選出された。

加えて、2018 年度に復星アートセンター（上海）で開催された「Ｓａｕｄａｄｅ －Ｕｎｍｅｍｏｒａｂｌｅ Ｐｌａｃｅ ｏｆ Ｔｉｍｅ」展において、学生１名がキュレートリアル・アシスタントに選出され、2019 年度にアイルランド国立近代美術館で開催された展覧会「欲望：２０世紀の初めからデジタル時代のいたるまでのアートと欲望のあり方の変遷」において、１名の学生が映像作品を出展し、１名の学生がキュレーションを務めた。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－１－４－２）

上記の通り、海外大学・機関等との連携等により、海外の芸術文化資源を活かした共同プロジェクトや、新興国等に対する芸術教育研究に係る総合的な支援等の国際的な芸術文化外交に資する取組も含め、海外における教員・学生の制作・展示・公演等の活動を積極的に実施し、国際舞台における教育研究成果の公開を推進し、国際的な芸術文化の発展・振興に寄与するとともに、芸術文化外交戦略をもって我が国の国際プレゼンスの向上に繋げた。第３期中期目標期間中に、海外における教員・学生の制作・展示・公演等の活動の年間単位での実施数を７０件程度とするという目標に向けて、各年度の計画を上回る水準で達成している。

また、これらの取組により、グローバル人材の育成に係る国際舞台での実践的なプログラムが構築され、芸術分野において先導的役割を担う卓越した芸術家・研究者およびアートプロデュース人材の戦略的な育成に係る機能が大きく強化され、個性の伸長に繋がった。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画４－１－４－２）

(A)～(I)　海外における芸術活動の促進に係る機会と支援の充実。

(A)～(I)　海外における展覧会・演奏会等の発信活動に係る拠点形成として、海外大学・機関との持続的なネットワークおよび交流関係の構築。

（２）中項目４－２「附属学校」の達成状況の分析

〔小項目４―２－１の分析〕

小項目の内容	**【Ⅰ－４－（２）－１】** 国際的に優れた演奏家や作曲家を育成するため、専門教育を中心としたカリキュラム等を、高大連携を軸に体系的に整備する。

○小項目４－２－１の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	2	0
中期計画を実施している。	2	0
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	4	0

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」

本小項目については、関係する全ての中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および各中期計画の達成状況に記載の通り、顕著な実績を挙げている。

中期計画４－２－１－１、４－２－１－２、４－２－１－３に記載の通り、海外における演奏研修旅行や、大学との連携による音楽理論（和声）に係る高大一貫型カリキュラムの構築、オーケストラ、合唱、邦楽合奏、ソルフェージュ、専攻実技や語学教育に係る一体的な授業の実施、海外からの一線級ユニット誘致教員による演奏指導など、高校・大学間の連携を軸として、国際的に優れた演奏家や作曲家を育成するための専門教育を中心としたカリキュラムの体系的な整備を推進しており、成績会議を前期・後期１回ずつ高大合同で行い、情報交換を緊密にし、それを日々の教育活動にフィードバックするＰＤＣＡサイクルにより教育の更なる充実を図るなど、高大の教育が連続性・共同性を有するようにプログラムを構築している。また、中期計画４－２－１－４に記載の通り、国際的に優れた演奏家や作曲家を育成するための取組および成果について、Web サイト、研究紀要、報告書等において情報を発信するとともに、地域連携事業や国際連携事業の一環として成果発表演奏会を開催するなど、国内外において積極的に活動を実施し、情報・成果の普及・公開を促進している。

○特記事項（小項目４－２－１）
(優れた点)
・　2016 年度よりスーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受け、「音楽の力で世界を魅了する先導的グローバルアーティスト育成プロジェクト」を推進している。その一環として、イギリスまたはハンガリーへの演奏研修旅行を毎年度実施し、イギリスにおいては、英国ロイヤルアカデミーでのマスタークラス（ピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、ハープ、フルート、トロンボーン）を受講し、演奏会（邦楽合奏、ピアノ連弾、トロンボーン、弦楽合奏）を開催した。また、パーセルスクールでは、生徒間の交流会、ピアノ即興授業受講、ハープレッスン、オーケストラ合同練習、邦楽合奏公開交流を行い、合同演奏会を実施した。研修旅行では、演奏解説、演奏内容、邦楽楽器紹介、交流会進行等についてすべて英語で実施できるように準備を行い、実現した。（中期計画４－２－１－１）

・　2019 年度に、ハンガリーのリスト音楽院での演奏会等を実施した。演奏会は、日本～ハンガリー友好 150 周年の記念行事の一つとして、日本・ハンガリー両国の外務省/大使館により認定され、演奏は現地観客から高く評価された。（中期計画４－２－１－４）

（特色ある点）

・　大学の言語・音声トレーニングセンターと連携し、大学の英語の授業に高校生が参加できる環境を整え、また、2018 年度からは、ドイツ語、フランス語の授業でも高大連携を開始した。（中期計画４－２－１－１）

・　附属高校のすべての専攻において、音楽理論（和声）において高大一貫型カリキュラムを実施するとともに、オーケストラ、合唱、邦楽合奏、ソルフェージュ、専攻実技等の実技系教育はもちろんのこと、学校行事や日常の教育活動全般、生徒の生活面に関しても常に大学各部会と連携して実施している。（中期計画４－２－１－２）

・　音楽学部の教員による専門教育に加えて、大学がパリ国立高等音楽院等から誘致した一線級アーティストを附属高校にも招き、公開レッスン、トークコンサート、室内楽の指導、オーケストラの指導等を実施した。レッスンは全校生徒に聴講させ、世界水準の高度な音楽を学ぶ機会とした。（中期計画４－２－１－２）

・　SGH 全国高校生フォーラム、SGH 中間報告会、SGH 甲子園等において、生徒による発表、プレゼンを含む情報発信を積極的に実施した。また、地域連携として、北区文化振興財団と連携した北区主催「輝く☆未来の星コンサート」を開催し、成果を発信した。（中期計画４－２－１－４）

（今後の課題）

・　国際的な経験を積むための演奏研修旅行や高大連携による教育プログラムを持続的に実施しつつ、カリキュラムの検証・改善を行う（中期計画４－２－１－１、４－２－１－２、４－２－１－３）

〔小項目４―２－１の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画４－２－１－１に係る状況≫

中期計画の内容	【34】国際的に活躍する演奏家・作曲家を目指すため、高等学校として必要な一般教科とのバランスを考慮しつつ、専門性に特化したカリキュラムを体系的に整備する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－２－１－１）

(A)　2016 年度よりスーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受け、「音楽の力で世界を魅了する先導的グローバルアーティスト育成プロジェクト」を推進している。その一環として、イギリスまたはハンガリーへの演奏研修旅行を毎年度実施し、イギリスにおいては、英国ロイヤルアカデミーでのマスタークラス（ピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、ハープ、フルート、トロンボーン）を受講し、演奏会（邦楽合奏、ピアノ連弾、トロンボーン、弦楽合奏）を開催した。また、パーセルスクールでは、生徒間の交流会、ピアノ即興授業受講、ハープレッスン、オーケストラ合同練習、邦楽合奏公開交流を行い、合同演奏会を実施した。研修旅行では、演奏解説、演奏内容、邦楽楽器紹介、交流会進行等についてすべて英語で実施できるように準備を行い、実現した。**（別添資料 27-68）**

(B)　大学の言語・音声トレーニングセンターと連携し、大学の英語の授業に高校生が参加できる環境を整え、また、2018 年度からは、ドイツ語、フランス語の授業でも高大連携を開始した。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－２－１－１）
　上記の通り、演奏研修旅行や大学との連携による語学の授業等を、高大連携を軸に体系的に整備したことにより、国際的に活躍する演奏家・作曲家を目指すための専門教育を中心としたカリキュラムの整備に繋がった。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画４－２－１－１）

(A)～(B)　国際的な経験を積むための演奏研修旅行や高大連携による語学教育プログラムを持続的に実施しつつ、カリキュラムの検証・改善を行う。

≪中期計画４－２－１－２に係る状況≫

中期計画の内容	【35】附属高校における演奏活動の充実と向上を図るため、音楽学部との連携授業（オーケストラ、室内楽、ソルフェージュ等）を積極的に実施し、有機的で密接な高大連携を実現する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－２－１－２）

(A)　附属高校のすべての専攻において、音楽理論（和声）において高大一貫型カリキュラムを実施するとともに、オーケストラ、合唱、邦楽合奏、ソルフェージュ、専攻実技等の実技系教育はもちろんのこと、学校行事や日常の教育活動全般、生徒の生活面に関しても常に大学各部会と連携して実施している。

(B)　2019 年度には、大学と連携したオーケストラの授業に、上海音楽学院附属校の生徒が参加するなど、高大連携の成果を海外の学校にも経験してもらうことができた。

(C)　成績会議を前期・後期１回ずつ高大合同で行い、情報交換を緊密にし、それを日々の教育活動にフィードバックするＰＤＣＡサイクルにより教育の更なる充実を図るなど、高大の教育が連続性・共同性を有するようにプログラムを構築している。

(D)　附属高校運営委員会においても、大学各部会と情報交換も緊密に実施し、高大合同で生徒の情報共有や問題への対応を図るなど、大学との情報共有を実施している。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－２－１－２）

上記の通り、附属高校における演奏活動の充実と向上を図るため、音楽学部との連携授業（オーケストラ、室内楽、ソルフェージュ等）を積極的に実施し、有機的で密接な高大連携を実現しており、これらの取組により、国大連携を軸とした、国際的に優れた演奏家や作曲家を育成するための専門教育を中心としたカリキュラムの体系的な整備に繋がった。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画４－２－１－２）

(A)～(D)　高校・大学間の連携による取組について、更なる充実を図る。

≪中期計画４－２－１－３に係る状況≫

中期計画の内容	【36】音楽学部の機能強化と一体となった高度な専門教育を行うため、音楽学部教員はもとより、海外からの一線級ユニット誘致教員との連携の下に、より効果的な授業方法の開発と研究を行う。
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－２－１－３）

(A)　音楽学部の教員による専門教育に加えて、大学がパリ国立高等音楽院等から誘致した一線級アーティストを附属高校にも招き、公開レッスン、トークコンサート、室内楽の指導、オーケストラの指導等を実施した。レッスンは全校生徒に聴講させ、世界水準の高度な音楽を学ぶ機会とした。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－２－１－３）

上記の通り、音楽学部の機能強化と一体となった高度な専門教育として、音楽学部教員はもとより、海外からの一線級ユニット誘致教員による演奏指導等を附属高校においても実施し、より効果的な授業方法の開発と研究を進めたことにより、国際的に優れた演奏家や作曲家を育成するための専門教育の充実に繋がった。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画４－２－１－３）

(A)　音楽学部・研究科におけるグローバル人材育成に係る教育プログラムの機能強化と一体的に、附属高校における高大連携による取組について、更なる充実を図る。

≪中期計画４－２－１－４に係る状況≫

中期計画の内容	【37】高大連携を軸にした専門教育の研究成果を、国内はもとより海外の関係機関との交流事業においても効果的に活用するとともに、研究紀要や研究会においても積極的に発信する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－２－１－４）

(A)　高大連携を軸とした音楽教育の成果を、附属高校のWebサイト、学校説明会、国内外への演奏旅行、公開実技試験、定期演奏会、ピアノ初見アンサンブル演奏会、研究紀要、スーパーグローバルハイスクール事業の報告書等を通して、内外に積極的に発信した。

(B)　SGH全国高校生フォーラム、SGH中間報告会、SGH甲子園等において、生徒による発表、プレゼンを含む情報発信を積極的に実施した。

(C)　地域連携として、北区文化振興財団と連携した北区主催「輝く☆未来の星コンサート」を開催し、成果を発信した。

(D)　2019年度には、ハンガリーのリスト音楽院での演奏会等を実施した。演奏会は、日本～ハンガリー友好150周年の記念行事の一つとして、日本・ハンガリー両国の外務省/大使館により認定され、演奏は現地観客から高く評価された。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－２－１－４）

上記の通り、Webサイト、研究紀要、報告書等において情報を発信するとともに、地域連携事業や国際連携事業の一環として成果発表演奏会を開催するなど、国内外において積極的に活動を実施し、国際的に優れた演奏家や作曲家を育成するための取組に係る成果の普及・公開に繋がった。

○2020年度、2021年度の実施予定（中期計画４－２－１－４）

(A)～(D)　引き続き、国内外において成果の発信を進める。

〔小項目４―２－２の分析〕

小項目の内容	**【Ⅰ－４－（２）－２】** 音楽学部との連携を強化し、学外からの意見を積極的に学校運営に反映させるとともに、全国の音楽高校の拠点校としての役割を実践する。

○小項目４－２－２の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	0	0
中期計画を実施している。	2	0
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	2	0

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」

本小項目については、関係する中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および中期計画の達成状況に記載の通り、特色のある取組を実施している。

中期計画４－２－２－１に記載の通り、音楽学部の機能強化と一体となった学校運営を確立するとともに、学校評議会等の学外からの意見を積極的に活用しており、音楽学部との連携強化および適切な学校運営に繋げている。
また、中期計画４－２－２－２に記載の通り、全国の芸術高校や音楽高校の拠点校として、協議会等の機会や、Web サイトにおける情報発信の充実等により、現代社会に適合した早期芸術教育の提案及びその実践を牽引している。

○特記事項（小項目４－２－２）
(優れた点)
・　2015 年度より、附属高校は全国音楽高等学校協議会の理事長校となっており、校長が理事長に就任している。理事長校として年 3 回の理事会を主催するとともに、全国の音楽高校や音楽コースを持つ学校の拠点校として、予算や事務を管理し、全国大会の開催を支えている。2019 年度には、「未来を創る音楽家を育てるために」をテーマとして、本校において全国音楽高等学校協議会全国大会を実施し、生徒たちの演奏や公開授業内での発表は大会参加者より高い評価を受け、分科会等での活発な意見交換へと繋がった。（中期計画４－２－２－２）

(特色ある点)
・　附属高校の Web サイトにおいて、SGH に係る特設ページを日英両言語で掲載しており、全国の音楽高校や音楽コースを持つ学校の拠点校として、早期音楽教育モデルを提示・発信している。（中期計画４－２－２－２）

(今後の課題)
・　全国の芸術高校や音楽高校の拠点校としての取組や情報発信の促進。（中期計画４－２－２－２）

〔小項目４―２－２の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画４－２－２－１に係る状況≫

中期計画の内容	【38】音楽学部の機能強化と一体となった学校運営を確立するとともに、学校評議会等の学外からの意見を積極的に活用する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－２－２－１）
(A)　附属高校の運営委員会には校長のほか、大学の音楽学部長や各学科の主任が加わり、学校運営に参画している。

(B)　学外の学校評議員による学校評議員会を年２回開催し、学校運営や SGH の活動に関する客観的な指摘や意見をいただき、積極的に活用しているほか、学外者に委託している監事監査では、附属高校の監査も年１回実施し、学校運営に関する客観的な意見を積極的に活用している。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－２－２－１）
上記の通り、音楽学部の機能強化と一体となった学校運営を確立するとともに、学校評議会等の学外からの意見を積極的に活用しており、音楽学部との連携強化および適切な学校運営に繋がっている。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画４－２－２－１）
(A)～(B)　引き続き、高大連携体制による学校運営を行いつつ、外部からの意見聴取や第三者評価等の充実を図る。

≪中期計画４－２－２－２に係る状況≫

中期計画の内容	【39】全国芸術高等学校長会や全国音楽高等学校協議会を通し、全国の芸術高校や音楽高校の拠点校として、現代社会に適合した早期芸術教育の提案及びその実践を牽引する。
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－２－２－２）

(A)　2015 年度より、附属高校は全国音楽高等学校協議会の理事長校となっており、校長が理事長に就任している。理事長校として年 3 回の理事会を主催するとともに、全国の音楽高校や音楽コースを持つ学校の拠点校として、予算や事務を管理し、全国大会の開催を支えている。

(B)　2019 年度に、「未来を創る音楽家を育てるために」をテーマとして、本校において全国音楽高等学校協議会全国大会を実施し、生徒たちの演奏や公開授業内での発表は大会参加者より高い評価を受け、分科会等での活発な意見交換へと繋がった。

(C)　附属高校の Web サイトにおいて、SGH に係る特設ページを日英両言語で掲載しており、全国の音楽高校や音楽コースを持つ学校の拠点校として、早期音楽教育モデルを提示・発信している。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－２－２－２）
　上記の通り、全国の芸術高校や音楽高校の拠点校として、協議会等の機会や、Web サイトにおける情報発信の充実等により、現代社会に適合した早期芸術教育の提案及びその実践を牽引している。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画４－２－２－２）

(A)～(C)　引き続き、全国の芸術高校や音楽高校の拠点校としての取組の促進していく。

（３）中項目４－３「男女共同参画推進」の達成状況の分析

〔小項目４―３－１の分析〕

小項目の内容	**【Ⅰ－４－（３）－１】** イノベーション創出やグローバル展開等大学改革・機能強化と有機的に連動したダイバシティな教育研究活動、大学運営を推進する観点から、男女共同参画に関する推進体制・環境整備や各種支援システム等を充実させる。

○小項目４－３－１の総括
≪関係する中期計画の実施状況≫

実施状況の判定	自己判定の内訳（件数）	うち◆の件数※
中期計画を実施し、優れた実績を上げている。	1	0
中期計画を実施している。	1	0
中期計画を十分に実施しているとはいえない。	0	0
計	2	0

※◆は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」

本小項目については、関係する全ての中期計画を着実に実施しており、中期目標の達成が見込まれることに加え、以下および各中期計画の達成状況に記載の通り、顕著な実績を挙げている。

中期計画４－３－１－１および４－３－１－２に記載の通り、ダイバシティな教育研究活動・大学運営を推進するための組織を新設し、女性教職員の教育研究活動等について支援策を充実したことにより、イノベーション創出やグローバル展開等の大学改革・機能強化と有機的に連動する形で、男女共同参画に関する環境整備に繋がった。

○特記事項（小項目４－３－１）
(優れた点)

・　2019 年度時点で、ダイバーシティな教育研究環境に係る指標のひとつである女性研究者在職比率は、44.3%である。同数値については、2016 年度から 39.9%、42.0%、42.7%、44.3%と推移しており、着実に増加している。また、女性上位職比率についても、2016 年度から 18.1%、19.2%、21.3%、23.8%と推移しており、着実に増加している。（中期計画４－３－１－１、４－３－１－２）

・　2016 年度、男女共同参画実施や女性研究者支援等、本学におけるダイバーシティ環境整備推進に係る全学的な戦略を企画・立案することを目的として、新たに「ダイバーシティ推進室」を設置した。コーディネーター等専門スタッフを雇用し、女性研究者に対する支援・相談体制を整備するとともに、研究活動サポートを担う「教育研究支援員制度」を構築し、運用を開始した他、各キャンパスにおける交流スペースとして「ダイバーシティラウンジ」を整備した。
　また、ダイバーシティ環境整備事業全体を「Hopping Women Project」として位置付け、専用 WEB サイトの開設や各種セミナー、シンポジウムを開催したほか、研究活動支援等のキャリア支援プログラム「ダイバーシティパイロットプログラム」を実施する等、多様な研究環境実現に向けた取組を推進した。（中期計画４－３－１－１）

（特色ある点）

・　2017 年度に、妊娠・出産・子育て・介護等のライフイベントを理由として一定期間研究活動の継続が困難、あるいは研究時間が十分に確保できない研究者に対して支援員を配置する「教育研究支援員制度」を拡充したほか、民間のベビーシッターサービスで使用できる割引券を本学勤務の女性研究者等に対し発行する「ベビーシッター派遣事業」を新たに導入した。（中期計画４－３－１－１）

・　2018 年度、女性の活躍に対する意識啓発を図るため「芸術系大学女性教育・研究者シンポジウム」を開催した。本学のダイバーシティ推進室長である国谷裕子理事による基調講演「今、女性の活躍に向けて伝えたいこと」のほか、本学及び在京の芸術系大学の女性教員（武蔵野美術大学教授、女子美術大学教授、東京音楽大学教授、桐朋学園大学教授）が登壇し、芸術分野における女性のキャリア構築をテーマに、各大学・専門分野での教育と実践の現場に係る事例や自身の経験を踏まえたパネルディスカッションを行った。当日はお子様連れの方も来場できるよう臨時託児室を設け、186 名の参加者があった。（中期計画４－３－１－１）

・　2019 年度、６～７月を「東京藝大ダイバーシティ月間」と位置づけ、ダイバーシティをテーマにした様々な講演・シンポジウムや、出産・育児等を経験した女性アーティスト等によるイベントを実施し、女性の活躍に対する学内の理解を深めた。具体的には、トークセッション「女性のアーティストが親になる時」では、現代美術分野で活躍する女性アーティストにより、出産・育児が自らのキャリアにどのような影響を及ぼしたのかについて経験談を語る講演会を実施した。（中期計画４－３－１－１）

・　2018 年度より、多様な人材の確保を促進すべく、女性や外国籍を有する者、40 歳未満の若手を講師以上の専任教員として採用決定した部局を対象とするインセンティブ制度を導入した。（中期計画４－３－１－１）

（今後の課題）

・　ダイバーシティな教育研究体制・環境の構築に向けた更なる施策の充実による、男女共同参画の推進。（中期計画４－３－１－１、４－３－１－２）

〔小項目４―３－１の下にある中期計画の分析〕
≪中期計画４－３－１－１に係る状況≫

中期計画の内容	【40】学長の下に、男女共同参画推進をはじめとするダイバシティな教育研究活動、大学運営を推進するための組織を新設し、迅速な意思決定による人員配置や支援メニューの実行等、機動性・即応性を活かした女性教職員支援を行う。また今後一層の飛躍が期待される女性教員（研究員相当含む）の任用割合を、平成３２年度までに、概ね４５％まで増加させる。
実施状況（実施予定を含む）の判定	■　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 □　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－３－１－１）

(A)　2019 年度時点で、ダイバーシティな教育研究環境に係る指標のひとつである女性研究者在職比率は、44.3％である。同数値については、2016 年度から 39.9％、42.0％、42.7％、44.3％と推移しており、着実に増加している。

(B)　2016 年度、男女共同参画実施や女性研究者支援等、本学におけるダイバーシティ環境整備推進に係る全学的な戦略を企画・立案することを目的として、新たに「ダイバーシティ推進室」を設置した。コーディネーター等専門スタッフを雇用し、女性研究者に対する支援・相談体制を整備するとともに、研究活動サポートを担う「教育研究支援員制度」を構築し、運用を開始した他、各キャンパスにおける交流スペースとして「ダイバーシティラウンジ」を整備した。
　ダイバーシティ環境整備事業全体を「Hopping Women Project」として位置付け、専用 WEB サイトの開設や各種セミナー、シンポジウムを開催した他、研究活動支援等のキャリア支援プログラム「ダイバーシティパイロットプログラム」を実施する等、多様な研究環境実現に向けた取組を推進した。**（別添資料 27-69）**

(D)　2017 年度に、妊娠・出産・子育て・介護等のライフイベントを理由として一定期間研究活動の継続が困難、あるいは研究時間が十分に確保できない研究者に対して支援員を配置する「教育研究支援員制度」を拡充したほか、民間のベビーシッターサービスで使用できる割引券を本学勤務の女性研究者等に対し発行する「ベビーシッター派遣事業」を新たに導入した。**（別添資料 27-70）**
　また、「代替教職員の採用に関する申合せ」を制定し、育児休業に係る代替者の採用に関して、事務職員を対象に加えるとともに、産前休暇、産後休暇より代替者を採用できることとして、育児支援制度の充実を図った。

(E)　2017 年度、グローバルな観点から芸術分野におけるダイバーシティの現状課題等を認識すべく、イギリスから研究者を招聘し「東京藝大ダイバーシティシンポジウム」を開催したほか、自身をブランディングする方法、キャリアプラン設計の仕方、グローバルな活動に欠かせない英語のプレゼンテーション技術など、アーティストや研究者としてこれからの社会で活躍するために必要な知識とスキルの習得を目指すものとして、外部講師等による「若手研究者向けスキルアップ研修」を計３回開催した。

(F)　2018 年度、女性の活躍に対する意識啓発を図るため「芸術系大学女性教育・研究者シンポジウム」を開催した。本学のダイバーシティ推進室長である国谷裕子理事による基調講演「今、女性の活躍に向けて伝えたいこと」のほか、本

学及び在京の芸術系大学の女性教員（武蔵野美術大学教授、女子美術大学教授、東京音楽大学教授、桐朋学園大学教授）が登壇し、芸術分野における女性のキャリア構築をテーマに、各大学・専門分野での教育と実践の現場に係る事例や自身の経験を踏まえたパネルディスカッションを行った。当日はお子様連れの方も来場できるよう臨時託児室を設け、186 名の参加者があった。

(G)　2019 年度、６～７月を「東京藝大ダイバーシティ月間」と位置づけ、ダイバーシティをテーマにした様々な講演・シンポジウムや、出産・育児等を経験した女性アーティスト等によるイベントを実施し、女性の活躍に対する学内の理解を深めた。具体的には、トークセッション「女性のアーティストが親になる時」では、現代美術分野で活躍する女性アーティストにより、出産・育児が自らのキャリアにどのような影響を及ぼしたのかについて経験談を語る講演会を実施した。

また、コンサート「音もだち航空で行く世界の音楽ツアー」では、子育てと演奏活動を両立する女性演奏家による、主に学内教職員・学生を対象にしたファミリーコンサートを開催し、女性演奏家が自らの育児経験を反映したコンサート内容によって、芸術分野における女性のキャリアのあり方のひとつを示すことができた。

加えて、「ダイバーシティ月間」の一環として、芸術系大学における女性のキャリア支援をテーマにシンポジウム「芸術・女性・キャリア」を開催した。芸術分野の第一線で活躍する OG の講演と、大学・企業それぞれの立場から芸術分野における女性のキャリア支援に関する講演を行い、シンポジウム後には登壇者・来場者による情報交換会も開き、女性特有の悩みや問題意識について共有することができた。

(H)　2018 年度より、多様な人材の確保を促進すべく、女性や外国籍を有する者、40 歳未満の若手を講師以上の専任教員として採用決定した部局を対象とするインセンティブ制度を導入した。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－３－１－１）

上記の通り、ダイバシティな教育研究活動・大学運営を推進するための組織を新設し、女性教職員の教育研究活動等について支援策を充実したことにより、イノベーション創出やグローバル展開等の大学改革・機能強化と有機的に連動する形で、男女共同参画に関する環境整備に繋がった。2020 年度までに女性教員（研究員相当含む）の任用割合を概ね４５％まで増加させるという目標に向けて、各年度の計画を順調に達成している。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画４－３－１－１）

(A)～(H)　ダイバーシティな教育研究体制・環境の構築に向けた更なる施策の充実による、男女共同参画の推進。

≪中期計画４－３－１－２に係る状況≫

中期計画の内容	【41】男女の機会均等を実現し、ダイバシティな大学の管理・運営の実現に向けての施策・方針決定へ参画を拡充するため、女性上位職の割合を、平成３２年度までに、概ね２５％まで増加させる。
実施状況（実施予定を含む）の判定	□　中期計画を実施し、優れた実績を上げている。 ■　中期計画を実施している。 □　中期計画を十分に実施しているとはいえない。

○実施状況（中期計画４－３－１－２）

(A)　2019 年度時点で、ダイバーシティな教育研究環境に係る指標のひとつである女性上位職比率は、23.8％である。同数値については、2016 年度から 18.1％、19.2％、21.3％、23.8％と推移しており、着実に増加している。

(B)　2017 年度に、自身をブランディングする方法、キャリアプラン設計の仕方、グローバルな活動に欠かせない英語のプレゼンテーション技術など、アーティストや研究者としてこれからの社会で活躍するために必要な知識とスキルの習得を目指すものとして、外部講師等による「若手研究者向けスキルアップ研修」を計３回開催した。

(C)　2018 年度に、女性の活躍に対する意識啓発を図るため「芸術系大学女性教育・研究者シンポジウム」を開催した。国谷裕子理事による基調講演「今、女性の活躍に向けて伝えたいこと」のほか、本学及び在京の芸術系大学の女性教員（武蔵野美術大学教授、女子美術大学教授、東京音楽大学教授、桐朋学園大学教授）が登壇し、芸術分野における女性のキャリア構築をテーマに、各大学・専門分野での教育と実践の現場に係る事例や自身の経験を踏まえたパネルディスカッションを行った。当日はお子様連れの方も来場できるよう臨時託児室を設け、186 名の参加者があった。また、多様な研究環境の実現や女性芸術家・研究者のキャリア支援に向けた取組として、セミナーや研修を多数開催した。

(D)　2018 年度より、多様な人材の確保を促進すべく、女性や外国籍を有する者、40 歳未満の若手を講師以上の専任教員として採用決定した部局を対象とするインセンティブ制度を導入した。

○小項目の達成に向けて得られた実績（中期計画４－３－１－２）
　上記の通り、ダイバシティな教育研究活動・大学運営を推進するための組織を新設し、女性教職員の教育研究活動等について支援策を充実したことにより、2020 年度までに女性上位職の割合を２５％まで増加させるという目標に向けて、各年度の計画を順調に達成しており、ダイバシティな大学の管理・運営の実現に繋がっている。

○2020 年度、2021 年度の実施予定（中期計画４－３－１－２）

(A)～(D)　ダイバーシティな教育研究体制・環境の構築に向けた更なる施策の充実による、男女共同参画の推進。